
緋弾のアリア ～黒と紫の邂逅～

ラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ー 黒と紫の邂逅 ー

【Nコード】

N8650V

【作者名】

ラルド

【あらすじ】

暗黒色金を持つ伝説的な武偵、萩原願。雷を操る伝説的な超偵、成瀬・レインハート。二人の伝説の軌跡が交わったとき、新たな道が拓けた……!!

これは緋弾のアリア ー 紫電の雷神 ー と緋弾のアリア ー 暗黒の刃 ー のコラボ作品です。

キャラ崩壊警戒。ラルド系作品が苦手な方はブラウザバックをお勧めいたします。

オリキャラ設定 ver1・02（前書き）

Vランクとは？

国際武偵連盟が二人の世界最高峰の日本人武偵の為に新しく定め
たランク。現在は世界で二名しか登録されていない。内訳は以下に記
す。

萩原 願

霧藤 遼

オリキャラ設定 ver1・02

萩原願 はぎわらげん Sランク ビクトリー（Vランクを武偵高が任命できないから。 国際武偵ランク V）

強襲科

身長 180cm
体重 70キロ

すこし藍の色素が混ざった漆黒の髪は襟にかかっている。
CLANNADの芳野祐介を基にしている。
全身には刺し傷、銃創、火傷などの傷痕が残っている。

萩原家の第八十八代当主（現当主）。 萩原家は武田家臣団の裏の顔であつたとされている。

服装

学校が無い休日はTシャツにカーゴパンツ。
冬は大体防弾制服・黒にコートを着ている。
Clothes love 黒いCFG（翠・柚梨佳・遼とお揃い）をいつも着用している。

伊椎翠 いしづりよく Sランク（Rランク格下げ） 強襲科

身長 170cm

体重 『検閲により削除されました』

黒緑色の髪は背中くらいまで無造作に伸ばされている。
空の境界の両儀式りょうぎしきを基にしている。

伊椎家は徳川幕府を裏から支え続けた、まさに裏方の家系。第八十五代当主に内定。

服装

学校が無い休日はTシャツにジーンズ。
寒ければ上に真っ赤な革ジャン。

黒いCFG（願・柚梨佳・遼とお揃い）着用。

桂柚梨佳かじらゆづいSランク（Rランク格下げ） 情報科

身長 165cm

体重 『見たら聞いたらクロス（by願）』

焦げ茶色の髪は上背中くらい。

CLANNADの幻想世界の少女を基にしている。

桂家は世界各国の諜報機関に関係者を置く、裏世界の情報屋である。
桂家の分流の一人にはKGBのアダムスカ（リボルバー・オセロツ

ト）がいた。

服装

学校が（ry）Tシャツにロングスカート。
寒ければカーティガン。

黒いCFG（願・翠・遼とお揃い）着用。

きりがふじはるか

霧藤遼 Sランク（Vランク） 謀報科

身長 179cm

体重 69キロ

茶髪は襟ギリギリ。

生徒会の一存の杉崎鍵を基にしている。

日本が世界に誇る「N I N J A」。その中でも最強の「薩摩謀者」の頭目である霧藤家ははっきり言ってめちゃくちゃ強い。

服装

学校が（ry）Tシャツにジーンズ。このジーンズは願との「じゃれあい」でボロボロ。

寒ければネイビーブルーのパーカー。

黒いCFG（願・翠・柚梨佳とお揃い）着用。

オリキャラ設定 ver1.02（後書き）

・・・キャラの挿絵は「ありません」。その辺はどなたかにお任せしちやおうというラルド'sルールです。

「書きたい!」という方はぜひぜひ感想にその旨書き込みください!

それでは、黒と紫の邂逅、スタートです!

（Vランクについて 9月16日追加）

第1話 蹂躪（前書き）

闘い、そのはじめは圧倒的な蹂躪で・・・。

第1話 蹂躪

「成瀬・レインハート。東京武偵高、超能力捜査研究科SSR所属の武偵。ランクは今のところ不明。しかし高校二年生にしてG30を上回る世界最強の超偵であることがわっている。現在は探偵科二年の遠山キンジと寮生活を満喫している。しかしその裏では世界最大規模の超能力結社である『ネメシス』や、米国中央情報局CIAの特殊部隊『メドウサ』を一人で壊滅させたといわれるが詳細は不明である」

——日本国法務省公安調査庁特別諜報部作成、武偵関連資料より抜粋。

「萩原願。東京武偵高、強襲科所属のSランク武偵。国際武偵ランクは初代Vランク。グレードG58（63（推定））。現在は車輛科二年Aランクの武藤剛気、強襲科二年Aランクの不知火亮、諜報科Sランクであり国際Vランクでもある霧藤遼と寮生活を送っている。実際は日本の治安維持組織の重鎮と呼ばれる萩原家の若き当主であり、自身も自衛隊先進特殊コマンド『FOX』の司令官である。米国第四十四代大統領 バラク・オバマや英国首相 デーヴィット・キャメロンなど先進国首脳陣と面識があるとされている」

——自衛隊情報保全隊作成、武偵関連資料01より。

学園島の海岸近くにある公園。普段なら海風に木々が揺れるくらい
の音しかしないその公園が、今日は轟音に包まれていた。竜巻が
二つ電気を帯びながら回転しているのがその原因だろうか。俺はそ
う判じてみるが、普通の武偵からしてみればそんな暇はないのだろ
う。

首を横に動かして、顔の中心を狙っていたスパークした銃弾をか
わす。続けざまに撃ちこまれるそれはまるでレールガンのように速
い。掛け値なしに速い。

「何で当たらない・・・!!」

「俺がかわしているからだな」

軽くそう返すと、その返事のように銃弾の数が倍増した。さすが
は『紫電の雷神』。プラズマをそのまま撃ち込むことも出来るとい
うわけか。

「じゃあ、こっちからも行くぞ」

そう予告し、腰からXD-9を引き抜く。うん、ちゃんと入って
るな。

「手始めは・・・でつかく!!」

引き金を引くと、凄まじい反動が腕に伝わった。フルオート設定
のXD-9はマガジンの中の武偵弾を全て発射するとそのまま何処
かへと吹っ飛んでいった。そして『紫電の雷神』はといえば・・・
「きゅううう・・・」

そんな末期の息を残して深い闇の深遠へと旅立っていた。

「やれやれ・・・」

その後、武偵病院の前に黒焦げになった伝説の超偵が転がって
いたという。

第1話 蹂躪（後書き）

ラルドです。ついにコラボ作品、始まりました！

萩原とレイン、この二人は戦いの後どのような再会を果たすのでしょうか。

萩原やそのほかのキャラクターとコラボしたいという作者の方はぜひともおっしゃってください。
では、今回はこれで。

第2話 H vs H (前書き)

アリア登場です！願VSアリアでアリアは何を思っているのでしょうか！

第2話 H v s H

「おもしろくねえ」

成瀬・レインハートはグレていた。というところ少し語弊があるかもしれないので言い直そう。彼は謎の男に圧倒的な力量の差で負けてしまったのだ。しかし鍛錬しようにも今は病院の中。よって……。

「あああああゝ!!!」

ストレスフルなのである。

「れ、レイン、そんなにイライラしないで……」

なぜか隣にいて幸せそうな顔をしている綾瀬をまるっと無視してレインは考えていた。

『あの技は師匠カナの技の**はず**。しかもそれを自動拳銃で、さらに最強軍用拳銃トイグルでこなすなど絶対に不可能なはず。しかしそれを平然とやってのけたあの男、只者じゃない。しかも水月は黒いナイフでどこかに吹き飛ばされたし、雷神化ができないし』

考えに没頭していたレインは、いきなり病室に飛び込んできた理子に呼び戻された。この世界に。

「レイン！大変だ！アリアがSランク武偵と戦ってる！」

Sランク武偵。それも、アリアと競えるほどの。そう聞いた瞬間、レインは病院から飛び出していた。

始まってから三分。戦いはやはり一方的なものだった。彼女のガバメントは二丁とも闘技場の端っこに吹き飛ばしてあり、二本の太刀も破壊峰でへし折られている。双剣双銃カトラに対して俺はデザートイグルー丁で対抗し、今まさに勝とうとしている。

「あ、あんた……」

「まだしゃべられるのか？タフだな。見た目によらず」

冷笑しながら馬鹿にしてみると、面白いように彼女がキレる。M1911A1ガバメントに飛びついた彼女の胴体にXD-9の9ミリパラベラ

△弾を5発撃ち込む。

「これで何回目だ？」

1 / 36秒もの速度でXDを抜き、引き金をコンマ一秒だけ引く。彼女の制服に弾痕がいくつか出来、彼女はまた倒れてしまう。

「もう終わりでいいよな、蘭豹」

さすがに啞然としていた蘭豹にそういうと、彼女はあわてた様子にならずにきた。そしてタイミング悪く、

昨夜の雑魚が現れた。

「アリア！」

やはりあの男だった。双剣双銃のアリアが、開始して数分とたっていないはずなのにぶっ倒れている。

「くそっ・・・！！」

「・・・」

ため息をついて落胆する男。その後ろではアリアが必死にガバメントを構えている。そしてその細い指が引き金にかかり・・・。

「だから・・・な？」

男が後ろを一瞬たりとも見ずに放った銃弾がアリアのガバメントの銃口に入る。ガバメントのバレルが破裂し、アリアは押されたように後ろに倒れた。

「俺に勝つことは不可能だ。勝ちたいならもつと鍛錬するんだな」

「貴様っ！」

雷弾を5発、間髪いれずに発射する。しかし男はそれを・・・ナイフでかわした。正確には、ナイフの平たい面を壁にして反射したのだ。しかしすでに時は遅し。

「雷花」

一ブローニングハイパワー《ブロウ》を抜き放って撃っていた銃弾が炸裂し、男の体を粉みじんに引き裂く・・・そのはずだった。

能力強制終了
「シャットダウン」

銃弾は、炸裂しなかった。そして50AE弾ですべて弾き飛ばされる。

能力操作
「コマンド」

雷神化しようとした寸前、男が早口で何かをつぶやいた。そして雷神化のプロセスが停止してしまったのだ。

「病人は寝ている」

気配を周りと同化して近づいてきた男に、グリップ銃把で殴られた。意識が——薄れて——

「願くん。人をそんなに軽々しく撃っちゃだめ！」

現在、俺こと萩原願十七歳は膝詰めで説教を受けている。

「願。あんたさあ、ちよつとやりすぎじゃない？いくらあんたが強いからって女の『子』（www）に全力……って言うわけじゃないのか」

あれが全力なわけないだろう。俺やる気なかったもの。

「それでもだめ！そもそも武偵というのはっ」

「柚梨佳。怒つてるとかわいくなるぞ」

からかってみる。だって重々承知のことだし。

「~~~~ノノノ」

照れてる照れてるwww。

「それはいいとして」

翠の目はなぜか少し哀しそうだが、それはさておき。

「あんたチームはどうするの？」

「まあ、どこ入っても俺なら大丈夫だろうけどな」

それは本当のこと。歩く武器庫ですから。そんな話をして笑っている俺たちを、周りの人は白目で見つつも砂を吐いていたという話

である。

その場所の男子全員の心の叫び。

『リア充爆死しろ！武器庫暴発して死ね！氏ねじゃなくて死ね！』

その頃。男子寮のある部屋にて。

『あいつをどうにかしてパートナーにつ．．．！でもあたしじゃ．．．
・レインも負けてるんだし．．．』

第2話 H V S H（後書き）

少々チート気味の第二話でした。

次はネタ回かな？萩原が少しアホになります。チート並に強くて頭
はいいですけどね。

第3話 メドウサの悪夢。そして狂戦士雷神（前書き）

今回はレイン、願の知られざる過去についてです！

第3話 メドウサの悪夢。そして狂戦士雷神

「なぜ・・・雷神になれないんだ・・・!!」

レインは一人病院で苦悩していた。所謂「雷神化」は彼の切り札。しかし現在はその切り札がなくなってしまったのだ。

「雷弾は撃てる・・・雷雨も、雷花も。でも、なぜか・・・」

そんな彼の呟きを隣で聞いているのは献身的な介護をしている綾瀬であった。

「レイン君。そんな考えすぎたらだめだよ。リラックスして。彼のこととは調べてあるから」

「ほんとですか?！」

あつという間に食いついてくるレインに綾瀬も少し苦笑い。書類を手渡しすると、レインは食らいつくように読み始めた。

「ばかなっ! そんなまさかっ!」

あの男の名前は萩原願。強襲科でずっとSランクを取っている悪魔のような武偵だ。しかし彼は自衛隊の虎の子である特殊部隊「Fユニット」を指揮する自衛官であり、日本の治安を維持する裏の組織「大和」の総帥でありながら裏の世界では「日本の首領^{ドン}」と呼ばれる萩原家の第八十八代当主でもあるという、日本の平和が彼の手の上で転がっているような状況であった。

「だからか・・・だからあんなに強いのか!! しかし雷神化できない理由が・・・」

レインが諦めかけたとき、彼の目にある一つの章題がとまった。
『萩原家と色金との関連性について』

色金。よくわからないがそれは超常的な力を持つ金属で、超能力^{ステル}者の能力もそれによって統制されたりすることが多々ある・・・と、書いてあった。さて。それとあいつの関係は・・・?

『初代萩原勇作は擬似色金と呼ぶべき金属を錬成。それはありとあ

らゆる超能力を制御できるとのことであるが詳細は不明である。』

「・・・なるほどお・・・そうかそうか」

「?!」

レインからは質量化した殺気が発生しており、綾瀬は泣き叫びながら病院から逃走した。レインの傷口が見る見るうちにふさがっていく。

「萩原あ・・・この俺を弄んだ罪、償ええええ!!」

そうしてレインは防弾どころかバズーカ砲でも割れないガラスを水月の一閃で切り裂き外に飛び出したのだった。

「まさかな・・・よもやあの雑魚が・・・」

情報科のアーカイブ。成瀬・レインハートのことについて調べていた俺は一人驚愕していた。

「CIAの腕利き特殊部隊“メドウサ”を壊滅させたなんて・・・」

メドウサ・・・。

大規模テロが頻発していたアメリカやイギリスなど、日本を除いた先進国の特殊部隊からエースを召集して作られ、CIAが指揮権を握っていた多国籍特殊部隊。

その錬度は陸上自衛隊特殊部隊「Fユニット」に匹敵していて、昨年九月の厚木海軍航空基地襲撃事件の際に在日米軍の要請を受けて出動。錬度が極めて高かったとされる魔女連隊を撤退させることに成功。その三カ月後に、ニューヨーク武偵高を襲撃した際に成瀬・レインハートが迎撃。第一迎撃段階で壊滅させられたという。

「・・・雷神化すると悪魔ということか」

見直した、とでも言っておこうかな。そう思い、俺は外に出た。柚梨佳がこちらをジト目で見ている。

「・・・」

「・・・柚梨佳？」

「・・・ごめんなさいは？」

「・・・申し訳ありませんっした」

教訓。女の「子」をからかうものではない。

「いま嫌味ったらしく 子 を強調しませんでしたか?！」

「しゝてゝまゝせゝん」

周りから白い目で見られつつ、吐かれた砂で足をとられつつ、俺は情報科の外に出た。

「ありがとな。アーカイブ貸してもらえて」

「いいのいいの。それよりさ——」

柚梨佳が何か言いかけて固まった。そして後ろから妙に洗練されて圧迫感がある殺気がする。

「はああああぎわらクウウウウウン!!!!!!」

・・・雷神化した、成瀬だった。とりあえず俺は柚梨佳をどさくさに紛れて抱きしめながら圧倒的な跳躍力で情報科の屋上に飛んだのだった。

第3話 メドウサの悪夢。そして狂戦士雷神（後書き）

萩原。 「ファイ・ブッコロス素晴らしい」 「ファイ」。

そして雷神化&バーサーカー化したレイン。キャラ崩壊厳重警戒。

第4話 「ムリ」は禁句。でもこれは・・・

「ひゃあああつはあああ！！！」

雷神化した成瀬が襲い掛かってくる。情報科の屋上まで俺についてきやがった。

「柚梨佳。借りる」

「ふえ？ふえ？」

涙目の柚梨佳。・・・成瀬ぶつ殺す。俺は柚梨佳から借りたコルトSAAを振り向きざまに撃つ。スローイング・ダガーをすべて成瀬の手から撃ちおとすと、俺はSAAを柚梨佳に投げ返した。

「・・・萩原流戦器戦闘術・銃技其の壱。是、いかなるものをも、撃ち砕きたり。其の名は・・・破神と為す」

デザートイーグルを二丁、足首のホルスターから引き抜くとその勢いでXD-9をも懐から引き抜く。ちょうど、デザートイーグルの引き金をそれぞれの人差し指で、XD-9の引き金をそれぞれの『小指』で引く形。その銃口は四つとも完全に同一目標にシンクロしている。

「破神。および其の参・・・純闇」

手が塞がっているのにもかかわらず、俺は我ながら器用にナイフを引き抜いた。そしてそれを口にくわえる。

「萩原家八十八代当主、萩原願。いざ尋常に参る！」

「言つてろおおおお！」

雷神化した成瀬の髪の色は紫になっている。なるほど紫電である。しかし、それがなんだ。

「――」

集中力が限りなく高められる呼吸法で呼吸しながら、俺は遺伝子的な面で伝家の宝刀を抜いていた。

所謂S・HSSである。

このナイフにもHSSになれる力が備わっていて、それと遺伝子でのHSSが融合したのである。だから、Squared Heria Savant Syndrome。『二乗のヒステリア・サヴァン・シンドローム』なのだ。
「っー！」

四つの銃口が同時に瞬き、『紫電の雷神』の鳩尾に向かって飛翔し始めた。しかしそれらは水月で弾かれてしまう。

「純闇」

銃がいつの間にか消えて、ナイフ一本で突っ込んでいく俺。水月を構えて突っ込んでくる成瀬。

「いかに扱いがランクであろうと・・・負ける気がしない」

オリハルコンと色金。どちらも伝説の金属だ。
「階層8まで侵入・・・キャンセルフェーズ能力破壊開始」

しかし、これは距離は関係ない。時間も距離も関係なしのチートナイフ。過去の人間を切り裂くことも、地球の裏側の植木の剪定も出来る。

「・・・承認。キャンセル！」

『紫電の雷神』。貴様に勝てるはずがない。なぜなら俺が萩原に
いるからだ。

雷神化が解けた。キャンセルという言葉と同時に。

「・・・まさか」

超能力は意識の中枢部分とも呼べる。超能力が作り出す事象をイメージして初めて発現するものだからだ。つまり、こいつは俺の意識にアクセスして・・・意識をかき乱したということになる。

「そんなことが・・・出来るはずがない」

勝てるはずがない。そう思った瞬間、ここ数日の疲労からだろうか。レインは水月の重さに引きずられるように倒れた。

「成瀬。おい」

拍子抜けしたような願の声は聞こえていなかった。

「・・・目が覚めたら、知らない部屋の天井が視界に入ってきた」
「ウケ狙いなら不発だな。」

「冷静に突っ込んでるんじゃないやねえ！あとなんでここにいるんだ萩原！」

「別に。俺が倒したようなものだし、責任くらいは感じるよ」
「・・・意外と人間みたいな感情持つてるじゃないか。」

「失礼だな。俺だって人間だ。お前を倒すのだって傷を最小限に出るようにがんばったんだからな？」

「がんばる方向性が違うし、そもそも心を読むな」

ただでさえ意識をかき乱されて雷神化できなくなったのに。

「雷神化なら解凍したぞ」

「解凍？！圧縮でもしてたの？！」

zipかな。それともlzh？

「冷凍食品みたいに」

「文字通り凍っていた？！」

翻弄されている。何なんだこのカオス。

「機能の敵はさっきまでの敵で今は味方というかスっ気たつぷりの見舞い客だな」

「人の心を読むなあぁ！！！！」

・・・戦っていたほうがまだよかったかも、と思ってしまう成瀬・レインハート、高校二年生の春であった。

第4話 「ムリ」は禁句。でもこれは・・・（後書き）

仲直りと思ったらなんかまたいじめてますね（笑）

次からはミッション？

第5話 盟友

「おい萩原」

レインのベッドの横で銃の整備をしている萩原。

「なんだ雑魚」

「名前を呼んでいただけませんかねえ?!」

某有名恋愛ゲームにおける主人公とその友人みたいなやり取りである。

「なんだ成瀬」

「何であんなにお前は強いんだ?」

・・・説明しづらいことを聞いてくる。

「まあ、天賦の才能だろうな」

「んなわけあるかつ!」

「才能はあくまで原石だ。磨かなければしょうがないだろう?」

それは成瀬への皮肉でもある。確かに日々努力してはいるんだが、それじゃ足りないだろう。

「けどよ」

「ま、萩原家は少し特別でね」

戦国時代にその名を馳せた武田信玄率いる甲斐武田軍。その軍事的中枢だったのが萩原家である。当時の日本で最も戦力が大きかった織田軍を第一次信濃攻防戦で打ち破り、敵の将である織田信長の影武者を討ち取った伝説を持つ。

「戦国時代に結構早い頃から鉄砲の威力に気づいて、初代が機関銃を作ったこともあった。すぐに壊されたけど」

「チート一族つつうことかよ」

確かにチートですね（www）

「笑うなっ!!」

「地の文を読むんじゃない。駄文がばれて作者が可哀想じゃないか」

「・・・ごめんラルド・・・って違っただろお?！」

「自らの非を認めよ。さすれば道は拓かれん」

すまん作者。成瀬の代わりに陳謝する。

「お前の一族は萩原家の部下的存在なんだぞ?」

「マジっすか?!」

これは本当。日本の安寧を維持する秘密組織（www）『大和』の総帥である萩原家と、その実行部隊である夜雲家。

「だがな」

成瀬が物理的な殺気を出す。病院の窓ガラスが例外なく砕け散ったが、別に怖くない。だって親父がキレたときの方が怖いし。

「俺は成瀬だ」

「ああ。そうだな。お前は成瀬・レインハートだ」

そこは認めてやらなければならぬ。それはこいつのアイデンティティに関わるものだから。

「レインって読んでもいいか? いい加減他人行儀過ぎるだろ」

「そうだな。じゃあお前のことは名指しで呼ぶがいいか」

「かまわないよ」

むしろ萩原っていう苗字が嫌なんだよね。だって警察行ったら必ず『帰れ』的な目で見られるんだもの。

「霧矢先輩? そのいかにも戦争で使われた対戦車用のライフル的なものは何でせうか?」

「コロスコロスコロス」

「こわいよおレイン!」

「俺を倒したやつが俺を頼るなんて」

「いや、盾だけだな」

お前を誰が頼るか。

「俺を盾にする気か?!」

「黙れ人型使い捨て装甲板」

「コロスコロスコロスコロスコロ」

空色の髪がきれいなこの先輩閣下は今レインとの時間を不当に邪魔されたとして即決死刑を行おうとしているのだ！

「・・・女の人には手を出したくないんだけど・・・」

「コッココッココッコ」

「怒ってるね」

「ああ・・・レイン、すまない」

懐からXD-9を引き抜いてバレットライフルの機関部を破壊する。

「コ・・・」

そして落ち着かせるために抱きしめる。

「願。死ね」

「いやだっ！せめて時間旅行してからじゃないと嫌だっ！」

「・・・ふみやふみや」

よし。催眠薬で眠りについた霧矢先輩をいすに座らせる。そして俺は外に出るために扉のほうを向き、阿修羅のようなオーラをまとった翠と柚梨佳を確認して飛ぶように窓から逃げた。

「「逃がすか」」

しかし彼女たちは鮮やかな連携プレーで俺を追い詰める。二人してワイヤーなしに飛び降りてきて、翠がHK91を乱射する。柚梨佳はコルトSAAで不可視の銃撃より速い早撃ちをしてくる。

「・・・今日の私は！」

ナイフですべての銃弾を弾き。斬って捨てていく。

「阿修羅すら凌駕する存在だ！」

そのあと、我々の戦いが教務科総出で止められたことはいうまでもない。そして俺が教務科を壊滅させたことも。

「よう親友。大丈夫か」

「あの人たち怖い」

「まあまあ。いいやつらだぜ？」

「・・・。アリアがうるさそうだが」

「・・・神崎のことか？」

そう俺たちが話してるところに神崎・H・アリア登場。

「出たな！ここであつたが百年目？」

「聞かれても困るんだけど・・・まあいいわ！萩原願！アンタあたしの奴隷になんなさい！」

・・・ひゅう。

俺の魂は一步步先に現実逃避したのだった。

第5話 盟友（後書き）

作者「アリア登場です！さて、現実逃避した萩原さん！今の心境は！」

願「早く自由になりたい」

作者「またまた〜。アリアにもう『心を奪われた』んでしょう？」

願「魂が逃げ出したのは認めよう」

作者「『この気持ち、まさしく愛だ！』と叫んでいたそうじゃないですか」

願「武士道か・・・」

作者「それはそうと柚梨佳の・・・」

願「っ」

グチャっ
♪

第6話 一対二。そして静かなる殺気

「アリア？その、奴隷ってのは・・・」

「奴隷は奴隷よ！」

神埼イ。どっちかつつと強いのは俺ですよねえ。

「あゝもう！！いいわよ！キンジ！こいつらやつちやいなさい！」

「む、ムリだつて！」

そう彼が反抗したところで（どこから湧いた）、彼は霧矢先輩が座っている椅子を引っ掛けてしまう。椅子はぐらりとキンジの方向に傾いて・・・キンジの顔に先輩の顔がちょうど柔らかく当たってしまった。所謂キスである。そして彼は。

「・・・アリアがそれでいいなら」

おうゝい今までの意見はア？！

「じゃあ退院したら決闘だからね？覚えときなさいよ！」

「せいぜい忘れる努力をしよう」

「そうだな」

とはいえ、忘れられるものでもないだろう。

「萩原！アンタは今！あたしたち二人に勝てるかしら？！」

「余裕余裕。じゃあレイン。行ってくるからおとなしく霧矢先輩のお相手を頼む」

「はいはい。無事に帰って来いよ」

安心しきつた声でレインが送り出してくれた。

「範囲はこの島全体よ！いいわね？！」

「別に」

「何使つてもいいけど、教務科には迷惑かけないこと！！」

「今みんな療養中だがな」

サボれて助かる。

「じゃあ初め！」

そういつと神崎は突っ込んできた。・・・やれやれ。

「っ」

ナイフで峰打ち。神崎は首を殴打されて轟沈した。

「・・・君はアリアに手を出した」

「そんな私怨でしか戦えないのがそのモードの弱点だな」

「素晴らしいながら俺は『破神』で不可視の銃撃をこなす。インヴィジブルキンジの鳩尾に四発当たるが、キンジは堪えた。

「さすがはHSSだ。受け流したか」

ならば自らの技に溺れる。ベレッタM92Fから放たれた四発の銃弾。ナイフの刀身の切っ先を左側に向け、刃は下に向けながら三発を完全にかわし、一発をナイフの破壊峰に噛ませる。サイドブレイカー9ミリパラベラム弾がちょうどナイフの正中線を通して瞬間、俺はナイフの刀身をぐるりと反対側に向けて体ごとまわした。ガキンといった金属質な衝撃の後、銃弾の運動エネルギーにしたがって9ミリパラベラム弾は『キンジに向かって』飛翔していく。

「萩原戦器戦術・剣技、其の拾貳。剣返し」

残心・・・刀身を斜め右下に、刃は自分側に向けて柄の下半部分を左手で押さえる・・・をとって追撃に備える。しかしキンジは鳩尾に自分の銃弾を食らって再起不能のようだ。俺は念のため関節部分に一発ずつ50AE弾を撃ち込んでおいたが、杞憂だっただろうか。

「ただいまあ」

「もう終わったのかよ?!」

「ただいま出て行ってから五分少々。」

「んあ・・・あ、萩原くんだよね?」

「ええ。情報科の霧矢先輩ですか」

「綾瀬でいいわよ」

「じゃあ綾瀬さん。柚梨佳がお世話になってます」

「柚梨佳もあんな早撃ち（カナレインの師匠を超えた）が出来るのに情報科なのである。」

「ふふっ・・・桂さんね？」

「？」

「あの子、この前レポートを提出する宿題があったんだけど、そのレポートのファイルを間違えたみたいで」

「よくあることでしょう」

「その内容が・・・」

そこまで言ってから彼女の顔色が一気に蒼白になった。

「??」

彼女の視線を追いかけると、そこには。

「あゝやゝせゝさん？」

何で今まで気づかなかったのかわからないくらいの殺気を放った
柚梨佳がいらっしやった。

「ごごご、ごめんっ!!」

「WAWAWAわっすゝれもの」

「願くんも、マツテナサイ」

「・・・Yes, my dame」

一難去ってまた一難。高校二年生は大変である。そんな愚にもつかないことを学んだ、萩原願&成瀬・レインハートであった。

第6話 一対二。そして静かなる殺気（後書き）

ネタが多くなってる気がします。すみません。

第7話 戦国最強

柚梨佳をなだめて事態を沈静化させた後、俺はテレビを見ていた。歴史を取り上げているこの番組では最近戦国武将特集が組まれている。今日は織田信長の特集らしいので見てみたのだが……。

「織田信長特集！今日は愛知県の熱田神宮に来ています！」

熱田神宮……ねえ。そんなに密接な関係があったっけ？

「ここは信長の歴史的な戦いの一つである桶狭間の戦い、その前にここに信長がお参りに来たという由緒正しい神社です。ここには実は信長の秘宝が隠されているとのうわさもあり、現在は東京歴史大学の方々が調査にいらっやっています！」

信長の秘宝……か。どうせボロボロに錆びた剣とかだろうよ。

興味をなくした俺はテレビを消した。今はキンジとレインの部屋に居させてもらっている。理由はきわめて簡単。退屈だから。

「んで、キンジ。神崎との奴隷生活はどうだ？」

「どうもこうも。いつもももまんを買いに行かされるし……」

「ももまん?!」

確かあれってピンク色で桃の形をしただけのアんまんだぞ?!

「ああ。皮が桃の香りがするんだとよ」

「理解できない……」

神崎。だから子供っぽいんだぞ？

「風穴を開けられそうになるし……」

「レイン。止めてるんだろっな？」

「ああ。止めちゃいるが対処しようが無い」

さすがSランク武偵。

「そういえば、明日からSSRって合宿じゃなかったか？」

「そうだよ。熱田神宮に」

「さっきテレビでやってたところか……」

「いいよなあ遠出できて」

強襲科はそんな合宿は無い。あつたとしても自衛隊基地で戦闘訓練・・・（泣）。

「大変なんだぞ？合宿だつて」
と、そんな話をしながら今日は過ぎていった。

五時間目。強襲科で蘭豹相手に無双をしていると、一本の電話が入ってきた。

「もしもし」

（願か?!）

「レイン？どうした」

（すぐに熱田神宮に来てくれ！テロリストがつ・・・）

「?!どうした！レイン！レイン！」

（SSRじゃ・・・対抗しきれない！陸上自衛隊を・・・ザアアアア）
ノイズしか聞こえなくなった携帯電話。

「何があつたんだ？」

「蘭豹。車輛科のヘリコプターを借りる」

レインのそれをはるかに上回る殺気を出しつつ（神埼も涙目、間宮号泣）蘭豹に詰め寄る。ヘリを出すには依頼者の担当教師の許可が必要なのだ。

「・・・!!（コクコク）」

蘭豹、すこし泣いている。

その後、車輛科の武藤に蘭豹からの許可書を突きつけてドーファンヘリコプターを借り出した。走りこんできた援護の人員（翠だったことに驚いた）をヘリに乗せて最高速度で都心上空を吹き抜ける。すでに愛知県の自衛隊駐屯地から連絡が入っていた練馬駐屯地東部方面隊司令部でOH-1を調達して、さらに愛知東部の『Fユニット』を出動命令を出した。そして関東近郊の自衛隊が戦闘態勢に入る一歩前に俺と翠はOH-1で熱田神宮へ向かったのであった。

川崎重工OH-1は最高水平速度が時速278キロ。朝霞から熱田神宮までは275キロ。一時間弱の道程の後、俺たちは信じられない光景を見た。

旗、旗、旗。

セールのスーパードでよく見る幟。あれのようなものがいくつも熱田神宮の中にみえる。その模様は織田瓜と呼ばれるもので・・・尾張を支配する織田家の家紋だ。そしてその隙間からは禍々しい色をした甲冑が・・・！！

「なんだこいつら・・・まるで戦国時代じゃねえか」

「テロリスト・・・はっ?!」

翠がいきなり叫ぶのですわ何事かとばかりに振り返る。

「織田家・・・確か秘宝が見つかったのよね」

「ああ・・・おいおい。まさか取り返すために立ち上がったとか?」

「それもある。でももうひとつは・・・」

そして俺の太ももにあるナイフに目をやる。

「それよ。それが覚醒したのね」

「・・・二代目萩原陽平の第六天魔王封印が、解けた?」

本能寺の変の後。残存戦力を増強して大阪夏の陣で徳川本陣を襲ってきた織田軍。二代目萩原は全軍で織田軍を包囲して一気に制圧。しかし織田信長・・・第六天魔王は違った。火縄銃も矢も弾かれ、大きな鎌で一気に敵をなぎ倒す。形勢不利と判断した二代目は色金で魔王を封印。体をばらばらにして秘密裏に熱田神宮に安置しておいた・・・その筈なのに。

「そして、戦国最強の織田軍。ざっと千、二千はいるわね」

「・・・」

封印が解けた、化け物。超能力を使う魔王。その配下たち。人間が対処できることではない。どうする、八十八代萩原、萩原願。

第7話 戦国最強（後書き）

はい。過去からの敵です。しかも蘇りやがりました。

願「無茶振り過ぎるだろラルド」

作者「だって、ただの超能力持ちだったらお前が倒しちゃうじゃん」

願「そのせいでいま身柄をお借りしてるレインが危機なんですがね
?!」

作者「はいはいwwwでは、次回『合流!!』（仮）!!ご期待ください!!」

願「負けてたまるかつ!!」

特報 皆様のおかげです！

PV1000の舞台ついに突破いたしました！これもひとえに読者の皆様のおかげです！

現在私ラルドの小説 〱暗黒の刃〱はスランプで更新を休止させていただいておりますが、コラボ作品であるここでは萩原が縦横無尽に暴れまわっています。作者に反乱を起こすのではないかを戦々恐々とする毎日です。

あなたの作品でも萩原を暴れまわらせて見ませんか？

基本、ギャグキャラから敵ボスまですべて通用するキャラクターと思っておりますので、どんな酷使をしても大丈夫でしょう（うおい待てラルド by 願）。

では、日ごろの感謝を込めて、ラルドがお送りいたしました。

（何かご意見などありましたら遠慮なくおっしゃってください。あなたの一言がこのシリーズを変えるのです。ちなみに荒らしはお断りです。問答無用で削除いたしますのでそのおつもりで。）

第8話 合流！そして・・・

トンボのような形をした偵察ヘリコプター、OH-1は翠の操縦で低空にホバリングしていた。

「翠。こいつは民間機に比べると尋常でなくピーキーだ。着陸のときは十分気をつける」

「オツケ」

楽勝と言いたげに笑う翠。その顔に不覚にも見惚れてしまった俺は、すぐにそこを離れた。OH-1は華麗な機動で空に舞い上がる。そして俺の周りには刀を持って走り寄ってくる足軽兵団の姿。

「萩原家主、八十八代萩原。二代萩原の行為のけじめをとる。そこをどけ」

物理的な殺気・・・レインを凌駕するそれを少しだけ見せる。足軽が目に見えておののく。ざまあねえな。

「五」

カウントを取り始めると、足軽衆から一人が出てきた。

「待て！萩原とは何だ！」

「四」

問いに答えるそぶりをまったく見せずにカウントを再開する。

「三」

「・・・っ！」

足軽代表の男が刀に手をやる。

「二」

彼の後ろの足軽・・・ざっと五十人・・・が彼に倣って刀を抜く。

「一」

「かかれえ！！」

どうやら隊長だったらしい彼が刀の切っ先をこちらに向けて命令した。足軽は槍や刀を構えて突っ込んでくる。

「零」

俺はすぐさま腰背部に手をやって、隠し持っていたMP5Kを二丁構える。銃口は目の前の足軽。鬨の声をあげて襲い掛かってくる彼らはとまる気配をまったく見せない。

「萩原の名を聞いた敵は必ず駆逐する！わが名は萩原願！いざ尋常に勝負！」

MP5Kの軽い銃声が激しいスタツカートを刻み、9ミリパラベラム弾が足軽の鎧をやすやすと貫通する。矢面に立っていた十人はあつという間に腸を引き裂かれて即死したようだ。

「ひるむな！いけえ！」

そう檄を飛ばす先ほどの男の頭をデザートイーグルで粉碎しておく。クルツの新しいマガジンを空中に投げて、それを再装填する。俗に言う空中リロード・・・その短機関銃サブマシンガンバージョン。

9ミリ弾数発に頭を撃ちぬかれた足軽。それを踏み越えて突撃してくる足軽がどこからか撃ち込まれたドデカい銃弾に『叩き殺された』。足軽部隊がその銃弾の嵐に屈していく。

最後の一人が何発も銃弾を叩き込まれ、脳漿を噴出して倒れた時にはすでにそこは内臓や血が飛び散る地獄絵図の状態だった。

「使えない奴らは必要ない・・・それが我が掲げる主義だ」

強烈な殺気を発しながら現れた男はやはり鎧を身に着けていた。

「初代萩原が作った機関銃か・・・やはり使い勝手がよいな」

「・・・八十八代の前でそれを言うのか。貴様はよほど腕に自信があるを見た」

「・・・?!」

その男がうつらえると同時に俺は躊躇なく走り出していた。足軽の一人が使っていた刀を蹴り上げて、それをギリギリで引っ掴むとそれを目の前に掲げた。

「萩原戦器戦闘術・剣技。奥の序・・・張麻」

刀を思いつきり首に向けて振るう。彼は機関銃のストックでそれをそらした。俺は瞬時に刀を捨てる。

「破神」

月面宙返りをしながらX D - 9を引き抜いて背後から四丁で銃撃。鎧には瞬く間に9ミリの穴がいくつも開いて、男の命を奪い去っていく。しかし男はまだ立っていた。

「萩原アア!!!」

渾身の力で振り返ろうとしたのか、彼の体からまた血が噴出した。しかし彼の目が俺を捉える前に俺は50AE弾を放っていて、それは新幹線並みの速度で彼の頭蓋骨を破壊していた。

「・・・すこし自重しよう」

さすがに吐き気がする。うええっ。

その後、殺気を押し殺しながら俺は隠密行動でついに宝物殿にたどり着いた。レインが俺を見つけ、ウインク信号で『ウインキング援護しろ』と合図してきた。『もちろん』と返して、俺はブレザーの内側から自衛隊制式の八十九式小銃、特殊部隊カスタムを剥き出しにした。

「雷花!」

レインの能力は正常らしい。俺はレインの能力を強化させておいて(色金有能力)戦場に飛び出した。

そこには、大きな鎌を構えた死神がいた。

「・・・第六天魔王か。直々のお出ましとはな」

「織田に・・・否、我に逆らう愚か者は生かしてはおかないのだ。特に貴様は蘭丸を倒したつわものよ」

「蘭丸・・・?」

ああ、さっきの機関銃君か。

「よくわかるな。忍びでも張っているのかい?」

そう聞きながら俺は殺気の抑えを解除した。一陣の風となった殺気が戦場に吹き渡る。

「・・・なるほど。我を封印したあの小賢しい者の子孫だな?」

「だったらどうする?」

殺気がレベルアップしたようだ。さしもの魔王・・・信長もそこ

し警戒した。

「・・・一族郎党我が鎌の錆にしてくれよう」

これ以上家族を減らす、そう宣言した言葉で、俺の心の中の箍が外れた。S・HSS。その怒りバージョンらしい。まだバリエーションがあるのかね。

「そうかい。ならやろうか。俺に勝ったら好きにするがいいさ」

「おい願！」

俺にも勝てなかったのだから。そう言おうとしたレインを睨みつける。

「面白い。興がそそのるのお」

「知らないぞ？また封印されても」

「何を言うか。貴様などになぜ我が封印されるのだ？」

そんな戯けたことを抜かす信長をまるっと無視して、俺は泣きそうになっているレインを見た。そんなに怖いのか？

「レイン。助ける」

「・・・能力が、上がってるんだが」

「そりゃあ。いつもどおりのお前だと少しばかり不安なのでな」

「オブラートに包んでくれよ」

そんな軽いやり取りで気を紛らわせて、俺とレインは信長に向き直る。

「織田上総介信長！貴様を撤去する！」

だって一回死んでるもの。

「器物損壊罪は武偵には通用しないんだからねっ！！」

そう合いの手を入れたレインは一気に雷神化する。いま一瞬ピリツと来た。

「・・・笑止！切り殺してくれる！」

そして。信長が発する真紅のオーラとレインが発する黄金のオーラ、そして俺が放つ大量且つ強力な・・・暗黒の、奈落の底を思わせる闇色のオーラが戦場のど真ん中で衝突し、この戦いは始まった。

のであつた。

第8話 合流！そして・・・（後書き）

願「相変わらず駄作だよナルドの文。信長さん、ちよつと折檻してくれませんか？」

信長「・・・さつき間違えて『信ちゃん』って書かれた悪寒がして動けない（実話です）」

皆（信ちゃん W W W W W W W W W W W W）

ラルド「厨二じゃないんです。これは想像力の結晶なんです。すみません、言い訳です」

第9話 第六天魔王 vs 雷神&ネメシス

オーラが衝突した戦場はすでにクレーターになっていた。自衛隊の資料映像で何百回も見た、核実験場のクレーター。それに寸分違わない状態。まだ煙をもうもと上げるクレーターの向こう側には、日本が産み出した魔王・・・第六天魔王がたたずんでいる。

「・・・レイン。いまの俺はキれている。俺にあまり近寄らないほうがいい」

「わかった」

注意事項を連絡し、俺はその瞬発力をフルに生かして信長の方向に向けて走り出した。煙の向こう側に見える信長が何かに合図するように手を上げた。

（・・・鉄砲隊か！）

そう理解した瞬間、俺の体は左側を向いていた。確かに鉄砲隊が火縄銃をこちらに向けている。

「なめるな！」

「撃て！」

球体の銃弾が十発ほど俺に向けて発射された。しかし俺はそれすべてXD-9で撃ち落とし、片手で保持していたMP5Kを横薙ぎに一連射する。鉄砲隊が9ミリパラベラム弾の前にあえなく倒れたことを確認すると俺は信長に向き直る。

「・・・信長ア。テメエ俺に勝てると思ってるのかア？」

やべえ。俺めちやくちやキレてますやん。

「愚問だ。我が勝てなかった相手は萩原しかない」

「そ〜か〜。お前ごときを封印し切れなかった先祖が倒せたのかあ。だったら俺も倒せるなあ」

「?!」

殺気。威圧感。すでに勝利を物語っているそれは超然としている。・・・いくぞ？」

信長の不意をついて俺は破神で何十発も銃弾を撃ち込んだ。信長はやはり・・・敵ながら流麗な動きで鎌を振るい、銃弾を叩き落している。しかし。

「これは予想していなかっただろう？」

・・・信長の全身から、鮮血が噴き出した。

「「?!」」

さしもの雷神もそれは意外だったらしく、俺の背後で息を呑んでいる。

「銃弾を銃弾で加速させ、その衝撃波で銃弾を花のように砕く・・・命名、裂花」

破片で相手の体を引き裂く荒業。相当の加速をされたそれはたとえ破片になろうともその速度を減衰させずに目標に向かう。それを利用した銃技。破神の中で行ったから、すこし頭を使いすぎた。

「・・・フン!!」

信長は鎌を脅すように振るうとこちらに『浮いて』突進してきた。紅いオーラが彼の体を覆っている。

「織田家はこの四百五十年、このときを待っていたのだ！我が復活するときを！」

「なら、それを潰してやるよ」

鎌の切っ先をこちらに向けて突っ込んでくる信長。その軌道を捉え、俺はデザートイーグルを構えた。そのまま三連射。信長はそれをすべて鎌で弾き、オーラで包み込む。その眼は紅く輝いていた。

（――緋弾――）

緋天・緋陽門。それをあいつは・・・鎌の先端で作り出した。

「我の妖術、しかと受けよ！」

釜をまた振るい、その緋色の光をこちらに撃ち込んできた。眼を焼かんばかりの光はまっすぐ俺に向かってきている。

「・・・っ!!」

それを直視した瞬間、HSS特有の血流を感じた。より強く、より速く。S・HSSが解禁された。HSSの二乗^{スクエア}・・・反射神経や

瞬発力が30倍になるその二乗。900倍になったそれらはあの光ですらゆつくりと見せていた。俺はナイフ・・・ノワールを引き抜いて目の前にかざした。そして、緋天がノワールに接触した瞬間・・・。

「願?！」

駆けつけてくれたのだろう翠と、存在が空気になっていた（ひどくないですかねえ?!）レインが同時に叫ぶ声が聞こえた。その声と同時に、俺はノワールを振り払った。色金で、色金の能力をかわしてしまった。

「?!」

同じ反応ばかりするなよ信長さん。後ろがから空きたぞ?俺は900倍の瞬発力で後ろに回りこみ、音速を超えた速度で腕を振るう。その手にはもちろんXD-9とデザートイーグル。

「封印術・・・その名は、暗弾」

色金を空中に投げ、オーラを発しているそれを一瞬だけ注視する。銃口とまだこちらに気づいていない信長との間に色金のオーラが入った瞬間、三点バーストにしてあった二丁の引き金を引く。銃弾がオーラを切り裂き、それが色金と同じ色に染まった瞬間。鎧と緋弾に守られた信長の体が数回軽く痙攣し、その場に顔から倒れた。彼の体から流れ出る血が五芳星を描き、それを立体化するように体にめり込んだ銃弾がひとりで体外に出た。それぞれの銃創の上で滞空したそれは何かの命令を待つように動かない。

「・・・滅」

そのキーワードとともに五発の銃弾が回転し始めた。そしてそのまま降りていき、五芳星の頂点同士を円でつなげるように肉をえぐっていく。そして銃弾の全体が肉にめり込んだところで、いきなり炸裂した。

「・・・グロッ」

思わずそういつてしまうほど、それは凄惨な光景だった。

信長の封印済み死体を本殿に放り込んだあと（自衛隊が周りを厳重に警戒中）、俺らはCH-47J Aヘリコプターでセントレアまで運ばれていた。

「SSR二年生全員、無事を確認しました。これより帰還します」（わかったあゝ。おつかれえゲホゲホツ！！）

綴のやつ、またタバコを吸ってやがるな？

「静奈、大丈夫？」

「ああ。何も問題はない」

そんなやり取りをしているレインと朝露。

「キンちゃん、私は無事ですから安心してくださいつ」（はああ？）

キンジが呆気にとられるようすが目に浮かぶ。面白い絵面だなH A H A H A。

「そついえば翠」

「？何？」

「OH-1はどうしたんだ？」

まるで「やばい忘れてた」とでも言いたげな顔をしているのは気のせいに違いない。

「・・・やつば」

やつぱり忘れたのか？！

「・・・（ギロリ）」

「ふええええん」

翠が泣きながら星伽にすがりつく。星伽、それをこっちに渡せ。

そう殺気のオーラ・モールス信号で送る。気のせいじゃなかったらパイロットが号泣していた。自衛官でしょお前。

「・・・！！（ビクビク）」

「白雪ちゃん、いや、いやああ！！！」

さあて翠。抵抗するなよ？

その後。セントレアにつく頃には護衛で乗っていた自衛官を含む

全員（俺を除く）が滝のように涙を流していた。翠は放心状態である。・・・殺気「すこし」出しながら翠の顔をいじってただけなのに。

「公安0科の者で・・・なんで皆さん泣いておられるのでせうか？」
「平和がどれだけ尊いかを噛み締めているのでしょうか」

なんだろう。ヤクザとかの殺気に慣れてるはずの公安0課の人が崩れて涙を通り越して組織液を流し始めた。

「・・・あなたが（ヒック）怖いから（ヒック）でしょうがっ（ヒック）」

レイン。何でそんなに泣くんだよっ？

「い、行きましょう！早く行きましょう！」

結局有能な特殊部隊員が先導してくれた。その人も涙を流した後があっただけだ。

政府専用機は、全席ファーストクラスである。そんな都市伝説出て来い。俺が破神で『風穴開けてやる』。・・・いま東京で同じこと言っただけがなかったか？まあいいや。

「願う。もうやめてねえ」

翠がいつものクールさを崩して半泣きである。か、可愛い（自粛）。

「・・・どうしようかな」

「ふえええええん」

殺気は出さずににこやかに答えると、翠は泣きながら笑っていた。
・・・幼馴染の意外な一面。泣きが限界振り切っちゃったかな？

そんなこんなでSSR&救助部隊貸切の政府専用機は無事羽田空港に着陸したのだった。・・・今日は台風で、帰るのはすこし面倒くさいな。

「静奈。雨よけて」

「私も疲れているんだ。傘を買って帰ろう」

いいよなあ朝露は。ほぼ濡れないんだから。

「・・・?!」

翠。びっくりしたり泣いたり笑ったり今日は忙しいな。

「・・・（クイクイ）」

手招きしてきた。なんだなんだ。

「空自から連絡が入った。私たちの機体の着陸前に飛び立った飛行機がハイジャックされたそうよ」

「・・・百里からF-15Jが飛んで哨戒飛行中、ということか？」
「そうなるわね」

機体の識別コードを見る。ANA-600。確かこれはファーストクラスだけの機体だったな。

「突入はムリそうだ。武偵高に戻って指揮所を設営。急げ」

「あんたは」

「管制塔に行つてレーダーをリンクさせてくる」

一難去つてまた一難。俺は疲れた体に鞭打つて管制塔に走り出した。

第9話 第六天魔王 vs 雷神&ネメシス（後書き）

信長編がなんとこんなに早く終わっちまりました。次は原作どおり！

お断り：願の介入で原作内でのイベントに若干の変更が入ります。
熱田神宮にはSSRで行っていないのと同じように、コラボ作品で
すがレインの行動も ー紫電の雷神ー 通りになるかはわかりませ
ん。

願「俺のせいってことかあ？」

翠「ふえええええん 柚梨佳ちゃああん」

柚梨佳「（翠ちゃん、かわいいっ）」

ラルド「願のせいです。願、自重しなさい」
皆（チャキッ）

ラルド「え?! どうしてねえ何で・・・」

願「作者はスプラッタになったぞ。ヒヒヒ」

第10話 スカイマーシャル、無謀、そして鬼。

管制塔に向かっている最中、一人の男が倒れているを目撃した。黒っぽいスーツを着こなした30代くらいの男。俺はその男が倒れているところに駆け寄った。

「大丈夫ですか?！」

男は一切反応しない。体を探してみると、なにやら財布のようなものが出てきた。縦に開くそれを開けると、顔写真、そしてその下に文字が書いてあるだけだった。

「・・・警視庁?! スカイマーシャルか!」

顔写真とその男の顔は同じだったため、俺は男の踝や腰を確認する。S & W M360Jがホルスターの中に入っている。俺は無線機につながっていた骨伝導マイクとイヤホンをとると、あらかじめつながっていた周波数に連絡を入れる。

（——^{マーシャル}M1へ。状況を報告せよ）

「こちらは陸上自衛隊である。現在M1はハイジャック犯によって行動不能状態になっている。指示を請う」

（陸上自衛隊へ。ハイジャックされた機体に接近し、内部を制圧せよ。M1の任務、受けてくれるか）

「お安い御用だ。直ちに向かう」

無線機を筆記捨て、俺はすでに駐機していた空自のXC-2輸送機に向かった。

「遅い! 二人が捕まってるのに何やってんのよ!！」

「翠ちゃん、落ち着いて」

武偵高で待つ私たち。レーダーの情報があれば何も出来ないというのに、願の奴。なにしてるのかしら。

（通信科の中空知です。たった今萩原さんと連絡がつながりました）
「なんていったあのバカは」

事と次第によつては・・・クスクス。

「・・・」

柚梨佳ちゃん、さめざめと泣かないで。

（航空自衛隊の輸送機で機内に侵入、ハイジャック犯を取り押さえるとの事です。現在600便の高度は30000フィート。およそ9000メートル。急激に高度を下げています。いま28000フィートです）

中空知さんの通信が、すでに張り詰めきっていた空気をさらに張り詰めさせる。

（なつ——何を——）

いきなり通信が阻害された。ノイズが大きくなり、いきなり途切れる。

（こちらは防衛省、航空管理局である。現在当周波数は国土防衛のために自衛隊が占有している。ほかの周波数を使用するように。では）

そして通信は切れた。通信も何もできない状態になって、私たちはただ三人の帰還を待ち続けていた。

XC-2のカーゴドアが開き、夜の東京湾が視界いっぱいに広がってきた。その中で一際異彩を放っているのは、内側の二つのエンジンを何かで爆砕された旅客機・・・まあ、600便だった。

「投下ゾーンだ！行け！」

投下指揮官が手を振るのがかすかに見えた。その瞬間俺の体を支えるものは空気だけとなり、圧倒的な空気の質量におしひしがれる結果と相成った。しかし、そこで600便に乗って見せなきゃ男が廃る。コクピットでキンジと神埼が目を見開いているのに苦笑しながら、俺は爆破された穴から機内に侵入した。

「M1より。侵入に成功した」

（了解）

爆破された穴から外を覗くと、XC-2が翼をパタパタと振って

右に旋回していくのが見えた。俺は一瞬敬礼するとコクピットに走り出したのだった。

願が飛んできやがった。自衛隊の輸送機から飛び降りて。俺はビツクリだ。

「キンジ！アンタあいつを迎えに行きなさい！」

「その必要はないよ」

「そう？・・・って？！」

いつの間にか後ろに願が立っていた！黒っぽいアサルトスーツを着ているのが妙にマッチしている。

「願！大丈夫なのか？！」

「あれ？お前ヒスってないんだ」

バカ！アリアにばれたらどうするんだよ！しかしアリアは操縦に集中していて気づいていない様子。

「んで、着陸はどうするんだ」

「羽田しかないわ」

「んだな」

そういうと願は俺の首を引っ掴んで後ろに放り投げた。なんて馬鹿力だ！

「羽田コントロールへ。こちらはANA-600便。緊急事態につき日本語で交信する。現在パイロットが負傷したため乗り合わせた二名の武偵と救助作戦中の武偵一名が操縦している。燃料は早いテンポで漏れているため、羽田滑走路への緊急着陸が必要と判断する。指示を」

うる覚えの通信。しかし次に返ってきた言葉は俺を啞然とさせた。（・・・こちらは防衛省、航空管理局である。現在羽田滑走路は自衛隊が封鎖中だ）

「じゃあその自衛隊につなげ。俺が撤退命令を出す」

（貴様は誰だ！貴様にそんな権限はない！）

「陸上自衛隊特殊部隊司令部司令官、中央即応連隊戦術アドバイザー。隊員番号1786437-D-194。所属原隊は陸上自衛隊特殊部隊『Fユニット』。国際連合安全保障勲章第145号。萩原願一等陸佐だ」

（萩原っ?!）

うむ。俺の名前は通用するようだな。

「直ちに撤退させる。国土安全保障命令だ。これはビジネスだぞ？」

（・・・了解しました。撤退命令を出します）

「この周波数をつなぎなおすように。いいな」

（はっ!!）

通信が復活すると同時に、管制塔からは情報が送られてきた。自衛隊が展開している滑走路はD滑走路のみ。現在撤退を猛スピードで行っているため着陸は可能。

「了解。着陸を開始します。オーバー」

そして俺は着陸プロセスを完全に無視しつつ着陸を強行したのだった。車輪を出してただ地面に機体を押し付ける、そんな乱暴な方法。その後俺は世にも珍しい着陸酔いをしたのだった。

なんだか一週間くらい離れていた気がする、でも実は半日も離れていない、そんなボケを感じつつ俺は学園島に戻ってきた。そして皆に再会したときに聞こえた第一声。

「馬鹿！」

・・・なして？

「帰ってきて早々それはないだろう翠」

いま俺は世の中の理不尽を噛み締めている。無事に帰ってきて感動の再開。そんなのは映画の中だけの話だ。

「なんでっ・・・なんでっ・・・」

「あゝ。泣くな泣くな。ほらほら」

・・・罪悪感は湧く。だっていつもは気丈に振舞っている翠を泣かせてしまったから。

「おかえりっ」

「おう柚梨佳。ってウボア!!」

柚梨佳には笑顔で殴られるし。翠とは違った意味で泣きそうだった俺に、神埼が話しかけてきた。

「ま、役には立ったわ。感謝しとく」

「神崎」

「アリアでいいわよ」

失敬。

「アリア。お前確かパートナーいなかったな」

アリアの動きが止まる。風になびいていたツインテールまで。

「それがなによ」

「キンジも引つ張ってくるから、パートナーにならんか？漏れなくレインとこの二人がついてくる」

手で俺に抱きついて泣く翠と笑顔のまま鳩尾を殴ろうとする柚梨佳を示す。

「・・・（パアアッ）」

目を輝かせたアリア。

「・・・しかたないわねっ。なつてやるわよ」

素直じゃないな、とは言わないでおく。絶対に『風穴!!』になるからってオオイ!

翠を振りほどいて俺は伏せた。俺に向かって翠と柚梨佳が、零距离で連射し始めたからだ。俺は難なくかわしたけどな。ハハハ。

「願くん!おしおきい!翠ちゃん泣かせた罰!」

「願?（ヒック）わかってるわよね?」

目を赤くした翠がすこし可愛かったが、そんなこと言ってる場合じゃない。なぜなら。

「確かにお仕置きが必要よね」

「ドレイにはお仕置き!」

「おい霧矢先輩?アリア?何で俺にバレットライフルとガバメン

トを向けてるのかな？」

この二人に加え。

「いまは雨が降っているからな。私の力もすこしは使いやすい」

「HEY朝露さん！そんな怖いこというのやめてね？！」

いまほど、日常が恋しいと思ったことはなかった。

第10話 スカイマーシャル、無謀、そして鬼。（後書き）

次は番外編！新月先生の作品、緋弾と侍から坂田銀時さんが登場します！彼と願がどんな戦いをするのか！？

願「勝手に決めないでラルド?!」

銀さん「戦うぞ萩原」

願「ギヤアアアア」

翠「私たちも出ますよ」

柚梨佳「お楽しみにっ!」

番外編 坂田銀時、現る（前書き）

翠「番外編、その一！新月先生の「緋弾と侍」からです！」

番外編 坂田銀時、現る

俺、萩原願は今SSRにいる。理由はというと。

「銃弾を超能力で炸裂させる〜?」

「ああ。いちいちショットガン出すのも面倒だし」

「ショットガンがなくても勝てるんだけど、念のため。

「いや、お前はこれ以上強くならなくていい。帰れ」

「・・・撃つよ」

「いやっほおうさつさとやりましょう!」

「・・・と、こんな感じで。」

「どんな感じだよ!」

「レイン、うるさいよ? 最近出番がないからって」

「なんだとお〜?!」

この前負けたくせに雷神化するレイン。今日はチートなしで戦おう。

SSRの屋上。すでにレインは二十八発の銃弾を受けている。

「うらああああ!」

「パンチに切れがないな」

帯電している拳を素手で取って一本背負い。そして50AE弾を連射。

「ぐああああ!」

体を揺らしながらまだ立ち上がる。

「うああああああ!」

「ひよい」

足を引っ掛けて転ばせてやる。レインは顔から突っ込んで動けなくなった。

「・・・はあ〜」

「(・・・)」

俺は屋上から降りようと階段に足をつけた。そのとき。

「待ちな」

振り返るとそこには銀髪テンパの目が死んだ男が立っていた。

「なんだ」

殺気を十パーセント開放。近くの武偵がいきなり泣き叫びながら遠くに逃げていく。

「・・・すごい殺気だな」

「ほめてるのか？」

「ああ」

そついいながら男も木刀を出しながら殺気を出す。だが。

「それがアンタの殺気の限界だ」

はい二十パーセント。レインも飛び起きて殺気を出す、俺の純粹な殺気に掻き消されている。

「すげえな。お前本当に生徒か？」

「ああ。強襲科2年の萩原だ」

「そうかそうか。教務科の坂田銀八だ」

俺は銀八・・・銀でいいや・・・の木刀を警戒していた。銃は使えないが木刀はSランクを圧倒する、という情報を聞いたことがあったからだ。銀が木刀を構え、突っ込んできた。

「くっ」

破神で応戦するが、すべてを木刀で弾いてしまう。ホントに木なんだろうな、それ？

「ははは甘い甘い！」

街中。時速三百キロレベルで跳ねながら銀に銃弾を叩き込む。銀はやはり銃弾を弾く。

女子更衣室。前を歩いていたキンジを中に（わざと）跳ね飛ばし

つつ俺は銀に銃弾を叩き込む。銀はさすがに限界っぽい。

レインボーブリッジ。銀は二発銃弾をもらっていた。

「テメエ・・・追い詰めたぞ」

「どうか？」

インヴィジブル

不可視の銃撃で木刀を弾き飛ばす。しかし木刀はもう一回弾き飛ばされて銀の手に戻った。その銃弾の出所は、アリアだった。おま、仲間だろうが。

「アンタ！あたしと戦いなさい！」

「もう負けてるだろうが！」

そう怒鳴り返しながらアリアに向けて百発近く銃弾を撃ち込む。

最初はガバメントで迎撃していたが、いかんせん銃弾が速すぎてアリアは徐々に銃弾を食らいはじめた。日本刀で弾くが、その間にも銃弾を食らう。アリアの動きが遅くなったところで俺は決め手の一発・・・いや、五発を放った。後ろの銃弾は前の銃弾を加速させる。一番前の銃弾はライフル弾もかくやと思わせる速度でアリアの防弾制服を引き裂いた。

「アリア！」

あ、キンジ出てこれたんだ。よく見るとヒスってるな。ならば、俺も解禁しようかね。頭の中でXXXのXXXをまるでXXX XXXXするように思い浮かべる。通称夢ヒス。S・HSSが起動した。

「?!」

キンジの後ろに一瞬で回り、キンジの首筋に銃把グリップを叩きつける。

そして銀に向けてベレッタM92FとXD-9を連射。銀はまた木刀で弾く。

「・・・」

「・・・不毛な争いだな」

「だな」

どちらからともなく攻撃をやめた。

「・・・すまない。あとでパフェをおごろう」
「よっしゃあ！」

銀。甘いもの好きだな？そんなことを思いながら俺と銀はレストランに向かったのだった。

後日。

「願？私たちね、あなたにおごってほしいものがあるの」
「ムリだ翠」

「ダメ？どうしてよお」

「すまん柚梨佳。先日レストランで散財してな」

「あんたが悪い。さあいくわよ」

「いやあああああ！！銀！お前のせいだぞお！破神で撃ち殺してやるううう！」

久しぶりに殺気を百パーセント出して自衛隊に怒られた萩原願でした。

レストラン・ロキシーの本日17時8分の売り上げ 15万3千円
なお、先日14時31分の売り上げ 15万円

番外編 坂田銀時、現る（後書き）

番外編終了です。次はジャンヌ編ですね。原作二巻。
願はどんな無双を繰り広げるのでしょうか。今から作者も楽しみです。
す。

番外編其の2 ラジオ!! (前書き)

願「何でこんなことをしなきゃなんないの」

番外編其の2 ラジオ!!

願 「チーム・ネメシスの」

皆 『武偵チャンネル!』

願 「この番組ではですね。武偵や民間の方から来るさまざまな
お便りや緊急情報をお届けするとともに!」

翠 「私たち武偵高の豆知識などをお伝えする糞みたいな番組D
e a t h」

遼 「いきなりぶち壊しじゃねえか!リスナーの半数が無言で周
波数を回したよ!」

柚梨佳「だって作者の思いつきで始まったんだもの」

アリア「本当ならここにいる必要はないのよ」

願 「すまないな、こんなのに呼んじまって」

綾瀬 「でもやさしいからいてあげるの(萩原ちゃんとレイン君であ・

・・幸せええ・・・)」

静奈 「私たちもいろいろ萩原には世話になってるからな。萩原に
頼まれればいやとはいえない」

レイン「強ければいやといっても安心だけどね」

キンジ「確かにな」

願 「では、本日は第一回なのでパーソナリティを紹介して行く
か」

翠 「はい、ここにいるのは『チーム・ネメシス』、つまりハイ
ジャックの後に願によって結成された無双チーム+情報科の一之瀬
ことみこと霧矢綾瀬さんです」

遼 「そして本日のゲストは、武偵高の一部で大人気!!!狙撃科
のレキさんです!」

レキ 「（コクリ）お願いします」

綾瀬 「あれ？私仲間はずれ？」

願&翠 「え？今更？」

綾瀬 「ふええんレインくん」

レイン 「え？！何でここにいるんですか？！呼んだの？！」

綾瀬 「・・・うにやああああああ！！！！！」

願 「ラジオなんだから静かにしろ」

翠 「願が例の恐ろしい殺気を撒き散らしているのでここで一曲」

遼 「大丈夫なのか・・・この番組」

（一曲）

願 「・・・ハアア」

綾瀬 「・・・ごめん」

翠 「ではここで・・・え？」

遼 「どうした？」

翠 「レイン君、綾瀬さん、静奈。プーモさんから電話」

『・・・こんにちは、プーモです。静奈と綾瀬は上手くやってるかな？綾瀬はまあ、抜けたところもあるけどしっかりしてるから大丈夫だろうけど、静奈は……まあ頑張れ。レインはまあ、言われなくても出来る子だと信じてるっ！というか、冷静に考えれば自分はキヤラより年下というね。自分がしっかりしなきゃ・・・。』

・・・言うことがなくなりました。では、図々しくも自分が書いている方の原作、『紫電の雷神』の宣伝を！

原作レキ編を向かえ、急転直下の事態が！

レキの危機に、レインは——！！？

ついに覚醒する、レインの真の力。

激化する戦い。

そして、レキ編のクライマックスにはキンジが、アリアが？
乞うご期待です！

とまあ、図々しいにも程がありますね・・・。

では、失礼しました！

願くんたち『チーム・ネメシス』の諸君、これからもレインたちを
よろしくお願いします！では！』

翠 「いい作者さんね。ラルドの馬鹿とは大違い」

願 「感謝しとけよ。その感謝は積み重なり、いつしか大きな愛
となる。愛とはそもそも本質的に物理的なものではない。ゆえに、
その愛は物理的なものを凌駕する。愛は山より高く・・・」

遼 「芳野さんが憑依した・・・」

柚梨佳 「放っておこう」

レイン 「最近桂さんもネメシスの空気に染まってきた・・・」

キンジ 「桂じゃなくてヅラだろう？」

女子全員＆遼＆願 『言うてはならんことをいったなあ？』

キンジ 「いやあああああ」

願 「ったく。銀が出てきたからってなあ」

銀さん 「おお？！なんだここは？！」

翠 「噂をすれば影が差したわね」

銀さん 「ラジオかあ？お前らもめんどくさいことやってるなあ」

遼 「先生。あんたも出てください」

銀さん 「めんどくさい」

願 「ほっとけ。では次のコーナー！」

銀さん 「寂しいと死ぬんだよ俺はあ！」

翠 「ここで臨時ニュースが入りました。我々の世界を創造しやがったクズのラルド容疑者が8/26〜8/29までの四日間更新できなくなるという前代未聞にして論外の事態が発生し、武装検事に射殺されました。これに対して武偵高は『学習合宿から帰り次第直ちに更新するように』とコメントしています」

願 「ニュースにするまでもない。次だ」

翠 「お悩み相談！」

遼 「お便りです。『私は今、複数の男の人のことを好きになっています』」

綾瀬 「（ビクツ）」

遼 「『それも、同じチームの男の人です。私はどう身を振ればいいでしょうか？』」

翠 「はい、相談ありがとうございます（綾瀬さんね）」

柚梨佳 「それにしてもなんで第一回なのにお便りが来てるの？（うんうん。願さんと成瀬君ね）」

綾瀬 「それはラルドが都合のいいように書いたんでしょうよ（そうだったああ！私のバカ！）」

遼 「・・・では、霧矢先輩。最年長者として適切な答えを！」

綾瀬 「恋愛しなれてる人のほうがいいんじゃないかしら。萩原君とか（彼の意見を聞きましよう！さすが私、この逆境を・・・）」

願 「・・・愛とは全員に等しく与えられるものではない。人は必ず一生を誓える人を見つけられる。それは・・・」

遼 「願はいま唐突に愛を語りだしたのでムリです」

綾瀬 「レイン君は？（萩原君逃げたわね？）」

レイン 「うつぶえ（願の話聞いとると砂を吐きそう）」

遼 「彼はエチケツト袋が必要なのでムリDeath」

綾瀬 「死ね が流行ってるの？！（今まさに自爆しそうだよお）」

遼&翠&柚梨佳 「答えをどうぞ！（ニヤニヤ）」

「うっうっうっ（どっしよおっ！！）」

願
「わかつたかレイン」

レイン「くっそ……砂を吐きすぎて雷神化できない……」

綾瀬「萩原君！！このお悩みにこたえてっ」

「……綾瀬さんのことですよね？（小声）」

「っ？！（バレてた？！）」

「レインとキングジでしょう?」

「ふえ？（・・・なんだ・・・）」

願　「・・・愛はたとえ二分されていてもそれが減ることはない。たとえ一人をあきらめても、もう一人を同じようにしか愛せない。だつたなら可能な限り二人を愛せ。それが愛だ。そう、それがまさしく愛だ」

綾瀬「萩原君……（認めてくれたのかな……私のこと）」

遼 「願が答えましたこと、お分かりいただけましたか？ がんばってくださいね！」

翠&柚梨佳(ニヤニヤニヤニヤニヤWWWW)

願 「続いては武偵高豆知識のコーナーです。今日はどんな豆知識があるのでしょ

アリア「あたし達が紹介するのは強襲科よ!!」

静奈「ここにはおよそ数千種類の弾薬がある。マイナーな銃弾から武偵弾まで。私もこの銃弾を使わせてもらっているぞ」

柚梨佳「そしてここには約数万個の薬莢が転がっています……きや

ああつ（ツルつ、ペシャつ）

願
「
・
・
・
行つてくる」

綾瀬 「待って待って収録中（絶対行かせるものかアア）」

翠 「願。彼女は一人で立とうとしているの。貴方が彼女を愛しているのなら、それを静かに応援するのが筋じゃない？」

「……そうだな。俺は何をしているのだ。彼女を愛してい

るのならば厳しさを見せて彼女の成長を見守ることが大切なのに・

・」

翠 「・・・制圧完了（小声で）」

綾瀬 「今なんて?!」

翠 「え?何でもありませんよぉ」

綾瀬 「死ね じゃなくて が流行ってるの?!」

翠 「伊椎 翠」

綾瀬 「・・・」

レキ 「・・・（スタッ）」

願 「ん?レキ、どうし（ギョツ）っ?!」

キンジ 「レキ?!なに抱きついてるんだ?!」

遼 「レキさん!ダメだ!病院にっ・・・」

綾瀬 「あ（抜け駆け・・・されちゃった・・・）」

翠 「レキちゃん、意外と積極的ねっ」（・・・残念なんかじゃない、願は他の女の子と付き合ったほうが幸せになれる・・・）」

柚梨佳 「ただいまですっうわぁ?!（レキさんがアアア!!!願くんがアアア!!!）」

アリア 「れ、レキ?!あんた何やってんのよ!」

静奈 「ふむ、裏側では修羅場だな」

レイン 「静奈、ちよつとこっちに」

静奈 「な、なんだ?（まさか、レインもしてほしいのか?）」

レイン 「うん、ちよつと（ギョツ）ふぁ?」

遼&キンジ 「この天然ジゴロ野郎があああ!!!」

遼 「ってキンジは人の事いえないぞ!」

キンジ 「なんでだ?!俺なんてそんなことしてくれる奴なんていないだぞ?!」

遼 「この無自覚ジゴロ野郎!!!」

キンジ 「なにがだあああ!!!」

レキ&静奈 「（幸せ・・・）」

その後、チームメシスが主催したラジオは放送禁止となった。なお、扼殺されかけた萩原願と成瀬・レインハートは現在入院中である。

番外編其の2 ラジオ！！（後書き）

ラルド「どうも、ラジオ系の話はこれが初めてです。描写がセリフでしか出来ないのはつらいですね。改めて皆さんの偉大さを感じた次第です。さて、次回からはジャン又編です。翠の感情が揺れ動きます！」

第11話 チーム・ネメシス発足前夜（前書き）

白石先生の『防人の45口径』ともコラボさせていただきました！

第11話 チーム・ネメシス発足前夜

ハイジャック解決後、俺たち男子四人はキンジの部屋で焼肉をやっていた。

「そういえばレイン。お前ってさ・・・」

俺がカルビを焼きながらレインに話を振る。

「——朝露のこと好きなわけ？」

「ケプツ」

レインがキムチを戻しそうになった。

「な、何を言い出すんだよお前は」

レイン涙目。遼はニヤニヤしている。キンジは首をかしげていた。
「だってSSRの合宿の帰りに・・・なあ？」

「なあ？つてなんだよ！！」

「あの人と・・・いや、すまない」

「そこで謝らないでええええええ！！！！」

レイン遊びは楽しいなあ。H A H A H A。遼とともに笑う。

「お前ら、ドSだなあ」

キンジ。作者と同じ突っ込みはやめような。

チーム・ネメシスの発足。武偵高、いや日本国武偵庁創設以来最強チームが発足した。そんな最強チームに、なぜか私が入っていた。汎用戦術チームとして活動するであろうそのチームなのに、なぜ情報科の私が？そんなことをつれづれと考えながら、私こと霧矢綾瀬は学園島を彷徨っていた。特に取り得のない私が、あんな優秀なチームに入れるなんておかしい。

「あれ？霧矢先輩じゃないですか」

うろろろしていたら、情報科の後輩にばったり出会った。桂柚梨佳ちゃん。萩原君といまや相思相愛。本人たちは気づいてないけど、「どうしたんですか？これからパーティーですよ？」

「・・・うん。そうだったね」

「・・・なんか元気ないですよ？ファイトですっ」

あせあせと腕をパタパタ振って応援してくれる。

「・・・足、引つ張らないか心配だね・・・」

「大丈夫ですよ」

「でもっ」

「願くんですからっ。ちゃんとみんなの事わかって来てますっ」

そうか。一瞬で憑き物が落ちたような、そんな感じがした。萩原君は私を理解してくれていたんだ。

「ほらほらっ。お肉なくなっちゃいますっ」

柚梨佳ちゃんはそのいいながら私の背中を押す。って！！

「柚梨佳ちゃん？」

「はい？」

「この手はなになぁ？」

この子、私が進まざるを得ないように銃を突きつけてきた！

「速く進んでくださいね？もう願くん達は肉食べちゃってるんDe
athから」

柚梨佳ちゃんもダークだなぁ・・・。私は苦笑しつつ、彼の部屋に急いだのだった。

「アリア。このダンボールは何だ？」

「し、知らないわよ」

「なんだ」

「知らないって」

「ナンナンドヨオシエテクレタツテイイジャンイカ」

「・・・タカ。出てきなさい」

チーム編成のお祝いとしてアリアが持ってきたダンボール。その中から出てきたのは・・・人だった。

「うわぁー！」

遼と俺、翠が即座に銃を構えたが、それより遥かに速く銃弾が俺

の顔を掠めた。

「うわぁ！！！」

・・・ダンボール星人。柚梨佳の早撃ちはオセロットのそれを凌駕する。

「アリアぁ！話が違うぞぉ！」

「・・・？まさか・・・タカか？！」

「・・・やつとですかい」

「タカ君かぁ・・・久しぶりだねえ」

「伊椎さん？！いたんだ？！」

なんとダンボール星人は俺の旧友だった！！

「生きてたんだ」

「怖いこというなよ」

「だって特殊作戦群壊滅したって聞いたぞ？」

第二次朝鮮戦争時、北朝鮮に派遣された自衛隊特殊部隊司令部直接指揮部隊の中核が陸上自衛隊特殊作戦群だった。確か直接指揮部隊の80%が北朝鮮特殊部隊によつて壊滅に追い込まれたって聞いたが・・・。

「あれは機密保持のための偽情報だ」

タカ。俺達が秘密情報取り扱い資格を持っていたよかったな。

「まあ、お前が生きていてよかった。お前も俺達のチームに入れ」

「唐突だな」

「これ性分なり」

「わかった。チーム名は」

「チーム名は『ネメシス』。ギリシャ神話の戦女神だ」

「・・・そうか・・・」

「なんだ。ネーミングセンスか」

「違うがな」

？何がまずいんだあ？そんなことを思いつつパーティーは開始さ

れ、そして夜は更けたのだった。

「アメリカ合衆国国家安全局直轄特殊部隊・・・『ニユクス』・・・
ネメシスの親、か。まずいな・・・」

第11話 チーム・ネメシス発足前夜（後書き）

思わせぶり且つ乱暴な終わり方ですみません。そのうち書き直ししますので！

第12話 虎徹・・・?! (前書き)

願に女が?! ヒロインズ、大ピンチ!!

第12話 虎徹・・・？！

タカが来た翌日の夜。キンジの部屋から聞こえてくるアリアと星伽の喧嘩を聞きつつ俺は銃の製作に励んでいた。「サムライエッジ」と命名したそれは、M92FSを素体とした銃だ。グリップの幅を増やし、バレルを露出させる。トリガーも遊びを出来るだけ少なくした。色は自衛隊時代に使っていたP220と同じように塗装。

「やっと出来た・・・」

マガジンを装填して、キンジの部屋とここを隔てる壁に向ける。壁に直交するように構え、トリガーに指をかけた。軽く指を動かすと強化型9ミリパラベラム弾（装備科・平賀さん謹製）が発射され、防弾・対爆発用隔壁の役割を果たしていたチタンⅡ炭化タンゲステン合金（厚さ5センチ）が面白いように撃ち抜かれた。そしてキンジの部屋に抜けて、アリアを拘束せんとしていた星伽の鎖を断ち切ったのだった。

「・・・・・・」

この場の全員が、サムライエッジの威力に恐怖した瞬間であった。つか、超硬合金撃ち抜くって何？！

自重しようと心に決め、俺は約束の場所・・・武偵高駅に向かった。モノレールの駅らしくこの島を南北に貫く道をまたいで建設されている駅舎の中に入って約束の人を待つ。

「・・・あ、いたいた」

改札の中にその人はいた。容姿は流麗。四月、サクラの季節によく合うおとなしい色合いの服を着て、髪の色は茶がかった黒。髪は背中と首で折り返し、さらに腰まで無造作に伸ばされている。間違いない。

「あ、願であゝ。えへへ」

そら見る。やっぱり知り合いだった。

「まだ痩せてるなあ。ちゃんと食べてる？」

「まあね。食べないとやってけないようなところだし」

「そうだねえ」

改札を抜けて俺の体のあちこちを触ってくる彼女。天真爛漫な彼女だが、恐ろしいのはその戦闘術である。萩原家に伝わる刀『虎徹』を使った戦闘では、俺でも引き分けに持ち込むことが精一杯なのである。しかし一見してはそんなことはわからない。天真爛漫、天然、頭がいいが馬鹿。

「願。彼女できたあ？」

「ごふっ」

ほら。

「唐突にそんなこと聞いてくるんじゃないよ！」

「できたの?!」

「何でこの答えからそんな結果が出てくるんだよ?!」

ちなみに出来てません。

「あ、願、願。お土産だよ」

「お、サンキュ」

話がコロコロ変わってややこしいことこの上ないな。

「時に、願君。お願いがあります。今日私、泊まる所が「いやだ」って言いかけるところで止めないでよ」

「今日は客がくるんだ。すまないがホテルにでも転がり込めアホウ」

「清々しいほど素っ気無い上に関係ない罵倒も混じっていましたね万歳！」

・・・はあ。

「しかたない。部屋はだいぶ余ってるから泊めてやる」

「キャッホオウありがと願!!」

「久しぶりだからな。後味悪いし、どうせ何か話すことがあったんだろ？」

うんうんとうなずく彼女。その彼女を案内しつつ俺は寮に到着したのだった。

「願?! 誰よその女!」

アリア大明神の降臨だ。ツインテールを逆立てて叫んでいる。まさに怒髪天を衝く。

「ああ、こいつは俺の「彼女です」っておいしい!!」

隣のアホウがニッコリ笑って発言に被せてきやがった。

「か、かの、か、か、か」

アリアシステム、機能停止。フリーズしました。システムの再構築、および強制再起動を行います。

「桃まんが空を飛んでいるぞお!」

「にやにい?!」

アリアが手すりから身を乗り出して空を見る。その隙に俺はドアを蹴り開けてアホウの首根っこをつかんで飛び込んだ。・・・疲れる!!

「願」

「ゴフアアアアア（ブシャアアアア）」

馬鹿が風呂から出て、そのままリビングまで歩いてきやがりました。まずい。CPUが熱暴走しそうだ。強制終了、冷却開始。なに? 温度が下がらない? 液体窒素もってこい!

「死ぬわあ!!」

俺の脳みそは俺を殺したいらしい。

「願?」

キサマ。人を死の瀬戸際まで追い詰めやがって首をかしげてんじやないよ。

「とにかく服着てきて。話しどころじゃないし、湯冷めするぞ」

「・・・しゅん」

うなだれて部屋に向かう彼女。・・・サムライエッジをあいつに撃つてもイイヨネ? イイヨネ?

「って、いかにいかに。壊れちゃいかに」

「??」

着替えるのが速い彼女。って、なぜに浴衣? まあいいや。

「んで、何の話なんだ?」

「ん」。簡単に言っちゃうとね」

「『虎鉄』を願にあげるって話だったよあ」

「・・・はい?」

「だから、この『虎鉄』をあげるっていう話なんだよあ」

いやいやいやいやいやいや。ないないないないない。それと俺のナイフ、つか色金は一緒に持つと共鳴して大変なことになるんだぞ? !ただでさえその刀は超能力アンテナみたいなものなんだから!

「おとーさんが言ってたよ」

「あんのクソ親父があ・・・」

『萩原で一番強いお前だ、お前なら人体じっけ・・・じゃなかった、モルモット・・・じゃなかった、その力を使いこなせるはずだ! (キリッ) まあ頑張れ (wwwwwwwww) 』

「ざけてんのかあああああ!!!」

「それがおとーさんクオリティーだよあ」

しかし、そうなると彼女は・・・?

「おいアホウ」

「名前があるんだよ?」

「アホウで十分だ。お前はとうするんだ」

「えへへ」。新しい奴もらえるんだよあ」

「・・・そうか。よかったな」

心配した俺が馬鹿だったか。

「その刀とは?」

「村正」

「・・・は？」

「村正」

「・・・ほんとにあつたんだ・・・それ。」

「あの流麗なフォルム！切れ味抜群のあの刃！どれをとってもかっこいいんだよお」

「・・・大事に使ってな」

「そっいいながら俺は『虎鉄』を手を取った。」

「願。気をつけてね」

「??」

「いま、大和を狙ってる奴らがいる」

「マジモードか。俺は姿勢を正す。」

「・・・イ・ウーか？」

「あの組織は教授・・・シャーロック・ホームズ一世が舵をとっている。そんな馬鹿はしない」

「じゃあどこだ」

「・・・願たちのチーム名は？」

「『ネメシス』だ」

「それがどうした。」

「『ネメシス』の上位存在は？」

「・・・『ニユクス』」

昨日タカが言っていた言葉。アメリカ合衆国軍の特殊部隊・・・。

「貴方たちを狙っているのはアメリカよ」

「確か去年も襲撃受けたなあ」

「だから・・・生きてなさい。その刀を使って。貴方は生きて。わ

たしが樹叔父さんの敵を討つから」

「敵？」

確か叔父さんを撃った奴は自衛隊が総力を挙げて追跡して蜂の巣になったはずだが。

「・・・すぐにわかるわ」

そっいうと彼女は立ち上がり、

「願願。ごはん」

アハウモードに戻ってしまった。

「しかたないな・・・」

そういいながら俺は立ち上がり、台所に向かう。

「棕香。なにがいい？」

「ん、願くんライス！」

「白米のみとなりますがよろしいでしょうかよろしいDeathね」

「いやあああああ！！！」

こうして、我々の夜は更けたのだった。

第12話 虎徹・・・?!（後書き）

次回予告！

「願くん。その人・・・」

「願。アンタ彼女いたの？」

「萩原君、部外者を連れ込むのは・・・」

次々と襲い掛かる誤解。

「いたぞ！男の敵だ！」

『かかれええええ！！！！』

暴徒化した男子生徒！

「願。まさかお前に・・・」

「O H A N A S H Iの時間だ」

犠牲になる遼。

願

「捏造するなよ」

翠

「ほんとよね」

柚梨佳

「ひどいよ」

ラルド

「すみません」

棕香

「願くん願くん、今日も夜楽しもうね」

男子一同

『かかれえ！！！！』

願

第13話 国家機密

「棕香」

「なあゝにいゝ願」

明くる日の朝。俺は健全なる武偵高なので学校に登校しなければならぬ。しかし棕香はどうするのか。そう俺が問うと、

「わたしはねゝ」

そう言いながら棕香は鞆の中に手を突っ込んだ。

「あ、強襲科だ」

「知らなかったんかい?!」

「だってこんな堅苦しい文書読みたくないもん」

「・・・全く。まあ、棕香らしいといえば棕香らしいな。」

「と、いうことで。よろしくね『後輩くん』」

「ああ。・・・何か異様な言葉が聞こえてきたんだが」

「後輩くん」

「・・・コイツに後輩といわれるなど、納得がいかない！」

「・・・実際、面倒見てるのは俺だよな」

「でもでも？武偵高の中では先輩って呼んでも差し支えないと思うよ？」

そりゃあそうだが。それとこれとは話が違うだろう。

「武偵高には棕香みたいなアホウがいてな。棕香がくっついてるとうるさい男子が群がって来るんだよ」

「それは私の人気が高いからかな？」

天然なのか、それとも傲岸不遜なのか。

「・・・そういうことにしておこう。だからだな。俺を後輩と呼ぶな、つか近寄るな」

「願ひどい」

「ひどくて結構」

棕香がむくれるが知ったことじゃない。俺は鞆をつかんで部屋か

ら出たのだった。

「願！アタシに勝てるかしら？」

「何を言っているんだアリア。お前に負けることは決してない」

強襲科の建屋にて。現在アリアは俺に対して日本刀を向けてきていた。俺は新開発のサムライエッジを仕舞ってあるホルスターに手をやる。

「ななな何を言ってるのよ！あたしが負けるわけじゃない！この前は・・・そう！不意打ち！卑怯極まりないわ！」

「いや、勝てればいい世界だと思うんだが・・・？」

アリア。勝てなかったからってそれはないだろう。

「だから今日は・・・タカと一緒に戦うわ！」

「お前のほうが卑怯だろうが！！」

「ハハハ諦める願。前回出番がなかった仕返しだナニスグニオワル」

「何の話だ？」

俺にはよくわからない。

「死ね！！」

「殺す気満々ですね？！」

二人がいきなり飛び掛ってきた。タカはM4A1 CQB-Rを構えて、アリアはどこから調達したのかVEPR-12Eセミオートマチック・ショットガンを構えて。タカのライフルにはフォアグリップ、クレーンタイプストック、ダットサイト、下部アタッチメントにはショットガンを装着されており、ドラムマガジンを使っていることからおそらく相当な時間リロードが不要と推定される。相当な金をそれに使わないと整備や維持も難しいだろう。フェラーリのようなものである。アリアのショットガンは東欧製であり、フランスの国家警察が制式採用しているやつだ。はつきり言って、ショットガンは『マスターキー』と呼ばれるように突入作戦に使われるものから殲滅戦で使用するようなものまでありとあらゆる銃弾が使えるだけ厄介なのである。

とまあ、かな〜り真剣に説明し終わったところで、こつちもそろそろ攻撃してみよう。

「二人まとめてきたのは間違いだったな」

サムライエッジを引き抜き、腰だめにして引き金を引く。改良型9ミリパラベラム弾が強襲科独特の硝煙に満ちた空気を引き裂き、アリアとタカがあらかじめ身に着けていたC装備に着弾した。

「ぐっ!!」

タカが少し呻いた。その腹にまた一発、そのまま無理に突っ込んでくるアリアの腹に二発ぶち込む。

「願!!アンタ少しは動きなさいよ!」

「断る、動く必要が皆無だからな」

「なめやがって……!!!!」

「タカ。特殊作戦群の時とは大違いだな」

そっいいながらコルト・パイソンを引き抜いてタカの両足のひざと両腕のひじ、肩を撃つ。銃弾を虚空にばら撒いて、シリンダーから薬莖を排出。パイソンを目の前へ振るう。そのシリンダーにはちや〜んと六発が入っている。名づけて空中リロード。ぶつつけ本番でやってみたが、案外簡単だな。

「く……」

「連射時の溜め方。目標の軌道の予測。自分の銃弾の状態と、相手が放つ銃弾の状態。それらを考えないと生き延びれない。さらに冷静になって行動しないと作戦に支障が出る」

サムライエッジの引き金を引き、アリアの行動を妨害する。その反対側では、タカがパイソンに翻弄されている。

「終わりにしよう。そろそろ邪魔が入りそうだ」

棕香の愛刀だった『虎徹』を鞘から抜き、正眼に構える。タカがサバイバルナイフを、アリアが日本刀を構えて突っ込んできた。

「萩原流戦器戦闘術・剣技。奥義の壺……光坂」

サバイバルナイフと切り結び、アリアの鳩尾に蹴りを数発一気に叩き込む。アリアの小さな体が回転しながらその辺に転がっていく

のを目の端に捉えつつ、俺は『虎徹』に少し体重をかけた。すると・

「なに?!」

なんということでしょう。特殊作戦群でも多くの隊員に愛用されている、世界でもっとも使いやすく堅牢なナイフが、まるでバターのようによろよろと断ち切れてしまったではありませんか。そのままたかの目の前で刀を返し、柄でたかの頭部を殴打。たかの体が見えてがくりとバランスを崩したその瞬間を狙って、俺は柚梨佳とお揃い（偶然だぞ）のSAAを引き抜く。たかが背中に回していたM4をつかむ前に、たかの防弾ベストにはいくつもの銃創ができていた。

「・・・っ!!」

たかの目から光が消え、特殊作戦群で数少ない生存者が敗れ去った。・・・死んではいないだろうな？

「たか!! アンタ・・・よくも!!」

「いや、なして俺のせいになるのかわからない」

振り向くこともなくサムライエッジで背後に銃弾を叩き込む。悲鳴とともに、アリアは倒れたようだ。

「願〜!!」

「・・・げ」

自らの悲哀を確かめる間もなく、俺は『今更』転校してきやがつてしかも俺の部屋に棲みついている（誤字じゃない）迷惑極まりないがその顔が男に人気であることは認めざるを得ない強襲科の先輩かつ俺の関係者』に抱きしめられた。

「会いたかったよ願! 願! 願!」

「人の名前を連呼するんじゃない! 叩き折るぞアンタの脊髄!」

顔を『今更（ry）』の身長に合わせて怒鳴ったのにもかかわらず、『今更（ry）・・・つまりは棕香・・・は平然としている。

「今日はカレーがいいな」

「お前は七味唐辛子でも丸呑みしてやがれ」
今俺は結構怒ってます。

「・・・その、願と一緒になら、いいよ？」

「俺まで地獄に引きずり落とす気が貴様?!」

呆れて怒鳴る俺に、棕香は膨れっ面をする。

『シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ』

「何でしょうこの子供に聞かせてはいけない大合唱は」

おい武偵高の男子。欲望に忠実すぎるだろ貴様ら。

「・・・？ねえ願。掲示板に願の名前が書いてあるよ？」

「は？確か単位は落としてないぞ」

半信半疑で掲示板を見て、納得した。

『萩原願 伊椎翠 桂柚梨佳 成瀬・レインハート 霧矢綾瀬 鷹
山勇治 風連希 —— 棕香 ヘタレ。これを見次第直ちにブリー
フィングルームに急げ』

「ヘタレってだれだああああ!!!!」

しかも棕香の苗字のところに・・・血、かな？怖いわ！

「急ごう急ごう」

棕香。背中に大規模の質量を持つ半球状かつ柔軟な物体が二つ当たってるんですが。

ブリーフィングルーム。ヘタレとは遼なことだった！

「まったく。失礼だな」

「事実をよくあらわしていると思うぞ」

「アンタ最低ですね」

そう談笑する・・・冷や汗をかきつつ談笑する俺たち。なぜなら
我ら二人の前の机の上には・・・。

冷戦時代に作られた自律型二足歩行式戦闘服、通称G・Gが奪取
された、その関係書類があるのだから。これすなわち、国際連合安
全保障理事会の常任理事国の軍隊の司令官ですら知らない事をあら

わす。冷戦時の西側諸国の技術発展はブラックボックスの中に仕舞われているものがあまりにも多い。これもそのひとつだ。

「そうなんですか・・・願の部屋に・・・」

「ええ。彼の料理を毎日食べさせてもらってるんですよ」

『ピシッ』

空間に切れ目が走った。

「お風呂も一緒に入ったり——」

「デマばら撒いてるんじゃないねえ！俺が殺されるんだよ！」

「一緒に寝たりね」

『コーホー』

暗黒面に落ちてしまった・・・。

「い、いいですか君たち」

そううつろたえながら話そうとしているのは情報科の教師である。

実はこの人、公安調査庁で秘密取扱資格特Aクラスだった人だ。

「本日午前十一時ごろ、わが国の防空識別圏内に不審な物体が複数侵入した。航空自衛隊と海上自衛隊が警戒態勢に入り、百里基地から最高戦闘装備を施したF-15Jを十機派遣した」

「十機も・・・」

「しかし、現在一機として応答する機体はない。全てが撃墜されたそうだ。安全保障会議で自衛隊の秘密裏の出動とともに、『Fユニット』と壊滅した特殊作戦群、全国最強の武偵集団である武偵庁特殊部隊の隊員が所属する『チーム・ネメシス』が臨時に国家安全保障組織として発足されることが決定した」

「しかし、神埼と遠山が・・・」

「彼らには『イ・ウー』がある。彼らにはそれをやってもらおう」

「・・・了解。これは国家機密作戦ですね？」

「ああ。君たちには護衛として首都方面隊特殊部隊が張り付く。現在G・Gは東京湾上空を航行中だ」

情報科の教師はそう言っていると部屋から出て行った。

「・・・よし。事態は切迫している。行動開始」

・・・そう宣言した瞬間、国家の存亡と1200万人の命とを懸けたミッションが始まった。

第13話 国家機密（後書き）

最近作品崩壊（作画に非ず）が進んでいますね（失笑）

なんか気分転換になるものはありませんか？

第14話 ファースト・コンタクト 〱戦女神の場合

海上自衛隊自衛艦隊司令部――。

「特別編成部隊より。目標の迎撃に失敗、目標の上陸^{ランディング}を確認したとの事です」

「よし。首都方面隊に電文を打て」

陸上自衛隊首都方面隊司令部――。

「目標の領土侵犯を確認。これよりミッションを開始せよ」

『こちらS^{シエラ}。了解した。ミッションを開始する』

青海01エリア。G・Gは臨海副都心再開発計画で新しい工場などが誘致されたそこに侵入していた。SATが周辺を封鎖すると同時に陸上自衛隊の第三十一普通科連隊がレインボーブリッジを含むお台場本島への侵入を禁止。特殊作戦群が海上自衛隊のLCCACでお台場へ突入した……。しかし。

「特殊作戦群との通信が途絶！」

「LCCACを戻せ！」

「……駄目です！攻撃を受けています！」

日本最強と名高い特殊部隊が、あつという間に消息不明となってしまうた。

「……青海01エリアに、ネメシスを派遣しろ」

「しかし、彼らは高校生です！こんな重大な国家安全保障上の問題に関わらせるなど！」

「彼らの未来を狭めることにもなります！」

首都方面隊司令官のあまりにもあつさりとした命令に、副官二名が反発した。

「彼らのリーダーは『Fユニット』の指揮官だ。副リーダーも然り。チームのうちの三名は自衛官、四名は武偵庁特殊部隊隊員、一名は内閣情報調査室諜報員、一名は元S A T。こんな統合任務に適したチームもあるまい」

「・・・目茶苦茶作為を感じるんですが」

そんなこんなで、あまりにもあつさりとチーム・ネメシスは出勤することと相成った。

「了解。出勤します」

C 装備に着替えていた全員に聞こえるように答え、運転手・・・武藤に指示を出す。封鎖エリアの内部、廃倉庫の中でトラックが猛々しい息吹をあげた。

「出してくれ」

「おうよ」

見た目はなんて事のないハントトラックなのだが、中身はれっきとした戦術輸送車である。ハニカム構造のエンジンに泡を充填したタイヤ。荷台の天井にはプレート状の衛星通信アンテナが設置されており、トラックは全体がバズーカはおろかB - 2 爆撃機の一トン爆弾にも無傷で耐えられるほどの強度を持つ。

「着いた！出るのは十秒後だ！」

「感謝するぞ武藤。・・・全員。元より死を覚悟の上だが、あえて言おう。——死ぬなよ！」

『了解！！』

「よし！では・・・いくぞ！」

工場特有の煙突基礎部分。そこに突っ込むようにして停車しているトラックから、S A Tの格好をして飛び出す。

「こちら萩原。反応なし」

『こちら霧矢。反応確認。建屋内部と思われます』

『棕香です。同様の反応と思われるものを複数個発見しました』

「突入メンバーは自衛隊関係者！行くぞ！」

『伊椎了解』

『鷹山了解』

スチール製のドアの前でチート並みの銃を構えるタカ。翠はその隣でHK91を構えている。俺？俺はエントリーデバイスを構えて待機中さ。

「・・・3」

「・・・2」

「・・・1」

そして。

「「0!!!」」

エントリーデバイスを扉に叩きつけて、扉を無理に開けながら転がり込む。89式小銃を構えて一気にキャットウォークを走る。その前方に青い光が見えた。

「G・Gの複眼のライトかも知れん」

89式のダットサイト越しに確認。人型の影の頭・・・それも、目・・・の部分に、青い光が見えた。やはり、G・Gだ。

「確認。対象だ」

「了解。一気に狙撃して倒しましょう」

「・・・よし。一気に行くぞ。・・・今だ」

3発の銃声がシンクロして、G・Gの頭部を吹き飛ばす。センサー系統が無くなった無人兵器の末路は哀れである。89式のグレネードランチャーで内部から引き裂かれた。

「次だ。・・・今！」

シンクロして響く銃声。G・Gはそれと同時に次々と倒されていく。

「・・・今！」

最後のG・Gが破壊されたとき、まだ俺たちは一回もマガジンを交換していなかった。

「・・・状況、終りよ・・・」

終了、と言いかけたとき、下のほうに人影を見つけた。人影からわかるのは、何かしらアーマーを着けていることと刀を持っていること。

「・・・人がいる。救助するぞ」

キャットウォークの階段に、タカが足をつけた瞬間、階段が凍りつき始めた。

「?!」

俺が咄嗟にタカの体を引き倒していなかったら、タカは氷漬けになっただろう。

「大丈夫そうだな」

「ああ」

俺が再び下に目を向けると、その人影が出てきていた。暗視ゴーグルを起動すると、その人影が明瞭に捕捉できた。背の高い、西洋の女性だった。甲冑に身を包み、刀を肩に担いでいる。

「・・・陸上自衛隊だ。そこを動くな」

89式小銃の銃口を彼女に向ける。彼女は身じろぎひとつもしない。しかしタカと翠がそれぞれ銃口を向けると顔色を変えた。

「・・・っいて来いFollow me、萩原・・・」

「・・・三十代目、ジャンヌ・ダルクだな？」

「「「?!」」」

翠とタカ、そしてジャンヌもびっくりする。

「・・・なぜわかった」

「その刀だ。それはデュランダルと呼ばれる伝説の剣・・・フランスに伝わる伝説の剣だ。氷を操る貴様にとっては相性がよい刀だろう？」

「そうではない！なぜこれのことを、そして私のことを知っている！！」

うるたえつつも、彼女は聞いてくる。

「そう不思議でもない。『大和』のことは知っているだろう」

「・・・なるほど。『あの色金』か」
「そうだ」

大和。日本の治安維持組織を裏で纏め上げている、いわば簞だ。日本を支えてきた『暗黒色金』。これが無かつたら、おそらく日本は無かつただろうとも言われているそれを管理しているのも大和だ。
「・・・一度退くでしょう」

「させるか」

冗談ではない、とばかりに5、56ミリNATO弾を数発撃つが、銃弾は氷の壁に阻まれた。

「さらばだ」

気づくと、彼女の上の天井が凍っている。彼女はCZ100でそれを碎き、一気にジャンプ。イ・ウーのものらしき飛行機で飛び去っていった。

「くそっ・・・逃がしたか・・・」

「さすがにあれは追いつけないわ」

「お前に罪は無いよ」

翠、タカ。ありがとう。

「萩原くん！！大丈夫？！」

霧矢先輩が必死に走ってきてくれたぞ！！

「ええ。霧矢先輩こそ大丈夫ですか？足挫いたんじゃないですか？」
「?!」

お礼にひざの裏を抱えて先輩の体を持ち上げる。もう片方の腕は必然的に背中を支えることになる。所謂『お姫様抱っこ』である。

「~~~~／／／（キャ~~~~）」

「そんなにうれしいものなんですか？」

「~~~~／／／（ガガガガガガガ）」

駄目だ、なぜか処理落ちしてる。

「願・・・。少し自重しような」

レイン、何を言っているんだ？

「願、男の敵め」

遼。そんなに血走った目で見るなよ。

「願願く！お姉ちゃんうれしいよ！！」

『ハアアアア？！』

「え？なに？何かまずいこといったかな？」

「さあ？」

翠、柚梨佳。そんな意外そうな目で見ないでくれ。

「あの、あなたの名前は？」

「棕香だよ？」

「・・・萩原棕香さんですか？」

「うんにゃ。在日米軍から外人部隊、果ては米軍特殊部隊のFOX HOUNDまで渡り歩いた萩原棕香さんだよっ」

「「・・・（ずううううん）」」

「「??」」

なんでこの二人が頭を抱えているのかわからない。

「・・・よし！状況を終了！帰るぞ！！」

『・・・』

「なんだ、どうした？」

『・・・よ』

「は？」

『何で貴様はそんなにテンプレートなシーンが似合うんだよ！』（男子心の叫び！！）

「??」

「願・・・その格好、まるでお姫様救出の後の王子様だからね？」

「馬鹿いうな。温室育ちの王子様がこんな重い装備を持ち歩けてたまるか」

「そうじゃなくて！」

「・・・願くん、女の子のこと勉強したほうがいいよ？」

「（ガーン）」

ゆ・・・柚梨佳お・・・ガクッ。

その後、今までのことは全て隠蔽されたという。え？G・G？青海封鎖？何のことでしょう。お姫様抱っこの感想？・・・Excuse me！だっただぞ！！

第14話 ファースト・コンタクト 〽戦女神の場合〃（後書き）

願！前に出ろ！隊長から嚴重注意だ！

願

「ああ？」

隊長

「なんでもないっす（ガクブル）」

願ぶっ殺す。何無自覚にフラグばら撒いてるんだよ。しかも借りてる人だぞ！他方面のヒロインだぞ！なにやってんだお前は！

第15話 タカの戦妹（前書き）

希

「わたし初登場です！」

タカ

「その代わり俺が名前しか出てないけどな」

第15話 タカの戦妹

任務が終わった次の日。授業をサボって岸壁を歩いていると、後ろから声をかけられた。

「萩原先輩！」

「ん？・・・風蓮さんか。どうした？」

そこにいたのは風蓮希さんだった。青い髪をリボンでくくってポニーテールにしている。

「あの・・・その、ですね」

髪のを潮風になびかせながら、風蓮さん・・・タカの戦妹^{タカ}・・・は言いよどんでいる。

「わ、わたしと、ですね・・・」

「??」

顔が紅くなっているが、どうしたんだろう。熱でもあるのか？

「つ、つきあっひゃあう！」

「?!何だ?!」

俺は熱を測るために額に手を当てただけだぞ？

「ひゃ、ひゃう」

「??」

よし。熱は無い。

「んで、どうしたんだ」

俺が平静そのものの状態で訊くと、彼女は顔を紅くしてしまった。

「しゃ、射撃訓練してください！」

「は？同じ強襲科なんだから射撃訓練くらいは一緒になるだろう」

「そうじゃなくてですね・・・私に射撃の極意を教えてください！」

・・・戦兄^{タカ}がいるだろうに。

「わたし、その・・・リボルバーとオートマチックのダブル^{双銃}なので

コツがつかめないんです」

「そうか、わかった」

そう俺が答えると、彼女は顔を上げてキラキラした眼で俺の顔を見ってくる。

「タカに教えてもらえ。じゃあな」

「待って待って待って!!!」

そのまま立ち去ろうとしたら、襟をつかまれて引きずり戻された。脅力が半端ないな。

「『ネメシスの悪魔』に教えてもらわないと無理なんです!」

「・・・タカにこのことを教えたらどうなるかな」

少し脅してみるが、彼女には聞かなかった。さすが生徒会役員。

「黙っててください。それでですね!」

彼女は一気にまくし立てる。

「わたしのこの銃は日本警察が長年使用してきたリボルバーです。自衛官の先輩なら撃ったことくらいあるでしょう?」

「まあな」

「そしてこっちは45ACP弾を使うオートマチックです。こんな反動がある銃を使いこなすのは至難の業でしょう」

「じゃあ使つな、とは言わないでおこう。」

「ですから、教えてもらいたいです。鷹山先輩はベレッタM84とM4、デルタエリートですから」

「・・・そうか。じゃあ、強襲科に今すぐ来い」

「来い?行こうじゃないんですか?」

「いや。来い、でいいんだ」

風蓮さんが首をかしげた瞬間には走り出していた。敵の懷に飛び込む獰猛な獣のように走る。

「あ!!!」

反応遅いよ風蓮さん。

「遅い」

「す、みま、せん」

まあ、速いほうではあったな。強襲科建屋まであそこから1キロ

メートルはあった。

「じゃあはじめるぞ」

「ま、待つてください、まだ、息が、整いまさアホウ。戦場では息を整える暇などない。スナイパーはそんな状況下でも銃弾を敵に当てなければならぬし、突撃兵は全力で相手を倒さなければならぬんだ」すみません」

射撃レーンに立たせる。・・・それにしても、細いな。

「じゃあ、まずはデトニクスからだ。今の時代、出回っているものの多くは自動拳銃だからな」

「はい、わかりました」

デトニクス45口径を片手で構えさせる。照門^{サイト}越しに見えるのはマンシリエット。

「・・・」

そのまま無言で引き金を引く。頭部を撃ち抜かれたマンシリエットが倒れるのと同時に、俺の左側で二つマンシリエットが立ちあがった。彼女は無言で次々と撃ち抜いていく。

「これならどうだ？」

「?!」

マンシリエット・シビリアンが多数起き上がった。その中にひとつだけ敵を織り交ぜてある。

「駄目だな」

「どうしてd「お前、もし俺が相手ならもう体が消えてるぞ」先輩は化け物ですから別格です！」

「次行くぞ。一秒で敵を倒せ」

また立ち上がる。赤の敵は目立ちやすいのだが。

「え?!え?!」

「終わり。まだまだだな」

「・・・じゃあ先輩がやってみてください」

「わかった。よく見てろ」

彼女と入れ替わりでレーンに入る。サムライエッジを引き抜き、

「ちょっと待ってください」

「なんだ」

「その銃って架空の銃でしたよね？」

「作った」

それつきり彼女は黙り込んでしまった。マンシルエット・エネミーが起き上が……途中でぶち抜いていく。

「……」

「次！」

シビリアンはスルー。エネミーが立ち上がる瞬間にそこに撃ち込んでいく。マガジンリリース、装填。スライドを引く、発射。これを0.1秒でこなせる奴は世界でも少ない。

「……」

「ほら次！」

全てのエネミーとシビリアンが立ち上がる。俺は跳弾などをフルに活用しながら片付けていった。

「まずは構えだな。早撃ちをやってみるか」

自動拳銃

「オートマチックで早撃ちって難しいですよね？」

腰に落とし込んであったXD-9で早撃ち。飛んでいた力モメを撃ち落とす。

「……」

「難しいか？」

「難しいですよ！難しすぎですって！」

「まだ早かったな」

反省しよう。

「違います、たとえばあの人がってではしません」

「あの人？」

「蓼光稀さんです」

「……ああ。あのMac10」

「はい。あの人はSATだったんですよ」

「マジか！」

「マジです」

SAT隊員は男しかねないはずだぞ？！

「特例だそうです。SATの突入部隊の副長だったと」

「・・・一度戦ってみるか。それで。そこで何やってるんだ夢」

彼女が夢と言った瞬間にはすでにいたような。

「萩原。アンタ、何勇治の戦妹を・・・」

「なんだ？何も疚しいことはしていないが」

「魔改造しようとしてんのよ！」

「本人の希望だし俺は改造する気はない！だから風蓮さん、あなたも何か反論しろ！」

「改造人間はいやです！」

「なんでそっち？！しかも改造する気はないって言ってるじゃん！」
夢。夜道には気をつけるよ（笑）

「さて。タカも来たことだし、俺は帰る」

「え？やっていけないんですか？」

「ああ。正直言つと眠い」

純粹な彼女を相手にしていると疲れる。

「そうですか・・・。わかりました！お疲れ様です！」

「おう。がんばれよ」

そういつて、俺は寮に戻ったのだ。そう。確かに俺の部屋のはずなのだが。

「萩原くん、これから一年間よろしく」

「帰ってください、ただでさえここは男四人が固まっっていて・・・
そうか」

確か不知火と武藤が転出するんだったな。銀の部屋に移ると聞いたが・・・災難だな。

「遠くんには許可を取ったから」

「どうせ脅したんでしょうねえ!!」

まったく。なにやっつてんだ霧矢先輩!!

「わたしもいるよ願!!」

「死ね消えるカス。貴様がいると空気が汚れるからさっさと失せろ」
絶賛ブチギリ中。

「実の姉にその口の利きかたはないでしょ・・・」

「貴様が血縁者とは認めたくないな」

「ひどおい」

「消えろと言ってるのがわからんのか!先輩も!さっさと出て行く
!あと十秒!」

出てかなかつたら撃つ!

「萩原くん・・・お願い」

「駄目です。あと五秒」

キヤアアアと叫んで逃げ出す霧矢先輩。
アバズレ 棕香は体をくねらせて

抵抗している。

「いやいやいやいやん」

「・・・もういい」

寝る、と言い放って俺は寝室に入る。ベッドに倒れこむと、慎ましいノックの音が聞こえてきた。

「棕香、出ておいて」

「はいはい」

棕香の足音が遠のいた。安心して寝られる・・・。

「あら、願の彼女?」

「ち、ちがいます!あなたこそどなたですか?」

「姉です」

いやな予感しかない!

「じゃあ、先輩に伝えてくださいますか?今から買い物に行きましよう、って」

「はいはい」伝えてきますね」

「お願いしますっ」

・ ・ ・ 安寧は訪れないものだなあ ・ ・ ・ 。
そうしみじみと考える
萩原願であつた。

第15話 タカの戦妹（後書き）

次回は希、タカ、アリアと買い物です！
願の財布には一体いくら入っているのでしょうか！！

第16話 休暇・遭遇・遅刻・そして始まり

「タカ。ようやく最低限のおしゃれを覚えたんだな！」

「失礼だな！つて、テメエも人のこと言えねえだろ！」

そう言われ、俺は改めて自分の服を見る。灰色のＴシャツに市街地戦闘用迷彩服のズボン。靴は当然半長靴。銃もきちんと持っているぞ！しかしタカと風蓮さん、そしてアリアは絶句している。

「・・・何が問題だ」

「問題しかない！」

「先輩、センスないですよ」

「・・・着替えてこよう」

——数分後。しぶしぶ着替えた俺は外に出た。

「待たせたか」

「「「「・・・?!」」」」

今日は少し寒かったのでコートと、その中には白のワイシャツ。ネクタイこそしていないし裾は出しているがまあ許容範囲だろう。下は黒のズボンである。ちなみにこれらは全て防弾繊維。

「お前・・・さつきとはぜんぜん違うじゃないか」

「何でさつきこれを着てこなかったんですか」

「そうよ！アンタ気イ抜けてんじゃないの?!」

「・・・なんでたかが買い物で気を張り詰めてなきゃいけないかわからないし、そもそもさつきは眠かったから寝ぼけてたんだ。わかったな？行きたいところあるんだろ？」

話をたたむと、みな不満そうにしながらも出発してくださった。

お台場に新しくできたショッピングモール。地下五階、地上12階建ての怪獣か貴様はと突っ込みたくなるようなビルである。その中のブティックにて。

「萩原先輩。似合いますか？」

そういつて風蓮さんが試着室から出てきた。飾り気のない白のワンピースである。だが、その飾り気のなさが似合う。

「おう。似合ってるぞ」

「~~~~ノノノに、似合ってますか、そうですかつ」

彼女は試着室から出るとそのまま俺に服を押し付けてきた！満面の笑みだ！

「買ってください（キラキラキラキラ）」

純粹な眼はキツイ！

「いくらだ」

「えつと・・・XXXXXXです」

・・・財布の中には、ラッキー！臨時収入がそっくりそのまま入ってる！！

「これだけか？」

「え、えくと、その・・・」

また顔を紅くする。

「ほ、ほかの店なんですけど・・・」

「そうか。わかった」

その後、俺はその服と防弾繊維で作られたホルスター（アリアの）を買った。タカの物？自分で買えって殴りつけた。

学園島の臨海公園にて。そういえばここはレインと戦ったところだったな。レンガの壁には銃弾が穿った穴がしつかりと残っている。

「いつぱい買ってもらっちゃいましたね・・・」

「いいのよドレイなんだから」

「あア？誰がドレイだ」

「た、タカよ！」

凄んだ俺に、あからさまに逃げを打つアリア。その醜態に苦笑しつつ、俺はお使いに行っていたタカ（じゃんけんの結果だ）を迎えた。

「お疲れ」

「そう思っんならお前が行けよ」

そういうお前も大して疲れていないだろ・・・。

「鷹山先輩、ありがとうございます」

「タカ、お疲れ」

二人が、タカから缶ジュースを受け取る。うん、この二人に劳われれば疲れも飛ぶだろう。・・・殺したくなってきた。そう俺がひそかに殺意に燃えていると、後ろからいきなり声をかけられた。

「あれ？萩原くん？」

「萩原か？」

「・・・？ああ、霧矢先輩に朝露か。買い物か？」

俺の後ろに立っている二人とも清楚な格好をしている。

「そうだよ。萩原くんたちは？」

「買い物付き添いです」

「大変だな」

朝露。お前の気遣いに感謝する。

二人はそのままアイスを食べに行ってしまったので、俺たちは再び買い物に出た。

「願。アンタ何か買いたいものないの？」

「そうだな・・・」

強いて言うなら銃弾くらいかな？最近無節操に使いすぎたからな・・・。

「そう。じゃあ買いに行きましょう」

「先輩を振り回しちゃいましたからね」

・・・こういう単純な奴に弱いんだよな・・・俺は。

「願よ・・・M4をさらに改造したいんだが、どうすればいい？」

「そうだな・・・グリップにフィンガーチャンネルをつけたらどうだ？」

「あゝ、なるほどお。保持性は高くなるな」

「それと、ストックのカバーに銃弾を隠しておけ」

「非常事態用に、だな」

ちなみに俺は武偵弾を隠している。種類は秘密だ。どこで魔剣が聞いているかわからないからな。

「着いたわよ！」

「大きな購買ですね・・・」

「いや、購買ってレベルじゃないし」

白亜のビル。地上五階地下三階のそのビルは丸々全て武偵高専用の購買なのである。

「さて、買いあさるかな」

「アンタ、いくらお金あるのよ」

それは秘密だ。あいまいに笑った俺の背後から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「星伽さん、それってM60用だよ・・・？」

「いいんだよ、わたしM60持ちだから」

「ま、マジですか？」

振り返ると、銀髪の男子と巫女さん姿の黒髪の少女がコーナーを物色していた。・・・おい、そこはバレットライフルやら何やらのやばい銃弾が揃い踏みしてるところだぞ。

「レイン。星伽。そこで何してるんだ」

「ああ、願」

「萩原くん・・・こんにちは」

レインは片手を挙げて、星伽は頭を軽く下げて挨拶してくる。

「もしかして、お前の銃って結構やばい？」

「俺じゃない、星伽さんの銃がやばいんだ」

「??」

レインから星伽に眼を向けると、星伽は顔を赤らめて――

「わたし、M60を持ってるんです」

「・・・ハアアアア？！」

タカとハモったが気にしない。M60だと・・・？！ベトナム戦争で大量の生き血を吸った銃だぞ？！ヘリコプターのドアガンにな

った銃を、何、女の子の腕で保持して撃つのか?! 新鮮な驚きを感じ、いい経験を味わった。

購買から歩いて寮に帰ってきた。遼はいるのかな? と思いつつ玄^{エント}関^{ランス}を通る。

「じゃあね」

「先輩、また明日射撃のご指南を――」

「希? どういうことだ」

不用意に言うからだこのバカが。タカの殺氣にアリアですら震えているぞ。

「は、萩原先輩に今日射撃のコツを教えてもらったんですが・・・」

「ああ、光稀が言ってた。どうやら抱え込まれていたらしいな?」
ガタガタガタガタ。アリアが震えている。俺? 親父のほうが怖いし。

「は、はひい」

「ちよ〜つとO H A N A S H I しょうか? 希。願」

「非常にめんどくさいので却下だ」

タカがラリった眼でこちらを見るが、さして怖くないので放っておく。

「来いよ」

その言葉と同時に、背中に鋭い殺氣が突き刺さった。俺が振り返ると同時にタカの手にあったデルタエリートが火を吹き、銃弾がこちらに向かっていた。

「危なっ!」

新調したS A A (柚梨佳とお揃いだが何か?) で撃ち落とす。不^イ可^{ンヴァイジブル}視の銃撃? こんな初級さ。

「甘い」

「お前がな」

タカがM 4を取ったのでこちらは腰に差してあった虎徹でM 4を弾き飛ばす。そのままの勢いで流れるようにタカの首に虎鉄を当て

ると、タカはすぐにおとなしくなった。

「先輩、凄いです・・・!!」

「願、アンタもしかしてRランクじゃないの?！」

二者二様の驚き方である。

「じゃあ、タカをよろしく。明日な」

そう言い置いて、俺は今唯一求める楽園がある部屋に戻ったのであった。

「遅刻だっ!!!!!!!!」

その次の日、俺は人生で初めて遅刻をしそうになった!

「うおおおおおおお!!!!」

「遼、朝から見苦しいぞ」

全力疾走する俺の隣には遼がいる。遼はすでにバテそうである。

俺はといえば、涼しい顔で全力疾走中。あ、鞆の先から白い煙が・・・。

「ハア、ハア、ハア・・・」

「だ、大丈夫ですか遼先輩」

学校に着いた。そのまま何事もなかったかのように歩き出す俺の背後で、遼がひざに手を突いている。その隣にいるのは有明悠。謀報科の一年生。風蓮さんと同じクラスって言ってたかな?

「ま、まあな・・・」

遼にも先輩の意地があるのか、ダメだとは言わない。まあ、見た目で無理っぽいとわかるものだが。

「遼。SHR始まるぞ」

「ま・・・待ちやがれコノヤロ・・・」

疲労困憊している遼を見て失笑して、今日は始まったのだった。

——運命の時まで　あと　32時間——

第16話 休暇・遭遇・遅刻・そして始まり（後書き）

カウントダウン、スタートです。

第17話 開幕前の訓練 そして開幕

武偵総合競技大会

「アドシアードの警備部隊を選抜する！」

強襲科の建屋。その中で蘭豹がそう宣言した。

「まずSランクから発表する！萩原願！伊椎翠！鷹山勇治！成瀬レインハート！霧藤遼！有明悠！次にAランク！朝露静奈！桂柚梨佳！霧矢綾瀬！立花ミチル！——Dランク！風蓮希！以上十一名を警備部隊として選抜した！」

なあ。なんでチーム・ネメシスの関係者ばかり選ばれてるんだろ
うね。

「蘭豹。数多の質問があるがいいか」

「なんや萩原」

「まず、この作為バリバリの警備部隊の構成は何だ」

「法務省と防衛省からの命令や」

ならしかたない。

「次！なぜDランクが入っている！」

「鷹山の戦妹^{アミカ}やろうが！」

なるほど。

「次！何だこの警備じゃなく戦闘技術にだけ秀でているチーム編成
は！」

「だから情報科がいるやろ！」

「情報科も一人は戦闘要員だし残りも腕が立つぞ？！」

「腕が立つならええやろが！もう終わりや！」

強引に話を終わらせる蘭豹。・・・逃げたな。

蘭豹に「アンタが訓練しな」とメモを残されたので、今俺は電話
をしている。

（なんだあ？用がねえなら切るぞ）

「まだ何も用件話してないだろう！！」

相手は教務科の坂田銀八だ。この人、木刀を使ってるくせして群がってきた三年生強襲科Sランク10人をバツバツなぎ倒していたからな。模擬戦にはいい相手だ。

「俺と戦ってくれ。刀オンリーで」

（いいけどよ。じゃあ勝ったらパフェ奢れよあ？）

「ごめん、アレは無理だわ」

パフェだけで15万も使われてたまるか（番外編1、「坂田銀時現る」最後を参照のこと）。

（・・・わったよ。じゃあそっち行くからな！チビんじゃねえぞ！）

「誰が・・・っ！！」

「先輩、誰に電話してたんですか？」

電話を切ると、風蓮さんが訊いてきた。

「教務科の坂田だ。模擬戦の要請をな」

「・・・勝てるつもりですか」

「勝てなきゃRランク相当じゃないよ・・・って、あ」

見ると、その場の全員が固まっている。唯一冷静なのはレインだけだ。

「お、お前、まさかとは思うが、Sランクが天井だからSランクなだけ？！」

タカがせき切って聞いてくる。

「そうじゃなかったらお前が撃ってきた銃弾を弾くことはできないよ」

「アンタ・・・どこまで際限ないのよ」

翠。男に際限など皆無だ。

「願くん・・・だからわたしの早撃ちを真似できるんだね・・・」

いや、お前の早撃ちは誰にもできません。おじいさんを超したんだろお前。あのアダムスカ・・・リボルバー・オセロットを。

「願・・・お前は俺の友達だよな？」

「誰だお前。空気吸うことがすでにおこがましいから。空気汚れるから消えてくれ」

「冗談でもそこまで言う?!」

「いや、本気」

遼がしょんぼりして砂いじりを始めた。・・・楽しい。遼苛め。

「さて、俺は模擬戦やってるから、みんなはしっかり銃の整備と訓練しておくように」

「・・・はい」「」

「やっと来たな、銀！」

「へっ。ざまあねえぞ？足ががたがた震えてるじゃねえか」

「見間違いだろう。じゃあはじめろぞ」

その声と同時に、俺と銀はそれぞれ刀の切っ先を相手に向けて走り出した。一瞬の交錯。火花が散り、金属の粉末が舞う。

「・・・その刀・・・」

「装備科が総出で作ってくれた代物だ」

「・・・わが萩原の家宝、虎徹に斬れぬ物はないという。それでも戦うか？」

「へっ。何言つてやがるんだあ？中学二年生によくある妄想ですか？想像が先走っちゃうお年頃かあ？」

——その言葉、後悔させてやろう。わが刀の下に。振り返ると同時に、銃剣と同じ要領で銀の首めがけて切っ先を突き出す。銀がそれを弾くためにかけた力を利用して、その場で円を描く。一周したところで横様に刀を振るい、銀に無理に刀を上げさせる。火花が景気よく次々と散り、金属同士がぶつかる音が辺りに連続して響く。
「チツ・・・」

「まだまだ!!」

刀を引き、逆手に持ち替えるとさらに首めがけて太刀を浴びせる。柄で何とか制止する銀。刀を右手から落とし、左手でつかみなおす。

がら空きのわき腹に刀を振るい、それは見事に決まった。意表を衝かれた風の銀の背後に回り、首に刀を当てる。

「・・・試合終了だ」

「くそっ・・・また負けたかつ・・・!!」

「くっく・・・くっく」

みなが啞然として眺めている。オラオラ、さっさと練習しろ！

「朝露。バトルファン 戦扇は三次元的に活用しろ。扇の薄さは0・1ミリ程度。ちよつとばかり太いワイヤーのようなものだ。勢いよく振れば銃弾すら切れるだろう」

「私は化け物じゃない！そんなことできるわけないだろう！」

——銃を持っていない朝露には効率的な攻防一体の技を教え。

「霧矢先輩。シグマはあくまでUMPのバックアップで使ってください。通常兵装からの装備換えは相当のプロでも難しいですから」

「じゃあ、それを軽々とやってのけるあなたは何なんだろう」

——新しい火力を得て少し振り回され気味の霧矢先輩には慣れてもらえるようにUMPだけを使ってもらう。

「グロツク18か。諜報科Sランクの有明にピッタリの銃だが、ストックはつけていないのか？」

「ええ。取り回しづらいですから」

「付けたほうが威圧感も出るし射撃時に安定する。今から調達できるならしておけ」

と、こんな感じで個人個人に対して訓練が続いていた。レインはどうやら翠&柚梨佳コンビと模擬戦をやっているようだ。いや、さすがのレインも圧されるだろ・・・あ、負けた。

「HK91は反則だ。しかしSAAのあの速さはもっと反則だ」

「そりゃ、お前の師匠カナより速いからな」

「マジかつ」

まあ俺は負ける気がしないけどな、と呟いたらみんな震え上がっていた。・・・なぜに？

こうして、アドシールド前日は過ぎていき、ついにアドシールドが開幕した。

——運命の時まで　あと　8時間——

第17話 開幕前の訓練 そして開幕（後書き）

ついにアドシードです。二巻も佳境に差し掛かってきました！

第18話 侵入者を撃破せよ。総員突入。（前書き）

久しぶりの投稿です。レインファンの皆さんすみません。レインは次くらいに出てきます。

第18話 侵入者を撃破せよ。総員突入。

「・・・？」

現在俺は柚梨佳と警備を行っている。D部隊というコードネームを拝領した我々の格好。それ自体は普通の武偵高生徒なのだが、武装は歴然として違うから大丈夫だ。さて、今の懸案事項は振動して自らの存在を示す携帯電話だ。しかも、それはプライベートではなく仕事用の量子暗号化システム搭載型携帯電話・・・。

「なんだ」

大体この電話にかけてくる奴は格下なのでぞんざいに対応する。しかし、その電話から聞こえてきたのはそんな不真面目な態度をどこかに押しやってしまうような緊迫した事務的な声だった。

『Fユニットに招集がかかりました。副司令が司令を呼び出せ、と』
「おい横田！横田二等陸佐！！なにがあつた！」

副司令の名前を怒鳴る。通信の相手が変わったようだ。

『横田です。G・Gが出現しました。現在——ッ？！八丈島上空！』

「八丈島・・・？！あと数分しかないぞ！」

G・Gはその広範囲かつ高速な展開速度を誇る装備だ。あちこち翻弄されるのは目に見えている。

「・・・可能な限り召集する。場所は」

『海上保安庁のLCCACが学園島に待機しているはずです。そこに特殊作戦群が』

「特殊作戦群・・・？！」

こいつはもはや秘密作戦なんていうレベルじゃない。れっきとした戦争だ。

「・・・すぐに向かう！」

「???何があつたの願くん」

柚梨佳がこちらを見上げてくる。

「・・・野暮用だ。すぐに戻れるかわからないから、A部隊と合流していてくれ」

「うん、わかったけど・・・」

何か聞きたげな柚梨佳を置いて、俺は走り出した。

学園島、東京湾に接する埠頭に海上保安庁所属のLCCが上陸していた。機動隊や武偵特殊部隊によって封鎖されていたその区域では、漆黒のタクティカルスーツに身を包んだ屈強な男たちがテキパキと立ち働いていた。

「明石三佐！！状況は！」

肩章に一つ星が付き、二重線が入っている。その男は肩にかけていた89式小銃を目に留まらない速さで構えて振り向いた。そして苦笑する。

「・・・司令ですか。驚かさんでください」

「すまん。んで、状況は」

最悪です、と一言おいてから彼は話し始めた。

「G・Gの数が多すぎます。これじゃよくて相打ちですぜ」

「・・・総数は」

「ざつと20機といったところで」

ここに集結する部隊はざつと20名。一人当たり10機の計算である。

「確かに多すぎるな。弱点は」

「頭を狙って対物ライフルを何回か叩き込めば倒せますが、体は・・・」

「・・・そうか」

対物ライフルですら貫通を許さない堅固な装甲に、M61ガトリング砲からなる対戦車・核シエルター用の装備。さすがパワープレイが御得意のアメリカだ。そんなゲテモノを200機も盗まれるなんてな。

「仕方ない。全員、よく聞け」

無線で全員に呼びかける。

「我々は今回、われらが親愛なる同盟国の不祥事を片付けなければならなくなった。冷戦中に開発された、人類史上最強にして最もふざけた兵器をおよそ200機を極秘に片付けなければならない。各員は装備の最終点検。砲撃部隊は初っ端から迫撃砲を使うかも知れん。十分準備しろ」

『了解！！』

「私は亡霊である萩原樹だ。私の甥が世話になっているな。今日は私が読者諸君に『Fユニット』について説明しよう。『Fユニット』とは、国際テロが急増した世界情勢の中で自衛隊が創設した『次世代特殊コマンド・FOX実験小隊』が素体となっている。願、横田二等陸佐や明石三等陸佐はこの頃からの古参隊員だ。そして第二次朝鮮戦争が勃発したとき、我々はどさくさに紛れて在日米軍日系部隊を吸収した。その結果できあがったのが『FOX』、つまりは『FOX HOUND』に対抗し得る特殊部隊だ。その後、朝鮮戦争で『FOX HOUND』や自衛隊特殊作戦群が壊滅状態に瀕したときに救助作戦を防衛省の命令なしに実行し、海上自衛隊や韓国軍、第七艦隊などの協力を得て成功したのだ。このときの司令官が私なのだよ。えっへん」

「叔父さん、あなたがいきなり出てきたせいで読者の皆さん混乱していますよ」

「棕香の登場よりはましだと思うが」

「うるさいですよ叔父さん！村正でペーストにしますよ？！」

「ヒイヒイヒイ！！！！」

ん、なんか叔父さんが化けて出てきたような。

「司令？」

「ああ、心配ない。ちょっと翠を頭の中で陵辱していただけだ」

「最低ですよねアンタ？！」

「心配ない。俺は絶倫魔王だ」

嘘付け、だったらなんで・・・と呟く若い隊員（俺よりは年上だよ）。血の涙を流しているのは気のせいだ。

『突入まで30です』

「了解」

そう無線に返したとき、携帯が振動した。サブ画面には『柚梨佳』と出ている。

「どうした？」

『願くん！どうしよお、みんなが、みんなが！』

「落ち着け。何があつたか言え」

声を聞いただけで緊急事態だとはわかった。

『地下倉庫ジャンクシヨンに引ったくり犯が逃げて、そのまま追いかけてっちゃつて、そのまま帰ってこないの！』

「よしわかつた直ちにそこから引き返せさもなくば・・・」

『さもなくば？』

柚梨佳の声が恐怖に震えている。

「・・・フッフ」

ブチッ。切れた。

「・・・突入しますよ？」

「中に武偵がいるかも知れん。気をつけろ」

「了解。・・・GO!!」

若い隊員が錠前を弾いたとき、すでに扉の前に我々の姿はなかった。我々は一陣の風となり、倉庫に侵入したのだった。

第18話 侵入者を撃破せよ。総員突入。(後書き)

願

「グダグタだぁ・・・」

翠

「気分転換に臨死体験してこようか・・・」

遼

「俺のファンのみんな！俺は次に出るよ！」

悠・柚梨佳

「「いないと思う」(よ)」「」

遼

「(´・ω・｀)」

第19話 血と雷。そして更なる敵

『綾先輩！犯人は地下倉庫に侵入しました！！』
ジャンクシヨ

「オツケー！！」

私、霧矢綾瀬は今ひったくり犯を追跡している。

『霧矢さん！！そいつは危ないって言ってるでしょう！俺に任せて

———」

「鷹山君は私たちが張ってたところも監視してて！！」

制服仕立て屋の角を火花を立てて曲がる。犯人は・・・いた！

「甘いな。霧矢の娘」

エスタブ

レッグホルスター

S & W シグマを腿のホルスターから引き抜いた私にかけられた言葉。振り返りつつ情報科で鍛えた動体視力をいかに発揮してその人の顔を——。

「そんな雌豚、『大和』には要らぬ」

見る間もなく、私の意識は刈り取られていた。最後に感じた感触は——

臍の上辺りに刺さっていた日本刀が引き抜かれたものだった。

「撃ち方はじめ！！」

防弾性のコンテナの陰から、89式小銃でG・Gを狙撃する。G・

Gは振り返ってM61バルカン砲を連射。

「くっそ・・・このままじゃ・・・」

「ジリ貧ですよ・・・どうします」

そう問いかけてきたのは、FOXからの古参隊員である土方一等陸尉である。

「仕方ない。俺が出るしかないな」

「・・・よし。皆。トラウマにしたくなかったら即座に逃げな」

隊員たちが砂（なんであるんだよ）を蹴立てて逃げていく。

「・・・Mode The god of thunder. Are you ready?」

——雷神化——。

周囲一体を焼き尽くした黒のプラズマは、一瞬だけ竜巻を形成したあと崩れ去った。その中心に立っていた俺には変化がおきていた。瞳の色が蒼黒かったのに、いきなり漆黒になった。藍色だった髪が完全に闇色になった。そして・・・俺を覆うオーラが黒くスパークする電気を帯びていた。

「・・・さあ、お前の罪を数えろ」

某ライダーの台詞と共にG・Gスクラップに向けて歩いていく。M61が唸

るが、その銃弾は当たらない。うろたえたように少し後退したG・

Gは発煙弾発射機がジャキジャキと音を立てて起動させ、周囲に煙幕を張る。しかしこっちは電気・・・否雷もどきを操る超偵。電子兵器の

原理を知っていれば、それを再現することは造作ない。

「リーダー起動・・・少し範囲が広いな、狭くするか」

目標のうち、接近中の物は3つ。マイクロ波で精密機器を壊せると聞いたことがあるので実践してみよう。

「——」

よし、あっという間に制圧完了。残りが・・・4つか。学習機能があるのか、こちらに近づいて来ない。M61や擲弾砲グレネードと同期させた監視・発見・追跡・破壊評価、通称SATAKシステムを起動させてこちらに照準を合わせてきている。

SATKAはSDI計画の一番重要なもので、いかなる気象条件下であっても時速9キロで飛ぶ蚊の目玉を1キロ遠方から撃ち抜く最高の精度を誇るシステムである——実用化されていればだが。しかし、現に今ここで確認されているので対処しなければならない。「SDIにはSDIで。レールガン、発射スタンバイ」

XD-9を抜いて、磁力を銃口の両側に集中させる。極短のレールだが、その加速度はおそらく半端ではないだろう。

「・・・目標確認。発射!!」

普通に引き金を引くと、まばゆい光が銃口から・・・正確にはそこから放たれた銃弾から・・・放出された。あまりの加速度の大きさに表面がプラズマ化しているのかもしれない。しかしそれも一瞬。その光は煙幕を切り裂いてG・Gの胸部装甲のど真ん中に風穴をぶち開けた。背部のバッテリーを易々と貫通したそれは、その後ろのG・Gにも直撃。2機を一気に葬り去った。

「・・・雷槍」

手のひらにプラズマを集める。それを長さが2メートル少しになるように収斂して、残りのG・Gの方へ振り回す。仰け反って崩れ落ちるように倒れたG・G。世界最強、小国どころか第七艦隊でも1機で片付けられそうな兵器をわずか一時間弱で片付けてしまう・・・雷神化、すごいものだな。

『Fユニット』に後片付けを頼み（明石三等陸佐は泣きモードに入っていた。大変だものね）、俺は柚梨佳と合流するために走っていた。雷神化は既に解けてしまったから、走るのは少し遅くなってるな・・・。100メートルを11秒台くらい。

「願!!」

「萩原！止まれ！」

「モゴア?!」

い、今起こったことはだな。走っている俺。レインと静奈が呼ぶ静奈が水で俺の体を包む。レインが電流を流す。俺、悶絶。

「死ぬわ！」

「そんなこと言ってる場合じゃない!!」

「萩原、お前、綾瀬先輩を見なかったか?!」

霧矢先輩・・・？

「見てないが。何かあったな？」

「ああ。連絡が取れてないんだ」

ほほう。よしよしかった。

「(pr r . . . pr r . . .) もしもし、親父か？今ちよつと困つてさ。人探したいんだけど資料なくて困つてるから国交省の交通監視システムと警察庁の首都圏内対テロ特別監視システムを覗ける手配をしてほしいんだが．．．」

「お。わかったわかった。そっちにパス送らせるから」
「はいはい。ありがと」

そういつて電話を切り、そこから辺から武偵手帳と自衛隊手帳（桜の御紋）を見せて借りたパソコンを開く。国交省のネットワークと警察庁の P・C T W S ネットに接続。画像が鮮明化する。

「……最後に連絡したのは？」

「ミチルだ。時間は9時13分」

「OK。9：13・・・ああ、地下倉庫に向かって走ってるな。そして・・・刺された。後ろからグサツとやられてる」

「?!」

「……確かに。この刀は……」

監視カメラに映っていたのは力が抜け切った霧矢先輩と、その体から抜かれて血の色に彩られている日本刀。空色の髪が風になびき、彼女の体が崩れ落ちた。その体を軽々と背負ったのは、やはり血のような色のマントを纏った者だった。

「・・・思い出されるのは、JTR・・・Jack The Ripperだな」

「1888年、ロンドンで何人もの女性を——殺した……?!」

「落ち着きやがれば力。あんなナマクラなナイフで人殺しやってた奴とは格が違いすぎる。こいつの方が危険度はかなり高いぞ」

そう。彼が襲撃したのは『霧矢家』なのだ。『霧矢家』は、『大和』を構成する大事な家系のひとつであり最重要幹部でもある。そんな家系の令嬢を襲撃したのだ。萩原・霧藤・伊椎・桂・夜雲・霧矢・朝露・有明からなる『大和八血』の掟に則って、残りの家系が力を結集してそいつを滅ぼすのは確実。

「……朝露はわかるな？その理由が」

「……血の掟か」

「そうだ。とにかく、『大和』を召集する。総本家に連絡しておけ」「あ、ああ……」

レインが首をかしげている。俺はレインに向き直った。

「霧矢先輩は俺たちが必ず見つけよう。お前は休め。顔色が……（駄）作者に表現できないほどにひどい」

「そんなにひどいのか？」

「お茶の間には放送できないな」

体よくレインを追っ払った。携帯電話がまた鳴った。

「……願。霧矢家の令嬢に何があった」

「報告があったか」

『朝露家から申し入れがあった。総会をやる場所なんてないぞ』

「作れ。もしくは借りろ」

『……わかったわかった』

プチ、と切れる。親父も大変だな。

「う……っ?!」

目が覚めた。その直後、体を貫く痛みにくぐもった悲鳴を上げてしまう私。

「霧矢の。目が覚めたか」

「……あなたは誰……?」

霞む視界。何とかその問いを閉じようとする口から押し出した。

「・・・何といえはよいか・・・あえて言うなら、私は・・・」
ひゅん、と耳元で風を切る音がする。

「『大和の国』・・・この日の本を変えようとするものだ。しかし、何もクーデターというわけではない」

「ばか・・・げた・・・」

『大和』がいなかったら、この国は戦争で滅ぼされていたに違いない。それまでも反戦を唱えてきた『大和』がいなかったら。それを、変える？この国、平和国家の礎になった組織を？その礎ゆえに戦前体制の皇室最後の仕事として『大和』と命名されたその組織を？
「私は、破壊者ではない。再生を行う者でもない——創り直す者だ」

「創り直す・・・？」

「そうだ。明治維新のときに成し得なかった事を成し遂げる。それが私の目的だ」

その言葉を聞いた瞬間、いきなりグラッと視界が揺れた。マズイ、毒か。あつという間に意識が朦朧としていく。

「・・・れ・・・いん・・・くん・・・はぎ・・・わらく・・・ん・・・こいつ・・・を・・・と・・・め、て」

自分でも、何を言ったかわからない。わからないまま言葉を押し出して、私は意識を手放した。

第19話 血と雷。そして更なる敵（後書き）

願

「・・・疲れた」

翠

「やすみたいよぉ・・・」

柚梨佳

「あ、あはは・・・はぁ・・・」

遼

「・・・疲れてないのが悲しい」

次回！！日本が大変なことに？！

第20話 謀者・遼（前書き）

遼が今回登場！！実は初めての殺陣？！

第20話 謀者・遼

パソコンの画面に映し出されているのは、臨海副都心地区の対テロ監視ネットワークである。黒が基調のコマンド画面と、監視カメラがリアルタイムで捉えている映像。監視カメラの総数は5000超。

「霧矢先輩がカメラで鮮明に確認できたのは9：18が最後だ。以降、犯人はセダンタイプの車両に乗って逃走。首都高速道路の監視カメラで当該車両が確認されている。だが最後に確認された9：49以降、その車両も犯人も霧矢先輩も確認されていない」ということは？」

携帯電話越しに問いかけてくる静奈。

「犯人はどこに逃げてもおかしくない」

そうなるわけだ。目下、打つ手はない。

「・・・なあ。遼に動いてもらえないのか」

「遼・・・か。確かに霧藤家は薩摩謀者の総本山だから・・・」

「連絡してみてくれないか？」

「わかった。手配してみよう」

すぐに遼に電話をかけた。

「・・・遼か。頼みたいことがある」

「なんだ？」

「霧矢先輩が誰かに誘拐された。資料は今から送る」

「・・・ああ。救出すればいいんだな？」

「That's right」

その頃。萩原家屋敷にて、『大和』の緊急総会が行われていた。

「霧矢の跡継ぎが誘拐されたのか」

「手をこまねいているわけにはいきませんな。謀者に調べさせてい

ます」

そう大したこと無いようにいう霧藤家当主。全国10000人の薩摩謀者が調査を行えばすぐにでも洗い出せるだろう。いうなればパワーゲームだ。

「その後当家の手によって逮捕させ、拘置所にて暗殺を行う。これでするいいですね？」

萩原家臨時のものとしては掠香が参加している。

「・・・まあ、それがベストでしょう」

「我々の介入が嗅ぎ付けられなければいいのですが。特に最近^ラはCIAが介入してきているようです」

「その辺りは当家にお任せください。CIAトップ陣を殺して恫喝しておきましょう」

こともなげに語る桂家当主。

「では、この集会のことはなかったことにしておいてください。解散としましょう」

時として国のトップをも操る『大和』。その集会が終わった瞬間だった。

「やれやれ・・・ここかい・・・」

俺は霧藤遼だ。諜報科Sランク・・・実際は願と同じVランクだが・・・の二年生だ。さてさて、今回の任務は

『霧矢先輩が誘拐されたので王子様を気取って救出しよう大作戦・・・の為の情報収集と偵察』

・・・だ。一応達成したので取り敢えず願に連絡を入れよう。それにしても、最新型の軍事ロボット20機はさすがに手に余る。願でも倒せるかなあれは。その『あれ』とは米軍のSAR（Standard Armed Robot）-00。アメリカ合衆国軍

特殊部隊司令部制式の『L O O』の強化・軽量型だ。

「にしても・・・たかが乙女一人を拉致するために何億吐き出してるんだよ・・・」

たとえばそれが『霧矢家』の女だとしても、彼は普通の女に接するのと同じ態度で接するのだろう。所謂『変態という名の紳士』である。

『p r r r r r r r!!』

「お、風蓮さんから」

数瞬で電話に出る。

「もしもし？どうしたの風蓮さん」

『鷹山先輩から伝言です』

「タカか・・・なんだって？」

『自衛隊員が米軍の作戦に干渉することは違法。しかしこれは非正規作戦のため、内閣情報調査室特命情報調査官であるお前が乱入して作戦を混乱させる。救出任務を受け持った武偵として俺と願、翠が行くからそれまで頑張れ。だそうで』

「・・・追伸は？」

微妙に棒読み口調なので、メモに書いてあることだと判断。

『あ、はい、P S。希をよろしくな。・・・えええええ?!』

「風蓮さん。白雪さんの監視は外れていいからこっちにきて」

『は、はい』

いきなりのことにテンパっている風蓮さん。取り敢えずこちらに来るように言っておいたから大丈夫だろう。

遼がポイントを発見してくれたようだ。しかし周囲には米軍最新兵器が20も配置されている。仕方ないな、プラズマでドッカーン、あれやつちまうか。

「願。遼は大丈夫なの？」

「あいつの能力は悪友の俺が保証する。あいつこそVランクにふさ

わしい武偵の一人だ」

それは事実。あいつは身体能力から頭の回転まですべての面で半端ない。まあ、俺にはかなわんがな。

「けどよ。もしあいつがやられたらどうするんだ、俺らには対処できないぞ」

「案ずるなタカ。策はある」

それに、あいつがやられたら日本はどっちみち壊滅の憂き目に遭う。俺一人じゃ対処できないこともないが、俺も下手すれば死んでしまう。

「萩原先輩。霧藤先輩ってそんなに強いんですか？」

「そつか」。希ちゃんには知らなかったつけね。あのモードのこと

翠がそう言って笑うと、タカも引き笑いし始めた。

「あれは・・・なあ？」

「そうそう、アイツってあんなバカやってても顔いいからさあ・・・ねえ？」

「俺に振るんじゃない・・・」

そのときのことはいずれ話するときがくるだろう。苦情は作者まで頼むぞ！！（なんでよ！！byラルド）

「??」

風蓮さん・・・天然だなあ・・・。

「・・・遅いな。奴らは」

暗闇の中。刀を振るう男はそう呟いた。彼の足元には哀れ痙攣する空色の髪の少女。自殺防止用の猿轡をかませられ、手錠で両手足を拘束されている。

「・・・この国は変わる・・・曾祖父のときと同じく、強大になる・・・」

一人呟く男。刀の切っ先を足元に転がる少女に突き刺す。彼女は既に――。

「邪魔はいない・・・これがくたばれば・・・」
霧矢

二回、三回と場所を変えて突き刺していく。彼女の体はその度に
少しだけ引きずられる。

「『チーム・ビクトリー』・・・時間は限りあるのだ・・・急げよ」

——運命の時まで　あと　5：00——

第20話 謀者・遼（後書き）

次回はついに救出作戦開始！！

綾瀬さんは果たして生きてレインたちと再会できるのか？！
願は果たしてどんな無双を繰り広げるのか？！

そしてあのぞのカウントダウンの正体とは？！

どうぞ期待！！

第21話 守る為の力。そして・・・またかよ・・・

通常、立てこもり犯がいる建物に突入する際には人質の確保が最優先事項である。

「でもまあ、霧矢先輩も武偵だ。後回しにされることくらい分かってるだろうよ」

「自業自得という面もあるわけだし。仕方ないわね」

強襲科の廊下を歩きつつそう話す翠。

「・・・特殊作戦群のUH-60が屋上に到着した。目立ちたくない。急ごう」

俺たちを急かすタ力。

「遼は既に行動している。俺たちも行くとしようか」

「「R o g ^{了解}!」」

目が覚めると、暗闇の中だった。今が昼なのか夜なのか、それすらわからない。

「先ほど、何者かによってここが特定されたそうだ。お前の仲間かも知れんな」

耳にそんな言葉が飛び込んできた直後、体のあらゆるところが鋭い痛みを訴えた。にもかかわらず、体は凍えるような寒さを感じている。

「しかし無駄だ。この建物に入ることはできない。たとえ何者であっても」

「そうかい？俺はそうとは思わないな」

やっと輪郭が見え始めた男。その男が身じろぎをして、声がしたほうへ体を向ける。

「ロボットの布陣が雑だ。だから侵入できたから文句は言えないけ

ど」

そう軽い口調で話す侵入者。聞き覚えのある声。その声が、笑っている。この状況で。

「・・・薩摩諜者か!!」

刀を抜く男。完全にこちらへの注意を忘れている。

「ん、半分正解。俺は薩摩諜者だけど・・・」

その声の主が、動いた。

「内調の特法官でもあるんだ」

男の刀がいきなり火花を散らした。男が後ろを振り返ると、声の主がまた笑った。

「・・・じゃあ、名前を名乗ろうか。俺の名前は・・・霧藤遼だ」

声の主——遼君は、そういうとナイフを引き抜いて男に飛び掛った。

剣戟の音が、二回、三回と倉庫の中に反響する。火花が幾回も散り、刀とナイフが鏝迫り合いをする回数も増えてきた。

「・・・つと」

日本刀をひらりとかわし、炭化タングステンⅡコバルト製の平賀さん特製タクティカルナイフに窒化チタンを焼結させた代物を振るう。残像が残る速度で振るったそれは男のわき腹を引き裂き、肩甲骨に激突した。

「・・・埒があかないな・・・仕方ない」

あのモード。霧藤家が霧藤家たる所以。

「Mist Savant Syndrome」

戦闘時に発生するアドレナリンを一定以上蓄積させると発現する、まさに『戦いの為のサヴァン症候群』。

「・・・はじめるぞお」

腕が霞む。ナイフの先が円錐水蒸気^{ヴェイパー・コーン}を発生させるまでに速く振るう。

AK102を背中から前身ごろに素早く回して乱射。銃身下のラッチにナイフを装着して、槍のように使う。

脚が掻き消え、男の刀を蹴り飛ばす。刀は天井に突き刺さる。その刀身に曲線状に火花が散り、その火花に沿って柄が刀から切り離される。

「?!」

男がその柄を九十四式自動拳銃（古つwww）に特徴的な先細りのグリップではじくが、その熟練した兵士から見ても機敏な動作でも俺には緩慢に見える。九十四式のスライドにナイフを当てて滑らせると、脆くなっていたスライドは呆気なくばらになった。

「・・・婦女暴行罪、傷害罪、銃刀法違反、誘拐罪および――」

そこで言葉を止め、自分が腰に提げていたグロック19を引き抜く。あゝあ、スッパリ切られちゃって。買って間もないって言うのにもうお釈迦かよ。

「器物損壊の罪で逮捕する」

グロックを捨てて防弾制服の懷からUSP45を引き抜き、男に向ける。

「・・・さすがだ、やはり霧藤家の跡取りなだけはある」

「それ、褒めてんのかい」

男が苦笑する。

「霧矢家以外は戦闘を主とした術を身に着けているが、霧矢は違う」
「・・・？だからどうした」

「それが嫌だったのだよ。私の家は霧矢と争い、負けた」

『大和』を構成する八つの血筋。一回、太平洋戦争において一つの家が断絶してしまった。そのため、新たな血を入れる為の試験を行ったのだ。それに立候補したのは『霧矢家』と――。

「『坂本家』だよ。私は坂本龍弥――坂本竜馬の曾孫だ」

「なん・・・だと・・・?!」

歴史上の偉人の子孫は意外と多い。キンジは遠山の金さん、白雪は卑弥呼、理子はアルセーヌ・リupan、アリアはシャーロック・ホームズ。俺は薩摩謀者元祖の血筋だし、翠は徳川幕府のCIAとも呼ばれた家系だ。そして願は、名高い萩原家・・・武田家の懐刀。しかし、これほどまでに有名な・・・。

「逆恨みか？」

「・・・『大和』には強者以外入るべきではない。霧矢は違う。そう証明したまでだ」

そう嘯いた男・・・もとい坂本。

「・・・そうか。まあいい。これは聞かなかったことにしておく。とにかく連行させてもらおう」

「抵抗はしない」

両手を挙げた坂本。ワイヤーで遠くから縛り上げる。

「・・・願か。俺だ。今片付けた」

『よし、よくやった』

「どうする」

そう問うと、願は少し黙り込んだ。

『・・・取り敢えず教務科に連行。霧矢先輩はこちらで救助する』
「了解」

願との電話を切り、俺はまたロボットに見つからないように倉庫から出たのだった。

「さて。我々は空から一気に急襲して先輩を救助、二年生三人がロボットを適当にスクラップにしている間に風蓮さんが先輩を連れて逃げる。こんな作戦で行くが異論は無いな？」

「よし。やろう」

シングルローターヘリコプターでも、ローターが鳴らす音は結構うるさい。耳元で怒鳴ってようやく普通のしゃべり声になる。

「降下は三秒後だ・・・今!!!」

カーゴドアを開放して懸垂降下開始。ほぼ自由落下に等しい速度

で滑り降りながらロボットに向けて89式小銃を撃ち放つ。左隣では翠がG3ライフルで7.62ミリFMJ弾をばら撒き、正面では風蓮さんがデトニクスで弾幕を張っている。タカは俺の右でM4・オーバーチュールスタイルを使っている。

高度二十メートル。ザイルから支持金具を切り離し、自由落下。その途中で・・・S・HSS発動。放たれる銃弾を弾き返す。しかし、銃弾があまりにも多すぎる。分が悪いと判断した俺は、ついに禁断の——あまりにも強力な力のために親父に使用を禁じられていた——技を使った。

「——萩原家、家法・・・其の壱。萩原は・・・闇であるべし」
仲間を助ける為に、初めて自分で編み出した能力——。
色金を作り出した、初代萩原。その初代のみが操れた力——。

——其の名は、闇神化^{エレボス}——

「・・・」

それが発動した瞬間、頭が急に冷えた。レーダーを極低音の物質で冷やすと能力が上がるように、視界がクリアになっていく。銃弾が視える。そして、その銃弾をどう弾くか。どう撃てばいいか。それに従って撃つ。

「・・・」

XD-9をフルオートに切り替え、横薙ぎに一連射。

ギギギギギギン!!!

12.8ミリJTX弾があらぬ方向に弾かれる。その銃弾は風蓮さんが放った45ACP弾に当たり、微妙に軌道を変えながら別のJTX弾と激突。その軌道を変えつつも最初のJTX弾はロボットの頭部整備用に設けられていたICメモリーパネルに直撃。それごとスパークしてロボットの中枢をショートさせた。

「行け、風蓮さん」

89式小銃で道を切り拓きながら呼びかける。ロボットが仰け反って倒れ、道が出来上がっていく。風蓮さんが着地し、弾幕を張りながら倉庫に飛び込んでいく。

「翠。GL-1を」

「OK」

背中からグレネードランチャーを出して、こちらに渡してくる翠。「サンキュ」

40ミリ×46ハイ・ロー・プレッシャー・グレネードを装填して発射。ロボットが派手に吹き飛ぶ。次の弾を装填して撃つ。発射した後にランチャーを捨て、1機残っていたロボットに向かって走り出した。腰の刀に手をやりながら、ロボットの足元に飛び込む。体を反転させ仰向けになり、居合い切りの要領で一氣に刀を引き、手を離す。

「・・・舞閃^{ぶせん}・・・ぶつつけ本番だったが、意外とできるものだな」

俺の頭上にいるロボットには、上体が無かった。切り口がスパークしている。刀を投げて、その速度と回転力で軌道上の物体を切断する荒業。

「・・・風蓮さん。こっちは片付いた。そっちは」

『出血量が多すぎます！！輸血が必要です！！』

「・・・翠。^{ロメオ}Rを要請しろ」

「了解」

R・・・ロメオとは、海上自衛隊が常時待機させている海難救助^{シーレス}航空機の略称である。ここから一番近いのは横須賀自衛艦隊司令部。

「・・・あと五分で到着」

「風蓮さん。応急キットを用意しておけ。俺がやる」

『は、はひっ！！』

その後。霧矢先輩はすぐに武偵病院に搬送された。手早く応急をしたおかげで傷が残ることはないそうだ。というより、もう上体を

起こして笑っていられるくらいだ。

「いや、ごめんね心配かけて」

「本当ですよ。俺が何回死にそうになったか」

「余裕で銃弾を撃ち落したり銃弾でビリヤードしてたのは誰よ」

俺だ。それは譲らない。

「遼くんにも感謝しないとね」

「いや、いいですよ。助ける手助けはしてないですから」

顔を少し赤くして手を振る遼。

「ま、お前がいたおかげで助かったよ。犯人があそこにいたら風蓮さんは死んでいた」

倉庫の中の惨状。鉄骨に亀裂が入っていたりすることから、相当な技術を持っていたに違いない。遼はあんなことはしない。コイツは戦いに芸術を持ち込む器用な奴だから。

「んで、犯人・・・坂本は何を話してるって？」

「先輩のストーカーだった、っていうことになってるらしい。ま、大和の引きもあるしすぐに出てこられるだろ」

大和はあの後、坂本家の加入を認めた。霧矢家跡取りを倒したその心意気を認められたらしい。

「綾瀬さん！！」

「霧矢先輩！！」

『綾先輩！！』

おお、部外者四人組だ。前からレイン、静奈、ミチルと柚梨佳あれ？悠は？

「や、みんな」

手を振る霧矢先輩。みんなが目に見えて安堵する。

「あ、そくだ！綾先輩、大好きなオレンジですよ！」

「わあっ！！食べる食べる！！」

「医者から柑橘類はだめって言われたでしょうが」

「・・・意地悪。少しならいいって言われたもん」

むくれた霧矢先輩。さすがに言い過ぎたかな・・・。

「・・・ごめんなさい・・・」

「・・・なんでも一つ言うこと聞いて」

ピクツ、と翠と柚梨佳が反応した。え？なんで風蓮さんも反応してるんだろ。てか、いつの間にいたんだ？タカもいつの間にかいるし。こつち睨んでくるし。遼は血の涙流してるし。悠もいつの間にかいるし！！

「なんですか？」

「・・・で、・・・かな」

「え？」

聞こえなかった・・・。

「名前で呼んでっっていつてるの」

・・・はい？

「・・・綾瀬さん」

「敬称はいい」

「綾瀬。わがままはよくない」

この機会に敬語も廃してしまおう。

「~~~~~／／／」

「おい、綾瀬？スルーはきついですよ？」

「~~~~~／／／」

その後、きり・・・綾瀬は数時間フリーズしていたそうなの。・・・
なんでだろ。

チアの後に行われる、武偵カラオケ。その練習のために今俺は強襲科に来ている。

「~~~~~」

棕香が作った歌。俺と遼、翠と柚梨佳がメインで歌う。俺と遼は踊りもやるそう。レインたちに出演を打診したのだが・・・。

『いや、俺は見てるよ』

第21話 守る為の力。そして・・・またかよ・・・。（後書き）

ついに白雪VSジャンヌです！！実際は願VSジャンヌ（笑）になるんだろっけど。

願に比べればブラドも弱そう・・・。シャーロックも微妙・・・。
G?・G?で何とか一時間戦えるくらいか。玉藻にはあっさり負けちゃうだろっけど。

第22話 その閃光は誰が？

武偵国際総合競技会

ケースD。アドシアド期間中の武偵高敷地内で展開されている事案において重大な状況の変化があった場合の符丁だ。その中でもD7は『ただし事件であるかは不明確で、連絡は一部の者にのみ行く。なお保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎ立ててはならない。武偵高もアドシアドを予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』——という状況を示す。ということは、増援は望めないということだ。

「まあ、俺らに來たつていうことは——」

「——もう解決したも同然だがな——！」

そう。今学園島を疾駆してるのは世界で二人しかないVランクの武偵だ。世界最強が二人。さらにSランク相当が二人と遠山侍が一人。翠たちに連絡が行つているとすれば、Sランクが最低でも二人來ることになる。しかもその二人も実力はR^{ロイヤル}ランク。

「後悔させてやる——」

「——ビクトリー・デュオの敵になつたことを——！」

こんにちは。画面の向こう側の皆さん。桂柚梨佳、情報科二年のSランクです。

「柚梨佳ちゃん。D7よ」

「——白雪ちゃんか・・・」

確かアリアちゃんと遠山君、成瀬君が護衛していたような。まあいいや。

「ほら。行くよ」

「あゝ待つて〜」

わたしの手を引くのは伊椎翠ちゃん。背が高くてスタイルがいいの。

「・・・胸はあなたに負けるけどね」

「・・・！！（ガクブル）」

今の殺気は願くんより怖かったよお。

「9番地下倉庫ジャンクションか・・・」

ピッキングで鍵が開けられた形跡がある。全防連認定錠C.P.P.の解除を行うにはコツがいるのだが・・・。

「仕方ない。遼。開ける」

「OK。お前が突入しろ」

遼が鍵に屈みこみ、針金で効率よく開けた。その瞬間ドアノブを回して中に侵入。カメラがないか、ワイヤートラップなどを確認していき、仕掛けられているものをあらかた排除していく。

「いくぞ」

「おう」

階段で地下二階まで降り、エレベーターを使わずにはしごで降りることを決定。はしごが既に下りている。ささくれ立った錆が実に痛そうだが、CFGClimb & Grooveに指甲、掌甲をかぶせた代物を着用した俺たちには関係がない。音を立てずに猫のようにしなやかに下りる。地下七階、火薬庫がある階で先行していた遼が止まった。

「・・・砂だ。おそろく、俺らより先行していた奴がいる」

「この階だな。行くぞ」

火薬庫で銃を使うわけには行かない。銃を仕舞い、虎徹を鞘から引き抜く。非常灯の赤い光が刀身にギリリと反射して、刀が緋色に染まったように見えた。

「・・・GO」

スチール製のドアをゆっくりと開け、隠密行動をとる。そして・・・。

「——武偵庁特殊部隊だ！そこを動くな！」
遼が多重声を出す。

『・・・なるほど。白雪が雑兵を呼んだか』

ジャンヌが、その姿を現したようだ。声のする方向が、だんだんと近くなってきた。

『だが・・・私はG12だ。単なる武偵に負けるはずはない』
グレード

「策の一族ならわかつているはずだ。過剰な自身は失敗を生むと」
「勝てるっても？」

ジャンヌが冷笑する。しかし、俺とて色金を持つ男。

「ああ——G58と63だからな」

「?!」

ジャンヌが息を呑む。そりゃそうだ。G30オーバーだって世界で数えるほどしかないのに、60を超えているかもしれないものなど。

「——ブラフだな。覇気が感じられない」

「何なら見せてやってもいいが、死ぬぞ？仲間になる気はないのだから？」

「抜かせ！」

ジャンヌがいきなり飛び掛ってくる。虎徹を一閃し、デュランダルを受け流す。

「かかってきたんだろ？勝算はあるんだよね？」

「くっ・・・萩原か・・・!!」

虎徹は『極東のエクスカリバー』と呼ばれる伝説の剣だ。それが伝わっているのは萩原家以外にない。

「星伽さんを確保する！」

遼が走り出した。しかし。

「させるか・・・！」

ジャンヌが何かを投げた。

「『ラ・ピュセルの枷』——!!」

「知るかバカ野郎！」

遼が懷から出したスベツナズナイフ。空中を飛翔する『枷』を弾き落とす。しかしナイフの先端から凍っていき……。

「発射……！」

ばね仕掛けの刀身が放たれ、ジャンヌに向かって一直線に飛ぶ。ジャンヌはデュランダルを振ってそれを砕く。

「隙あり！」

虎徹を目の前に掲げて、一瞬目を閉じる。棕香の使う流儀。

「……妖刀」が壱、虎徹。我に力を与えよ」

目を開き、一気に距離を詰める。狙いは避けにくく致命傷になりやすい肝臓^{レバー}。刀を振るう。

「ギッ……！！！」

デュランダルで何とかかわすジャンヌ。だが甘いな。刀身に虎徹を押し当て、一気に体重をかける。

「?!」

デュランダルと鏑迫り合いをしていた虎徹が、すり抜けた。そのように彼女からは感じられただろう。実際は、まさに『目にも留まらないほど』速く刀を引き、デュランダルの刀身の下に刀を再び突き出したただけなのだ。そしてそれが可能なモードは……。

「……C・HSS。あと……五分だ」

闇色のオーラを纏った俺。色金のオーラを纏う俺の心の中には、純粹に練成された殺気が渦巻いていた。放出されてしまえば人を殺せそうな純度の殺気。

「ジャンヌ・ダルク。貴様を……っ?!」

いきなり煙幕が辺りを覆った。すぐに伏せてあたりを見渡す。……遼は心配要るまい。俺は獣のような姿勢のまま獰猛に走り出した。

「くっそ……！！！」

いま、俺鷹山勇治はジャンヌ^{魔剣}と交戦中である。いや、実際にはそ

の氷の人形と、だが。

「きりがねえ！！」

「先輩、この氷、固すぎです」

希も相当疲れている。警棒で氷を相手するのは難しいだろう。

「デトニクスを使い！」

「ですが、もしもつと増えたら・・・！！」

そんなことを言っていていられるか。そう怒鳴ろうとしたとき、重い銃撃音が響いた。そして、俺たちの周りの氷が一つ残らず砕け散っていく。

「やれやれ・・・タカ。そんなだから萩原にも勝てないんだぞ」

「・・・光稀？！」

氷をすべて壊したのは——俺の恋人だった！！

「まさか・・・氷の人形なんてね」

「ウザイ。人形遊びなんてしてる暇ないんだけど。柚梨佳ちゃん、一気に片付けよう」

そういいながら、翠ちゃんはG3ライフルを連射して氷の人形を吹き飛ばしていく。あ、それ私の獲物だよ。

「なん・・・だと・・・？！」

『こんなに強い女が・・・武偵が！』

「いや、願には勝ったことすらないんだけどね」

「うんうん」

SAAで殴ったり、G3ライフルで首をへし折ったり。翠ちゃんがスパコンに蹴り込んだり、スパコンの敵とばかりSAAで早撃ちしたり。時々乱射して大掃除。もうめんどくさいや。

「タカ。この先に奴がいる。いくぞ」

「さすが光稀。リーダーが似合うな」

「そこに痺れる憧れる！」

希・・・コイツは気難しい奴なんだぞ？

「・・・いまだ」

「乱れ撃つぜ！」

M4を乱射・・・する前に光稀がシュタイヤー・マンリツヒヤー GmbH社製スタンド・アローン・グレネード・ランチャーを発射。ジャンヌが間一髪で避けるが、その先には・・・。

「や、カップルのお二人」

「やつほ」

翠と柚梨佳のコンビ。ジャンヌがまた飛び退った先には。

「・・・よく先を見ような」

遼の姿。ジャンヌは泣きそうになりながら中央を見る。するとどこから出てきたか、願が立っていた。うわ、凜々しい・・・。

「・・・ジャンヌ。逮捕だ」

ジャンヌはもはや号泣状態である。後ろを振り返ると、レインやキンジ、アリアたちがいる。そして、ジャンヌの前からは。

「緋緋星伽神——！！」

白雪が走ってきた。日本刀を構えて。そして、デュランダルが呆気なく切断される。その瞬間、願がその残骸を蹴飛ばした。そのまま頭にデザートイーグルを突きつけ、首には闇色のナイフ。そして周りを囲んでいるみんなが一斉に持っている銃を構えた。

——その後、教務科に引き渡されたジャンヌが年甲斐もなく泣きじゃくっていたのは無理も無いことである。綴もすこし呆れていた。

さて。困ったことになった。カラオケが中止になってしまったのだ。

「・・・チアで混ぜよう。そっちの曲で同じダンスやれ。俺らもメインで参加する」

「私たちは」

「チアはやらないよ?!」

翠と柚梨佳は拒否する。・・・チツ。

「（願を含む）みんなが見たいってよ?」

「やるわ。全力で」

遼。ナイスアシスト。しかし、なぜ俺のほうをチラッと見ていったんだ?

「I'd like to...」

不知火と俺たちの歌声と、キンジがかき鳴らすギターのFマイナー和音で、アドシールド閉会式のチア兼カラオケが始まった。キンジ、やけくそだな。どうせヒステリアモードにでもなつて、またアリアに期待されちまったんだろつよ。こき使われるだろつな。ドンマイ。

「Who shoot the flash...」

・・・バンドくらい雇え、武偵高。別に俺は苦労しないからいいが。それにしてもキンジ、使いこなしてるなそのDC59。^{インヤン}

「Who flash the shot like the bang bang bang-a?」

アップテンポになったら、俺らの出番だ。少しアレンジしたダン

スをする。黒服を着た遼が踵でくると回る。あ、いま少し見えたが、翠と柚梨佳だけなぜかスーツだぞ。男物の。似合ってるけどな。」「Each time we're in front of enemies! We never hide in sneak away!」

いつも通りのクールな微笑をたたえながらも、少し嬉恥ずかしそうな翠は少し顔を赤くしている。その反面柚梨佳は眩しいくらいに満面の笑顔で元気に踊っている。こちらは少しいつもと違って、テンションが上がっている感じだな。遼は例の「ミスト・サヴァン・シンドローム」がまだ治まってないみたいだ。見たものを一目ぼれさせそうな笑みを浮かべつつ完璧に踊っている。その後ろでは風蓮さんと蓼がチアの格好で踊り、舞台中央をはさんで反対側では綾瀬とミチル、静奈が踊っている。

「Who flash the shot like the bang bang bang-a?」

さて、最後の動きまで秒読みだ――。

そこまでいったところで、何かが見えた。観客席の向こう側、ここからよく見える、レインボーブリッジの展望台……。その窓の向こうに、それは見えた。

米軍が採用している携帯型SAM――地对空ミサイル――!!!

「Who was the person I'd like to hug the body」

女子がボンボンを投げて、それを拳銃で撃ち落す。まだだ。まだ撃てない。女子が組体操みたいに集まって、俺たちが最高の狙撃ポイントに付かなければ――!!!

「It makes my life change at all dramatic!!」

銀の紙ふぶきが舞い上がり、一瞬だけ手元が観客席から見えなくなった。その瞬間に俺はサイレンサーインワイジ装備のM93Rを引き抜いて速射。^{フレ}デザートイーグルも同時に発射して、9ミリパラベラム弾の後部に激突させる。それは連鎖に連鎖を重ねて、最終的にはマッハ3——音速の三倍に達した。

——チエイサー加速弾——。

それは発射寸前だったスティンガーの弾頭を撃ち抜き、内部の爆薬に爆発を促した。

——その後、自動制御装置に乗せられたスティンガーミサイルが複数、出動した警察機動隊によって発見されたという。

第22話 その閃光は誰が？（後書き）

やっと・・・魔剣編が終わりました・・・。

長かった・・・。

次からはアンケート結果によって決まります！！

活動報告に記載されている設問を呼んで回答をください。

回答お待ちしております！！

コラボ2 漆黒の魔弾&緋弾に集いし仲間達（前書き）

新能力登場！！

朱雀先輩のほうが生身では実は強いんじゃないかという疑惑。

コラボ2 漆黒の魔弾&緋弾に集いし仲間達

「願。少し頼みたいことがある」

レインが改まってそんなことを言ってきた。

「・・・内容にもよるが」

「雛菊京助。知ってるか？」

知ってるも何も、強襲科で同学年なんだ。たぶん死ね死ね言い合ってる仲だろうぜ。

「その京助と、朱雀先輩が戦うらしい」

「ちよつと待て、朱雀ってまさか」

朱雀。思い当たるのは鳳凰院朱雀しかない。鳳凰院朱雀といえは3年間ずっとSランクを取り続けた武偵高最強の一人。そんな野郎に勝てるのは俺や遼、翠や柚梨佳くらいだろう。レインやタカでも難しいに違いない。

「たぶん、お前の考えている朱雀だ」

「——雛菊の戦闘能力は」

そう問うた俺だが、結果はわかっていた。鳳凰院に勝てるくらいの戦闘力を持っているならとつくに有名になっている。

「Sランクで、結構いろいろな武器を持っているな。超能力を使える」

「^{グレード}Gはいくつだ」

「あいつは確か13だ」

なら結構上位に入るな。俺は推定値58〜63だけど。

「能力の類は」

「・・・実際に戦ってみたほうが早いと思うぞ」
それもそうか。

「んで、お前の頼みって何だ」

「京助と模擬戦をやってやって欲しいんだ。練習相手がないそうなんだな。他言無用だぞ？」

ほほう。後悔するなよ？雛菊とやら。

五時間目。専門科目別の授業のときに、俺ははじめて雛菊と話した。

「朱雀先輩と戦ったって？」

「——？！どこから聞いた——！」

どこから聞いてもおかしくないだろう？俺なんだから。そういうと雛菊は黙り込んでしまった。

「朱雀先輩と戦って、勝てる気でいるのか？」

「正直、わからない」

フム。勢いで喧嘩売ってしまった感じかな？

「じゃあ俺が鍛えてやる。闘技場「ロッセオ」に來い」

「?!」

闘技場にて。

「はじめるぞ」

「・・・」

俺こと雛菊京助は、伝説の武偵である萩原願の前に立っていた。

萩原は「はじめ」という蘭豹の声と同時にバレルが剥き出しになっている拳銃を引き抜く。俺は目の前に巨大な氷塊を形成して次々と撃ち込むが——

「狙いは満点だ。だが硬さと速度、回転力は零点だな」

飄々としてそこに立っていた。萩原は9ミリパラベラム弾を撃ち込んできくる。鍊金術を使ってなんとか銃弾を防ぐが、最強の盾であるはずのアメンホテプの昊盾そらたてが銃弾を一発食らうたびに砕け散っていく。しかも、萩原は微笑しながらこちらに近づいてくる——！！

「来るな・・・」

情けない声が口からこぼれる。

「来るな！」

氷塊をまた撃ちこみ、砂金で作り出した銃弾やナイフ、いろいろなものを飛ばす。

「来るなアアア！……！」

だが、萩原は――

「そんなものなのか、雛菊。そんなものでは鳳凰院にも勝てないぞ」

鳳凰院。そう呼び捨てにした萩原。微笑をたたえながら、ゆっくりと近づいてくる。

「うあああああ……！」

恐怖。絶望。負の意思が俺の意識を席卷する。半狂乱になりながら氷塊を撃ち込む。萩原の頭の上に氷塊を形成して落下させる。萩原の周りに槍を練成して突き刺そうとする。しかし、全てがあるいは撃ち落され、あるいは切り裂かれ、あるいは粉々にされた。

「――闇は恐ろしく、強大なものだ。その力を扱うことは並大抵ではない」

黒い氷塊が萩原によって練成され始めた。周りには、俺が使っている槍とまったく同じ形の槍が数十本。神殺しの槍――！！

「思い知れアホ。お前はまだ弱い」

それが発射された瞬間、俺の視界は闇に包まれた。意識が――遠のいて――

「強いな、お前」

いきなり話しかけられ、俺は過剰反応してしまった。虎徹に手をやりつつ振り返る。

「――鳳凰院朱雀――」

漆黒の瞳。流れるような黒髪。細身ながら筋肉が付いていること

が分かる体の線。そして、その両手に握られているベレッタM800とグロック17。

「戦ってみるか」

そう誘われた。それを人は、喧嘩を売られたという。

「……いつでも来い。俺はいつでもアンタを倒す」

鳳凰院の目を見据えてそう宣言し、強襲科から立ち去る。いやあ、いい天気だ。

「バカだな、お前は。自らの強さにおぼれたか」

夢がそこにいた。タカの彼女。

「——萩原の当主が力を誇って何が悪い」

「そこだよ。萩原より強い家系はある。強さに驕ってそれを忘れたか？慢心して殺されたのは誰だ？」

そう煽られた瞬間、何かが俺の中で切れた。虎徹を引き抜いて目の前に突きつける。彼女が持つ全ての武装は、目の前に突きつけるまでの一瞬で全て斬った。鞘に収める。

「——隙がありすぎる。警戒が甘いな」

「——こちらの台詞だ」

チクシヨウ、組んでいやがったか。飛び退りながらサムライエッジを引き抜いて二連射。俺の頭めがけて飛んできた45ACP弾を弾き返し、鳳凰院が持っていたベレッタを弾き飛ばす。

「チ……」

グロックを連射してくる。しかしこちらも負けてはいられない。頭を少し動かしてそれをかわし、不安定な姿勢のままM93Rを速射。鳳凰院のギミックロッドを三本破壊する。しかし鳳凰院は残り三本のロッドで銃弾を弾き、グロックで狙い撃ってくる。

「っ」

虎徹を引き抜いて弾き、すぐに収める。そしてS・HSSを発動

する。

「HSS・・・?!」

鳳凰院がうるたえたその刹那、虎徹で一閃。グロックをバラバラにする。

「チッ」

ナイフを引き抜いて逆手に持つ。鳳凰院はそのまま斬りかかってきた。

「・・・そんなに殺されたいか？なら痺れ殺してやる」

「?!」

すぐに離れる鳳凰院。しかしもう遅い。

「Mode The god of thunder・Are you ready?」

雷神化。黒いプラズマを纏って威嚇する。

「・・・見せ掛けだ!」

鳳凰院が状況を見誤るとは。意外に思いつつ腕を一閃する。しかし、手ごたえがない。

「?・・・ガッ!!」

鳩尾にロッドが突き刺さった。油断したか・・・。

(仕方ない。やりたくはなかったが・・・さすがは鳳凰院朱雀だ)

「・・・Mode The erebos・Are you ready?」

雷神化と同時にC・HSS——闇神化——を発動すると発現する、最強のHSS。その名は・・・スサノオ。Q・HSS

「Clock up!!」

このモードの制限時間は20秒。それ以上発動していると体に致命傷を残す。しかしその速さは——

「ガッ！！グッ・・・ギア！」

鳳凰院が、蹂躪されている。血しぶきを上げ、しかし加えられている攻撃のために倒れることができない。パッ、パパパッ、と暗黒色金の先から衝撃波が発生し、細かな傷を鳳凰院の体に刻み付けていく。さあ、そろそろ時間だ。

「お前の間違いは——はじめに状況を見誤ったことだ。あんな馬鹿げた能力者に喧嘩を売るなよ？・・・そろそろ限界だな。Time over.」

全てのHSSが解除された。微かなうめき声と共に倒れる鳳凰院。
「——やり過ぎたな・・・」

後日。俺は鳳凰院と雛菊の両名に呼び出されて強襲科二階の射撃訓練ルームに来ていた。

「萩原、いや、願。勝負を見ている」

鳳凰院・・・朱雀先輩がそう言うのと、

「そつだぞ願。お前こそ見るべきだ」

雛菊はニツと笑って朱雀先輩の意見を補強する。

「——じゃあ、見ていきましょかね。ここから」

結果、ドクターストップがかかるまで2時間ぶっ続けて戦い続けた二人。最後はぶっ倒れながら笑っていた。憑き物が落ちたように俺はそれをずっと眺めていた——。

なぜか怒り心頭のタカと戦いながら。

コラボ2 漆黒の魔弾&緋弾に集いし仲間達（後書き）

次回は・・・未定！！

強さを取り戻せ！！その壱 弱くなった願

「・・・ずいぶん弱くなったわね願。アンタどうしたの？」

久しぶりのアリアとの戦闘。辛くも勝利したものの、俺も二発銃弾を食らっていた。

「・・・少しばかり悩みがあつてな。集中できなかった」

「いや、それで勝つなんてどうかしてるわね」

Sランク武偵のアリアに上の空で勝利してしまうのは確かに凄いのだが、今はそんなことを考えている場合じゃないのだ。それなのに。

「今なら倒せるぞ！！」

「やっちまえ！！」

死ね死ね団
強襲科のバカどもが襲い掛かってきた。ざつと五十人くらい。

「・・・仮に俺が弱くなつていても、俺は——」

迫り来る大軍。俺はアングルホルスターからデザートイーグルを引き抜く。

「——Vランクだ！！」

まずは落ち着いて一発。胸のど真ん中にそれを食らった奴が泡を吹いて倒れる。デザートイーグルをホルスターに戻しながらXD-9を二挺抜き、腕をクロスさせる。そのままトリガーを深く引きながら体を素早く回す。するとフルオートで放たれていた銃弾がそれに合わせて死ね死ね団の全体に向けてばら撒かれ、多くの馬鹿が倒れた。

「この野郎！」

Aランク十名ほどが俺を取り囲む。二人はアサルトライフルを持ち、あとは拳銃。アサルトライフルの銃弾が俺に向かって飛翔し始める。身を翻してそれをかわし、XD-9のマガジンを交換しながら二人に向けて不安定な姿勢のまま銃撃。二人が倒れた後ろの馬鹿にも銃弾をお見舞いし、残り七人の真ん中に躍り出た。意表を衝か

れた風の敵に9ミリパラベラム弾を叩き込んでK.O。

「うそ・・・でしょ・・・？」

「あ、アリア先輩、あの人って・・・」

お、アリアの戦妹か。micro UZI・・・アフガンの銃だな。

「間宮さんだっけ？」

「は、はい?! な、なんでしょう?!」

「——戦姉の仇、取ってみたいと思わないか？」

何を言っているんだ俺は。無敵じゃないんだぞ・・・今は。

「・・・やってやりますっ!!!」

「待ちなさい!! あたしでも勝てなかったのよ!! いくら弱くなっても(グサツ)アンタには絶対勝てない!!」

う、うおお・・・心に刺さる・・・。

「アリア先輩!! 無理、疲れた、めんどくさいは一番嫌いな言葉なんじゃないんですか?!」

・・・青春だねえ・・・。

「・・・いいわよ! やってきなさい! 負けたら風穴!!」

「ええええええ?!」

それは横暴だろ。

「萩原願。参る」

「ま、間宮あかり、行きます!!」

micro UZIが火を吹く。9ミリパラベラム弾が五発ほど銃口から飛び出て俺を殺さんとする。

「チッ」

虎徹を立てて、銃弾の速度を利用して切断、軌道を捻じ曲げる。

しかし、間宮は既に俺に肉薄していた。

「——鳶穿——?!」

馬鹿な・・・!! 俺の手からXD-9が掠め取られた。

「・・・」

すぐにデザートイーグルを引き抜いて指切りバースト。間宮の小さな背中に50AE弾が三発直撃し、間宮の体が目に見えて揺らぐ。左手に持つXD-9で間宮が持っているmicro UZIとXD-9を狙撃。micro UZIは吹っ飛んでいつて、XD-9はさらに放った二発の銃弾で俺の手に届くように軌道を修正されて、俺の手に戻った。間宮の体は動かない。

「やり過ぎたか——うお!!」

改良型9ミリパラベラム弾が俺の肩のすぐ横を通過していく。いつの間にか立ち上がっていた間宮の手にはガンブルーに塗装されたサムライエッジがあった。

「・・・畜生」

二回掠め取られていたか・・・それとも、偶然吹っ飛ばされたか。俺は取り敢えず原因を究明するのをやめて対処に取り掛かった。サムライエッジを再び狙撃するが、間宮の動きはキレがよくなっており銃弾はかわされた。

「なら・・・動くな!!」

デリンジャーを袖から出して発射。そのまま間宮に投げつけてその陰になる角度からアプローチを図る。しかし、間宮が放った銃弾はデリンジャーを撃ち落とした。

「なんて奴だ!!」

まるで俺がやる銃技・・・弾舞のような、流麗な銃技。アレは俺以外にはできないはずの銃技。

「恨むなよ間宮!!」

「・・・え？」

虎徹を引き抜いて間宮の首にそれを押し付ける。その一瞬前に肝臓を蹴り上げてサムライエッジを弾き飛ばした。

「うああ!!」

脂汗が一気に出る間宮。内臓には手加減したから大丈夫なはずだが・・・。

「・・・次は勝ちます。絶対に」

「・・・なあ。何か違和感なかったか？」

間宮の意気込みを無視して問う。肩をつかんでガタガタと揺らしながら。

「あうあうあうあう」

「何か俺以外から銃弾を食らったとか、何かが流れ込んでくる感覚がしたとか!!」

「あ、ありました!!先輩からXD-9を掠め取ったときに!!」

・・・犯人が近くにいます・・・?!

「わかった。アリア!!」

「な、なによ」

「コイツを救護科に連れて行け。肝臓を蹴り飛ばしたから異常があるかも知れん」

そういい残して、俺は強襲科から走り出た。あたりを見渡すと、タクティカルスーツを着たバンダナ男が立っていた。男の手には――。

萩原家に伝わる闇色のサバイバルナイフ。それが握られていた。

「――萩原、願だな？」

「・・・貴様、誰だ」

「――俺の名は・・・スネーク」

男は、そう名乗った。そして、そのまま立ち去っていった。

「・・・スネーク、だと？」

強さを取り戻せ!!その壱 弱くなった願(後書き)

スネーーーーーーク!!登場です。

弱くなっても腐ってもVランクの願。チート分をなくしていきましよう。

能力がなくても、性格がよければいいんだよ!!!(by性格が悪いラルド)

強さを取り戻せ!!その弐 雇い主はアイツ(前書き)

タカ・レインの登場!!タカのリア充が凄い!!

強さを取り戻せ！！その忒 雇い主はアイツ

「スネーク・・・恐るべき子供達『Les Enfants terribles』の遺産・・・だ」と

少年時代に湾岸戦争に参加、グリーンベレー小隊と共に西イラクに侵入した男。

次世代特殊部隊『FOX HOUND』——『^{FOX}Fユニット』の仮想敵として指定された最強の特殊部隊——がフォックス諸島（アリューシャン列島の一部）のシャドーモセス島で叛乱を起こした際、一人で特殊部隊を殲滅、米軍の核弾頭発射用移動ユニット『メタルギア』の最新型『REX』を破壊した、まさに・・・

『不可能を可能にする男』。それが、コードネーム・ソリッド・スネークだ。

「・・・だが、彼は日本を・・・『大和』を敵に回した」

俺は見た。奴の手に握られていたナイフ。萩原家に伝わる唯一無二のナイフであり、色金。

——数時間前に襲撃を受けた際に盗まれたナイフ。

「その罪は重いぞ」

すぐに懷から携帯を出す。緊急時番号をプッシュし、かけた先は陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地。

「——こちら陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地、首都方面隊司令部です」
「『Fユニット』の萩原だ。隊員番号1786437-D-194」
「了解。——はい、代わりました。『Fユニット』です」
「横田か？」

「司令?! 何があつたんですか?!」

うつたえた風の横田の声。

「学園島に蛇が現れた。直ちに偵察部隊を」

『・・・了解!!』

すぐに切れてしまった電話。携帯を懐に突っ込んで、俺は取り敢えず――横にいるタカを絞めることにした。

「っ?!ギブ!!ギブ!!」

「うるさいぞドアホ。貴様のようなリア充は進んで命を投げ出すべきだ」

「なんだと?!俺は光稀を幸せにしなければならんだ!」

なん・・・だと?!

「だから・・・俺はお前を倒す!!己の意思で!!」

「いや、リア充は幸せに浸ってるからすぐに死ねるよ」

所変わって強襲科。俺は何ゆえか・・・

「タカを馬鹿にした罪、死んで償え!」

「光稀と俺の蜜月を邪魔しようとした罪は重いぞ!」

「え、えと、私は巻き込まただけです!!」

哀れな風蓮さん（半泣き）を含む三人と戦う羽目になった!

「・・・風蓮さん」

「は、はひ」

「・・・死ね」

味方じゃなければ敵だ。9ミリパラベラム弾を肝臓に撃ち込んで気絶させる。

「「希?!」」

驚く二人。

「――俺は、本気だ」
ガチ

そう宣言して、俺は二人に向かって駆け出した。夢がMac10をこちらに向けてくるが、その銃口がこちらに向く前に俺は体を翻らせ、右手に握っていたXD-9の引き金を引き絞る。秒速8連射

のXD-9は2秒でホールドオープン。

「・・・クッ」

肺から空気が押し出され、たまらず体をくの字に折る夢。その背中を足蹴にして一気にタカに肉薄する。フルチューンされているM4を振り向けようとするが間に合わず、俺の左腕はM4を絡め取っていた。

「チッ！」

すぐにM4を放したタカ。デルタエリートを引き抜いて引き金を引いたタカの目が見開かれた。

——俺が夢の体を盾にしていたからだけど。

「み・・・光稀」

一瞬攻撃を躊躇ったタカ。その刹那俺の腕が一閃して、夢がガクリとうなだれた。脇腹に空マガジンを挟るように殴りつけて無力化した結果だった。

「・・・残り一人」

「・・・！！！」

インヴァジブル
不可視の銃撃でデルタエリートを弾き飛ばされたタカが反応する前に、俺は獰猛な獣のように身を伏せて走り出した。前に突き出したXD-9を連射する。

「う、おおおお！！！！」

タカが銃弾を食らって踊るように体を揺らしている。しかし、その手には・・・

ブローニング・ハイパワー。レインの銃があった。

「願。一方的な蹂躪は見過ごせない。成瀬レインハート、いざ尋常に——」

取り敢えず、ブローは弾き飛ばしておいて、と。タカが倒れる一瞬前に振り向き、その回転力を利用して刀を引き抜いた。接近して

くるレイン。雷神化している彼の体が——虎徹のリーチに入った。
「『宵』……」

体にかかる回転力を全て刀に集中させ、それを利用してレインを斬る。そのまま逆回転をかけて急停止。その逆回転力の余剰分でもう一閃。一瞬の間に二回斬る荒業。棕香から教えてもらった技だ。

「一瞬で二回……?!」

この技は相手に『同時に二回斬られた』……と錯覚させる効果がある。その驚愕に動作が鈍ったり、停止した隙に止めを刺すという、連携技を前提とした技なのである。レインの動きが一瞬止まる。「お前の敗因は余計なことを考えたことだ!! 覚えておけ!」

腰を低くして下から上に一気に振り抜いて、相手の出血を誘う『
赤華^{せうか}』。

虎徹を地面に刺し、もう一回力をかけることで衝撃波を発生させて相手を吹き飛ばす『絶』。

この二つを同時に食らったレインは何の技を発することも無く気絶。雷神化が解けてしまった。

「レイン!」

朝露静奈が現れた!!

「またかよ……俺だつてな!」

デザートイーグルを引き抜く。

「疲れるときは疲れるんだよ!」

一気に連射。腕が吹っ飛ぶのではないかと思うような反動を押さえ込みながら、静奈があつという間に倒れ伏すのを見た。

「さすがに痛いっつうの……全く」

デザートイーグルを無理に連射したのが祟ったのか、左腕がジンジンと痛い。左腕をかばいながら俺は当ても無く歩いていた。すると、目の前に金髪の背の低い女性が現れた。

「峰……峰理子!!」

「あれ?……あ、ギーくんだあ」

ギーくんとは、萩原の『ぎ』からできた渾名である。

「ギーくん大変だねえ。アレ、盗まれたんだって?」

「なぜ知っている?」

こいつは確かアメリカに行ってたんだよな。長期任務お疲れさん。……行ってたんだ! 武偵殺しなんて知らない! 俺は巻き込まれてないから関係ない!!

「……スネーク。あの人の雇い主、知ってるよ?」

「……そうか。アイツは傭兵だったな。誰なんだ?」

「ふっふっふ。タダで教えるわけには行きませんなあ」

こ、コイツ……商売がうまい……!!

「……一日キンジを自由にして構わない」

「まいどあり」

キンジ。すまん。今度何か買ってやるからな。

「彼の雇い主はね」

理子はそこで何故か口を閉ざす。そして。

「『無限罪のブラッド』。アイツなんだ」

「……イ・ウーのナンバーツーカー」

「そう。ルーマニアのワラキアの城にいる、鬼だ」

アイツなんぞに、色金を渡してなるものか——!!

強さを取り戻せ！！その弐 雇い主はアイツ（後書き）

きた。無限罪のブラド。しかしバトルはないです（キツパリ）。でも願がブラドと戦う理由を作っておこうかと思ひまして。

強さを取り戻せ！！その参 蛇、そして帰ってきた力。（前書き）

今回は短いです。

強さを取り戻せ！！その参 蛇、そして帰ってきた力。

「——萩原願さんですね？」

「?!」

いきなり後ろから声をかけられた。振り返るとそこには、白人の若者が立っていた。

「反メタルギア財団『フィランソロピー』の、ハル・エメリツヒと申します」

「——『フィランソロピー』・・・ハドソン川のタンカー襲撃の時の・・・？」

「はい。米海兵隊が開発した新型メタルギア『RAY』を世界に公表したのは我々です」

・・・メタルギア亜種に対抗するために開発された新型メタルギア・・・亜種の採用は自衛隊でも検討されたが、非核三原則との兼ね合いで白紙になった。

「その『正義の味方』が、俺に何のようですか」

「ソリッド・スネーク。彼があなたが持っているはずの『ダーク・マテリアル暗黒物質』を持っていたもので。彼はあなたを襲撃して奪い取ったといっています」

「それはその通りですが、彼は誰かに雇われたんじゃないんですか？」

俺が理子から得た情報について質問すると、彼の——エメリツヒの顔色が蒼白になった。

「確か、ワラキア公——ブラドに」

「——それについては認めましょう。彼は私たちの有力なスポンサーなのです」

「FOX DIE関係でのスポンサーですか？」

「・・・なぜそこまで」

蒼白を通り越して緑色になっているエメリツヒに微笑みかける。

「俺は『萩原』ですよ？」

「・・・そうでしたね」

うおい、そこで納得するなよ。

「出たなスネーク。ここで会ったが百年目だな」

「・・・すまない。依頼人にだまされたな」

「・・・何？」

スネークがうなだれている。何やってんだアンタは。

「奴はBIGBOSSのソルジャー遺伝子を取り込もうとしていただけだった。そのために俺を利用し、ついでに色金の中では最も純度が高く質量が大きい『暗黒物質』——『暗黒色金』を手に入れた最強になろうとしていたのだ」

「・・・そんなことくらい、すぐに気づけ」

まあ、俺に言われる前に気づいていたからそこは評価してやるかね。

「じゃあ、返してもらおう」

ナイフを手取る。うん、力が漲ってきた。

その後、ブラドとスネークは決闘したそうだが（自衛隊の偵察衛星の観察結果）。結果はブラドが惨敗。そりゃあ、スティングパーミサイルを撃ち込まれたら・・・ねえ？

強さを取り戻せ！！その参 蛇、そして帰ってきた力。（後書き）

・・・終わりましたね。
次はついに・・・？！

私は・・・（前書き）

今回の話は、重いです！！！！！

私は・・・

こんにちは、伊椎翠です。今日は願の過去についてお話します。

まず、一言。

残虐なお話が嫌いな人は、ここから先に進まないほうがいいですよ。

アイツの生まれは、彼のお母さんが運び込まれた自衛隊富士病院でした。萩原家の嫡男が生まれるということで、自衛隊は最高の警備体制を敷いたそうです。だってそうですよね？いろいろなところから恨みも名声も買っている萩原家の嫡男が生まれるのですもの。

願が生まれた直後、首都圏で大規模テロが起きました。新宿の巨大ショッピングモールが、木っ端微塵に爆破されたんです。死者1200名超、重傷者だけで5000人超の戦後日本、いえ世界最悪のテロだったそれを実行したのが、妖術会と呼ばれる超能力新興宗教。萩原家の嫡男の中絶が為されなかったことを知った妖術会が起こしたテロでした。

すぐに自衛隊が治安出動、妖術会はFOX実験小隊（後のFユニット）に殲滅されましたが、残党はかなりの数が残りました。

その数年後。私と願、遼が会いました。すぐに意気投合した私たち。親同士も仲がよかったこともあって、家族ぐるみでの付き合いでした。一緒にキャンプしたり、温泉に行ったり。いろいろなことをして、いろいろなことを学びました。

さらに数年後。私たちは中学生になりました。柚梨佳ちゃんとお会って、私たちはさらに仲良くなりました。そこまではよかったんです。でも。

中二のとき。願が学校で襲撃を受けました。意識不明の重態。心臓や肺が銃弾でぼろぼろにされ、生きることすら絶望的だった彼しかし、そんな願のことを学校の皆は心配することはありませんでした。彼が消えれば、受験が有利になりますからね。アイツはそれだけ皆から脅威の存在とされていたのです。

彼は生き延びました。心臓も肺も、内臓のほとんどを移植して、何とか。彼は順調に回復して、ついに退院しました。その間一ヶ月。脅威の事例だとお医者さんは泣きながら喜んでくれたそうです。

でも、学校の皆は。

「帰ってくるな」

「何で生きてるんだ」

そんな言葉だけを投げつけていました。私たちは必死にかばいました。特にかばっていたのは遼。暴言を吐く奴を男女関係なく片っ端からぶん殴り、聞きたくもない暴言を吐き捨てていました。あと柚梨佳ちゃん。彼女は何度も教師に相談してやめさせようとしていました。私ももちろんかばいました。暴言が放たれる前にスツと睨むだけでしたが。

しかし、私たちの隙を衝いて願は再び襲われました。今度は、同級生から。先輩から。理科室から盗んだ薬品をかけられ、ナイフで皮膚を切り裂かれ。彼は心も体もズタズタにされ、それでも学校に通っていました。なぜそんなに強く、凛々しくあることができるのか。願は、叔父さんのおかげだと語りました。

「あの人、俺より酷い虐めを受けていたらしい。でもあの方は立派に学校に通って防衛大に受かった。んで今は特殊部隊の司令官だ。あの方は俺の理想で、目標なんだ」

だから、負けられない。そう言ったアイツの顔に惚れてしまったのはまた次の機会に語るつもりでいるつもりです。しかし、そうやって凛々しく、堂々としていたアイツの心を粉々に打ち砕いた出来事がありました。

皆さんも知ってますよね、願の叔父さんが殉職したんです。

願はそれでも泣きませんでした。堂々としていました。でも、決定的に変わったこと。

アイツが、人を殴るようになったこと。

アイツが、人の心を傷つけるようになったこと。

そしてアイツが、二度と私たちと家族の前で以外笑わなくなったこと。

私たちは悩みました。受験は既に終わり、武偵高への進学が決まっていたから。でもアイツは、それすらも諦めかけた。柚梨佳ちゃんは涙を流しながら、ずっと説得していました。遼は拳を握り締めて、ずっと立ち尽くしていました。そして、誰よりも長く近くにいた私は何も考えられませんでした。ただ、その原因を作った奴に復讐していました。

結果としては、願は折れました。曰く、「わかったわかった。だからもう泣くな。いいな？」だそうです。柚梨佳ちゃんもこれで撃墜されたそうです。恋心的に。ちなみに遼はぶん殴っていましたよ。血の涙を流して。「リア充なんて・・・！」と叫びながら。願は苦笑していました。

武偵高では、たくさんの友人ができました。二年になって初めて出会い、数々の戦いを経て親友になったレイン君。朝鮮戦争当時の戦友だったタ力君。一年のときの同室だった遠山君、武藤君、不知火君。そして、神崎・H・アリア。彼はなんだかんだ言って彼女のことを心配しているようです。他にも綾瀬さん、静奈ちゃん、犬猿

の仲だけど光稀ちゃん。希ちゃん、雛菊君、朱雀先輩、銀さん。いろいろな人に出会って、アイツは変わりました。

・・・重い話になりましたね、ごめんなさい。

私は、ずっとアイツのことが好きだったんです。今も。でも、肝心なときに私は何もできなかった。だから、もしアイツに好きな人ができたら。私は何も言わずに笑って、応援してあげようと思います。

最後になりましたが、これまで願と仲良くしてくれたたくさんの武偵高のみんな、棕香さん、首都方面隊特殊部隊司令部の隊員方、大和の皆さん。願に代わりましてお礼します。これからもお願いしますね。

私の話はここで終わりです。つたない話でしたが、最後まで読んでいただいてありがとうございました。それでは。

（その後、ある女子が寮のベッドの中で一人泣き声を押し殺しながら泣いていたことを本人に代わって霧藤遼が記す）

（その後、霧藤遼が萩原願によって人工衛星にされたことを桂柚梨佳が追記する）

私は・・・（後書き）

・・・慣れないシリアス書いてすみません。

翠

「・・・うん。うまく書けてる。ダニのアンタにしては

ラルド

「ひどくね?」

その先にあるのは希望（前書き）

今日は希さんがサブ主人公？！

その先にあるのは希望

休日。暇をもてあましていた俺とタカは、翠を交えて戦時中のこと話を話していた。

「アンタはいつも無理してさ。心配させられるこっちの身にもなつてよ」

「だからゴメンって」

「相変わらず仲がいいよな、やっぱり幼馴染だからか？」

くすくすと笑う翠。その顔は少し嬉しそうだ。俺も苦笑する。

「生まれたときからだもんな。親より一緒にいる時間長いんだぞ？」

「なん・・・だと・・・?!」

「戦争のときも一緒だったから」

「あ、そうか」

どこから転生してきたのかと思った、と笑うタカ。平和だな、と思う。

「一番記憶に残ってる作戦って何？」

「じゃあ、タカからな」

そう俺が言うと、タカはすぐに話し出した。

「希を救出したときのイルバン教会突入作戦かな」

「あゝ。アレは確か俺が作戦を発案したんだぞ？」

「マジで?!」

「大マジ。な、翠」

「そうそう。いきなり『北朝鮮軍の人質を救助する!』とか言い出して」

「みんなノリがいいから、すぐに出勤できる部隊を探してさ。それで白羽の矢が立ったのが特殊作戦群のオメガ3だったという訳だ」

「・・・意外な裏事情・・・」

「それで、実際はどうだったんだよ」

あの時はすごい気を使ったよ。だって周りには装甲車がいて、完全武装の兵士が百人はいたんだぞ？それでも、邦人救助はしなきゃならないから俺らは突っ込んだね。装甲車は米軍のAH-1が吹き飛ばしてくれたから大いに助かった。んで、教会に入った。無音で兵士を排除して、すぐに突入できるって言うときに・・・

四十代くらいの日本人が、頭撃たれて殺されたんだ。

頭の中で、何かが切れたよ。ブチッて。キレたまま突入して、捕虜にする間もなく相手は自殺。その場で生きてたのは日本人は希一人だけだった。殺されたのは希の父親らしくてな。ずっと死体にすがり付いて泣いてたよ・・・。

「・・・そうか」

「彼女も死線を潜り抜けてきたということね」

「ああ。それでそのあと、ヘリで仮設基地に戻って事情聴取。その時は・・・」

「ええ。私がやったんだけど・・・何も話せる状態じゃなかったから、取り敢えず『寝たほうがいいよ。襲わないから』としか言えなかった」

「・・・」

三人が黙り込んだとき。

「鷹山先輩、入りますよ？」

「当の本人登場！」

「あれ？翠先輩と・・・願先輩？！」

「なぜに俺がいると驚くんか。」

「希・・・吹っ切れたか？」

「タカ!!」

翠が止めようとするが、その口を押さえる。なおも抵抗するので軽く抱きしめると硬直した。これでよし。

「・・・正直、まだ実感湧かないです。ひょっとすると家に帰ったら新聞読んでるかとか、そう思っちゃうときがあります」

風蓮さんが、自嘲気味にそう語る。

「でも、そろそろ諦めないとだめですよ。先輩方が助けてくれたから、今こうしてられるわけです」

「え？俺と風蓮さんってあの時会ってないよな？」

「いえ？あの後鷹山先輩にご挨拶に行ったときに」

「——ああ、ナンパされてたとき？」

そう。彼女は戦後タカの身元を突き止めようと防衛省まで来たのだ。お礼がしたかったらしい。しかしそのとき、FOXの隊員達女に餌えた野獣が風蓮さんにナンパしたのだ。

「ええ。あのときの台詞は恥ずかしかったですけど。でも、心が暖かくなりました。父が死んで、心が冷え切ってたんです」

あのときの台詞・・・うああああ!!!!!!

「『おい、俺の彼女に何やってんだ』って」

「・・・願らしいわ」

「ああ。ルックス的に納得がいく」

確かに傲岸不遜にもそう考えたが!!仕方ないじゃん可愛い女の子がゴリラにナンパされてるところ見たらさ!助けなくなるじゃん!確実に助けたいじゃん!

「た、鷹山先輩、なにいつて、言ってるんですか!!そんな、つりあうわけっ」

「いや、並んでみるとお似合いだぜ？」

「うんうん。初々しいね」

「まだ人生の墓場には行きたくないな」

青春時代を謳歌するんだ!誰にも邪魔はさせない!!

「願の印象に残っている作戦は？」

「・・・聞くな。思い出したくない」

「・・・ごめん」

「翠は？」

空気を变えようとタカが速やかに出した問いは功を奏し、翠は目を輝かせると話し始めた。

「空港確保作戦！！」

「あゝ確かに」

「アレは大変だったよね！！」

「？？そうなんですか？」

風蓮さんが首をかしげて問う。翠は語り始めた。

「戦略的拠点だったからね。戦車はいるわ特殊部隊に至ってはゴキブリか貴様らつくくらいに」

「ふええええ、大変そうですね」

「それを一個小隊で片付けたんだよな。俺と翠、あとエースを集めたドリームチームで」

「うんうん」

「凄そうですね・・・」

「そのチームの名声なら聞いたことあったよ。たった10人で500人の特殊部隊を制圧して制空権まで確保したって」

「まさに『仕事したなあ』って感じだった」

そろそろ夜になる頃だったので、俺はお暇することにした。翠は既に帰ってしまっている（見たい映画があるらしい）。夜は危ないから風蓮さんを送ってから帰ろう。

「・・・なあ、風蓮さん」

「なんですか？」

すこし、聞くのは憚られる。

「・・・親父さんの墓参り、行ってるか？」

「・・・いえ、まだ」

風蓮さんがうつむく。

「・・・父が死んだって、認めちゃうような感じがして」

「甘えだな。風蓮さんなら行かない理由は違うと思っただが」

「・・・どういう意味ですか?! わかるんですか?! 肉親がつ・・・」

「

逆上する風蓮さん。その目には涙が光っている。

「ああ。叔父が死んだ」

「叔父さん?! 私よりマシじゃないですか!! 私はず・・・親が・・・つ!!」

まだ認められないらしい。わかる。ものすごく、わかる。

「叔父は、自衛隊西部国土防衛軍・・・大本営の司令官だった」

「・・・」

「最後の悪あがきに、コマンド部隊が攻め込んできてな」

「だから・・・何なんですか」

「・・・」

「何も出来ない自分の前で死んだわけじゃないくせに!! なにがわかるんですか?!」

「それ以上言つなよ後輩。捻り潰そうと思えばすぐに潰せるんだからな」

殺気をモロにさらけ出す。

「・・・状況は同じだった。いきなり叔父の頭がスナイパーに撃ちぬかれた」

「すぐ近くですか」

「ああ。銃口から頭まで5センチのところから撃ち込まれて死んだ」

「見たんですか」

「見たさ。俺が室内に入った瞬間のことだからな」

「・・・!!」

風蓮さんの平手が飛んでくる。それをやんわりと受け流し、両肩

をつかむ。

「一番強く、尊敬していた。虐めにあっていたときも、あの人を目標に耐えてきた。その人が死んだんだ」

「・・・」

「事实は認める」

「・・・いや、です」

「認めないと前には進めない」

「いやです」

「誰も、お父さんもそれを望まない」

「いやです！なんで死んだ人のことが分かるんですか？！会ったこともないくせに！」

「会ったことはある。韓国に偵察に行ったときに、飲み屋でな。酒は飲んでないぞ」

「・・・」

「開戦一ヶ月前だ。彼はずっと希のことを話していた」
あえて名前で呼ぶ。

「『うちの娘と一緒に風呂に入ってくれなくてなあ』と言ってたよ。かなりの親バカだった」

「お父さんが・・・」

「でも、それでも笑ってたぞ？『これも成長かな』って言って」

「・・・おとう、さん」

「『なあ、もし私が死んで、娘に会ったらこう言っておいてくれなにか？』・・・聞くか？」

「・・・聞きます」

死を、受け入れ始めている。

「『希、墓には来るな。前を向いて歩け。後ろ向きになっちゃいかん。・・・ちゃんとした人じゃないとお父さんは認めないぞ？そのときになるまでは来ちゃだめだから！いいな？』」

「お、とう、さん」

「前を向け、希。前には可能性がある。後ろには？絶望しかない」

「・・・」

「進み方がわからないなら、目標を見つけろ。タカでもいいし、翠でもいい。柚梨佳もいる。アリアだって、キンジだって。蓼もそうだな。・・・俺と遼は目標にするなよ？人間じゃなくなるから」

「・・・」

「今は泣け。明日になったら笑え」

そういい残して、俺は帰った。・・・角を曲がった直後、あまりの台詞のクサさにorzしてしまったのは余談だが。

次の日の朝。目が覚めたらそこには、血の涙を流した遼がいた。

「願・・・貴様・・・!!」

「んあ?!なんだ?!遼がキマってるぞ!!持病か?!」

「何ですか願先輩・・・むにゃむにゃ」

・・・へ?

「な、なんで俺の布団の中にいるの希」

「泣いていいって言ったからです。たっぷり泣かせてもらいました」

「・・・そうか。吹っ切れたな?」

「ハイ!もう大丈夫です!」

そういつて、布団からひょいと飛び出す希。

「願先輩♪」

「なんだ?」

「初体験、ありがとございます!!」

「は?!」

「キサマ・・・!!」

「遼が！！まで、おま、おい！！って、何で武藤までいやがる！！
タカ！どうにかしろ！おいレイン！！テメ笑ってんじゃねえ——
——！！！！」

昨日の夜。私はずっと泣いていました。先輩に迷惑にならないように、声を嚙み殺して。

「……にゃ」

その時、願先輩が寝返りを打ちました——私のほうに。

予想よりやわらかい感触を唇に感じました。

「……！！」

ぱかぽかぽかぽかぽか。

必死にパンチしましたが、細身によらずかなりがっしりした体は
びくともしません。

「……うにゅ」

また、寝返りを打ってくれました。はぁ……やっと息がつけて、
よくよく考えました。

いま、私の隣にいる人は？

「……うにゃああああ」

あまりの恥ずかしさに固まってしまいました。
でも、何故か後悔はしてないんです。

願先輩は、厳しいけど優しくて頼りになる人です。

遼先輩は、面白くて公私混同しないきっちりした人です。意外と。
翠先輩は、「女」の先輩です。女の子らしい人ですね。

柚梨佳先輩はおっちょこちょいですけど、芯が強いまじめな人で

す。

いっぱい、目標がいます。でも――

絶対、乗り越えますから!!

その先にあるのは希望（後書き）

呼び方変わった……まあいいや。

初体験ってのはキスのことですよ？！

フラグ立てた……いつも予想の斜め上に行く奴ですね、もう勝手にしろ！私は知らない！

守りたい人がいる――編成（前書き）

番外編最終章、始まり。

守りたい人がいる――編成。

「法務大臣が来るなあ？」

最近少し蒸し暑くなってきた、そんな週末。情報科の自由履修から帰ってきた遼の爆弾発言は俺を啞然とさせた。

「ああ。法務省にいるスタッフがそう言ってたよ」

さらりと普通じゃあり得ない事を言い放つ遼。

「面倒だなあ・・・Vランク武偵が演習で動員されるのは当然だからなあ・・・」

「だ」から言つといたんだろ？」

心遣いに感謝しやがれ。そう言つた遼の顔をグシャリと握りつづいた俺は温厚な男です（キリッ）。

「どこが温厚なんだよ・・・」

「内臓をペーストにしていなだけマシと思え」

バツサリと斬り捨てて俺は目の前のハンバーガーに齧り付く。

「あら、願じゃない」

「願くん」

後ろからいきなり手を置いてきたのは翠と柚梨佳だ。ちなみに柚梨佳は首に腕をかけてきている。

「どうした二人とも」

「いい情報を持ってきたんだよ」

柚梨佳がしなだれかかってくる。

「どんな？」

「・・・法務大臣の警護に私たちが選抜されたの」

武偵から選抜される最強SPチーム。まあ、白羽の矢が俺たちに立つのは至極当たり前だな。

「でも、今回は状況が違う」

「・・・？」

「場所を変えよう。ここは盗聴されるかも」

さすが情報科。柚梨佳の言葉に従い、俺たちは俺の部屋に向かったのだった。

傭兵派遣会社

「・・・PMCか」

遼の言葉に柚梨佳がうなずく。

世界平和部隊

「WPUって名乗ってるPMC複合体だよ。その全てが――」

「合衆国・・・ホワイトハウスに飼われている奴らというわけだな？」

「・・・うん」

内通者

公安調査庁がCIAに放ったエスからの情報によると、ホワイトハウスの最重要機密作戦で、今の好戦的な内閣・・・第二次朝鮮戦争当時の防衛省臨時幕僚連のメンバーが多く的重要ポストを占める・・・を子飼いの鉄砲玉で皆殺しにしようという動きがあるとのこと、報告を受けた特殊部隊は水面下で共同作戦を取っている。

「それに・・・最近、公安系の動きがおかしい」

「ああ。掴んでいるよ」

翠が言ったこともそう。公安0課を除く公安警察の動きが妙に統制が取れている。まるで、何かに備えるかのように。しかしここで妨害しては計画が早まる恐れがあるため、今では警察庁や警視庁を速やかに攻略できるように東京都内の全ての自衛隊駐屯地や機動隊本部に特殊作戦群を配置するしか手はなかった。

「公安調査庁の薩摩諜者が調べてくれているが・・・まだ色好い報告はないな」

遼がそう付け加える。薩摩諜者は島津の昔から始まる忍者の家系。西郷隆盛などの薩摩出身の有力政治家が彼らの諜報能力を使ってきたが、霧藤家が台頭してからはそのようなことも無くなったという。その薩摩諜者が手間取っているとは・・・。

「わかった。実家のほうで探りを入れさせてみる。とりあえず・・・」

冷蔵庫まで歩いていき、中からブツを出す。

「棕香からの土産だ——食うぞ、八橋」
『よし来た』

甘いものに目のない我ら無双四人組だった。

「計画に狂いはないな？」

日の丸の国旗が背後にかけられた部屋。部屋の主は窓に体を向けて立っている。報告をしている男はなぜか戦闘服を着ていた。

「は。すでに実行部隊は配置につきました」

「Sについては」

「九段の方にやらせています」

「うむ。ならば後は・・・」

「潜水艦に迎えをやるだけです」

「・・・油断するな。いいな」

「了解です。山猫に影は踏ませませんよ」

戦闘服を着た男が部屋を出る。部屋の主は椅子に座ると電話をかけた。

「——警視總監の和栗だ。警察長官と面会をしたい」

戦闘服を着た男は、部屋から出ると歩きながら呟いていた。その喉に這わせてあるのは骨伝導マイク。耳にはクリア素材を使ったイヤホン。

「——薩摩^忍謀者より、内閣情報調査室^{サイロ}へ。やはり相手は警視總監だ。連絡を」

（了解。引き続き内情を報告せよ）

了解と男は返答し、ふと微笑を浮かべた。目の前には銃を構えた警視總監室付のSP。

「——公安^{チヨダ}部秘匿部隊隊長、沖田聡一警部。君を国家公務員法第100条2項違反で現行犯逮捕する」

「俺に従来の法律は適用されない。かかって来いよ、S Pの諸君」
S & W M360Jの引き金に指がかけられた。しかし男が放つ
殺気は凄まじく、目標が定まらない。

「・・・来ないのか？なら・・・」

男は目を閉じ、開くと同時に刀を振るった。血しぶきと共にM360Jの残骸やS Pの無線機が廊下に舞う。男は無残に切り裂かれたS Pの死体を踏み越えて、奥へと消えた。

「食った食った・・・八橋も食べ過ぎると腹に溜まる」

「そうだね・・・」

翠が眠たそうに目を細めながらそう返事をする。柚梨佳はすでに寝てしまっている。今日は寝ずに番かな。遼は変態だし。

「今失礼なこと考えましたねえ?!」

「心を読む馬——変態」

「もっと酷くなってるよ願」

「なんのことでしょう。」

「prrrrrrr!!!!」

「ん？電話か」

携帯をとって、電話に出る。

「どうした」

（私だ、萩原）

「・・・蓼。どうした」

（今、警視庁に來ているんだが——S Pが惨殺されているんだ）

「・・・なに？」

ここに来て、S Pの惨殺。

「いよいよだな・・・」

（ああ。どうする）

「すぐにチームを編成する。召集だ」

（わかった）

その一時間後。講堂に集まったメンバーは信じられない言葉を耳にした。

「法務大臣の生命財産の保護のため、これより法務大臣の警護および法務大臣をターゲットにしている国際傭兵部隊の殲滅を開始する！！」

守りたい人がいる――編成（後書き）

はい、はじまりました!!

これからどんどん国家の危機が進んでいきます!!

守りたい人がいる——その日の前。

チーム編成

~~~~~

萩原願

伊椎翠

桂柚梨佳

霧藤遼

成瀬レインハート

朝露静奈

霧矢綾瀬

立花ミチル

有明悠

鷹山勇治

風蓮希

蓼光稀

鳳凰院朱雀

夜桜彩

雛菊京助

~~~~~

「何ですかこの無敵チームは?!」

後輩ブレーキが外れた希が突っ込みを入れてきた。

「軽く在日米軍相手取れますよね?!」

「希。説明の後にしろ」

タカが制止してくれたので助かった。俺は説明を始める。

「今回の任務は法務大臣の警護、および国際傭兵部隊の殲滅の二つだ」

「質問!」

ミチルが律儀に手を上げている。

「なんだ立花」

「情報科ではそんな情報は上がってなかったけど!」

「その点については後々説明する。さて、国際傭兵部隊とはWPU世界平和部隊と名乗るPMC複合体の傭兵によって結成されている部隊だ。こいつらは世界トップレベルの戦闘技術を有している」

講堂の巨大モニターにその戦力図を映し出す。

「現在彼らを雇っている組織はヴィンチェンゾ・ファミリー・・・ロシアンマフィアだ。彼らも戦力を投入してきている。そして、叛乱を起こしたMLアンライト部隊も」

モニターには俺の言葉に合わせて次々と戦力が追加されていく。

「特に危険なのはMLだ。高い耐久力を持ち、その攻撃力は計り知れない」

ML・・・『月光』の詳細が映し出され、皆の息を呑む音が聞こえた。

「これを受けて現在特殊部隊が国際空港に展開、首都圏内の自衛隊駐屯地には出動待機が命じられている」

「だったら何で俺たちが出なきゃいけないんだ?」

そう聞いてくるのはレイン。

「自衛隊員が三人、SATが一人、Sランクが7人だ。召集されるのは当然」

「待つて願くん。私たちはSランクじゃないんだけど・・・?」

綾瀬が首をかしげている。

「情報科のエリートだからな」

「・・・う、嬉しい事言ってくれるわね」

なぜか顔を赤くする綾瀬。ジト目で俺を見る翠と柚梨佳。

「私はどんな理由なんですか？」

希はなにやら期待しているらしくキラキラと輝いた目を向けてきている。

「・・・まあ、タカの戦妹だからな・・・」

理由といえばそのくらい。

「ブツブツ・・・やっぱりそうなんだ・・・鷹山先輩の力でしか私は目立てないんだ・・・ブツブツ」

ずううううん、と黒いオーラをまとって行動の隅っこで体育座りをする希。

「貴様アアアアア！！」

遼と彩先輩の諜報科コンビが襲い掛かってきて、説明は小一時間ほど遅れてしまった。

「夢より風蓮、突入開始」

「了解。突入します」

明くる日。武偵高強襲科、特殊警護訓練施設。キリング・ハウス殺戮の館と呼ばれる模擬訓練建屋では希と夢が訓練している。希と夢がそれぞれデトニクスとMac10を構えているのを訓練本部から眺める。

「・・・0！！」

二人がドアを吹き飛ばして突入した――。

その後。彼女たちは見るも無残に敵役の朱雀先輩＆綾瀬にしてやられて悔し泣きしていた。

「まあ、突入の後弾幕をすぐ張ったところまでは及第点。しかし敵の戦力を見誤ったな」

朱雀先輩がそれをかわしつつグロック17で二人を的確に狙撃し

ただ。

「綾瀬はそれで倒せるだろうが、朱雀先輩はそれじゃ無理だな」

「ど、どうしてですか」

希がきよとした顔でこちらを見上げてくる。

「先輩は銃弾を思いのままに操れるに等しい」

俺は冷静にその事実を突きつける。

「銃撃戦で勝つのは無理だし、女性が朱雀先輩に格闘技で勝つのも無理だ」

「じゃあ勝てないじゃないですか」

畢竟そうなる。

「そうなるなあ・・・翠とか柚梨佳とか、静奈とかを除けば」

悠香
悠もその中に入るのだが、それを言い出すときりがないのでやめとく。

「一回戦わせて見たいですね・・・」

「同意する。しかしそんな暇もないぞ」

「わかってますよ」

希が顔を背ける。

その後も京助が柚梨佳と共に突入作戦（殺したくなかったのは仕方ない）をしたり、翠がレインと一緒に彩先輩と静奈を迎撃したりしていた。俺はただずっとそれを見ているだけ。参加しようとしたら女性陣に『怪我したくないからやめて』と号泣されたからだが。

「強いな、あいつら。それに引き換え・・・」

視点をずらすと、希とミチルが床に座り込んで指で『の』の字を書いていた。綾瀬は苦笑しつつも慰めようとはしていない。

「・・・こ、こいつらあ・・・」

遼もちよつと引き気味。

「フッフ・・・やっぱり私は雑魚なんだア・・・フッフッフ」

「クスクス・・・はるるんに綾先輩が勝てるのに私は勝てないんだア・・・クスクス」

「ちょっと傷つくわね・・・私でもって・・・」

遼に辛くも勝利した綾瀬がうなだれる。

「大丈夫だ。お前は強いよ」

実力の1%も出していない遼にギリギリ勝てるくらいには。

「そ、そうかな・・・」

「請け合い」

遼はよそ見しながら戦ってても蘭豹に勝つんだから。え？俺？殺気だけで勝つよ？

そうして訓練しながら警護を行い・・・その日を迎えた。

守りたい人がいる——その日の前（後書き）

——大規模テロ、発生。

「山手線新宿、渋谷、池袋、秋葉原、品川駅で爆発が発生しました。使用された爆薬はC4爆弾各30リットル、有毒ガスは発生していないのですが、念のため爆心には近づかないように警察から指示が——」

——実行されるは出動か、待機か。

「防衛省の横槍だ。陸自正規部隊は動かない」

「どうしてですか！！都民が・・・国民が何千人という単位で死んだんですよ！！」

——国防の砦、陥落さる。

「朝霞駐屯地で大規模な爆発を確認しました！！状況から見て首都テロと同じ爆薬と思われます！！」

「用賀、目黒、練馬、十条でも爆発！！」

「陸自通信システム、途絶しました・・・」

そして暗躍するは薩摩の者たち。

「霧藤頭目からの指示だ。陸自司令系統を復旧させた後、山猫と狐を巣から出す！！」

『チエスト！！』

次回。
守りたい人がいる 崩壊の序章。

守りたい人がいる——崩壊の序章。(前書き)

あえて言わせてもらおう・・・これはオリストーリーであると!!

守りたい人がいる——崩壊の序章。

新宿駅前交番にて夜番をしていた折斑祐樹巡査部長には夜番の日のお決まりの行動があった。出勤靴を履き、拳銃を携帯して新宿駅構内をパトロール。その後は駅前ロータリーのパトロールをしてから日誌を書いて引継ぎをするという警察官の鑑のような行動だ。そんな彼が今朝も普段どおりに改札を警察手帳で抜け、構内の床に捨てられていたゴミを何気なくゴミ箱に捨てた瞬間のことである。

極長周波

潜水艦通信で使用されるE L Fが都内の某所から放たれた。その電波は新宿駅構内のゴミ箱の裏側に固定されていたC4爆弾——コンボジョン-4その雷管を覚醒させた。通常、爆薬というものはガスをより多く発生させるためにわざと不安定な状態に作られていることが多い。C4はその典型的な一例といわれ、反応率が最も高いことから米軍をはじめとする世界各国で採用されている。元々は宇宙ロケット切り離し用の爆薬としてNASAが開発したとも言われている。そんな爆薬が直近で爆発したら——。

大規模な揺れが数分間続いた後。武偵高の通信科にいた俺の携帯が鳴った。

「テロ?!」

「ええ。ラッシュアワーの時間帯を狙って複数の駅で」

「JRか?」

「そうね。全部山手線が走ってる駅よ」

法務省に詰めていた翠の電話。公安調査庁部隊からの緊急連絡を告げた翠の声は震えている。

「概算でいい。犠牲者はどれくらいだ」

「少なく見ても、全体で2万人は死んだわね」

「2万人も・・・?!」

どれほどの爆発なのか。どれほどの被害なのか。どこで起きたのか。全くわからない状況の中、俺は質問することを見失っていた。気がつく、俺は携帯を握り締めていた。

「・・・霞ヶ関は？」

『テロが起きた10分後に閣議が招集されて、自衛隊の出動が決定されたわ。治安出動・・・どうやら、もう成り振り構ってられないみたいね』

「・・・それくらい、WPUは予測できているはずだ・・・」

『でも、今はそれしか出来ない』

何かが引つかかる。自衛隊になくてはならないもの。首都近郊に十分になくて、いちいちそこから・・・!!

「・・・法務省から防衛省に連絡!!陸上自衛隊東部方面隊・首都方面隊全ての基地の爆発物処理部隊を出動させろ!!」

『どこに?!』

「各基地の爆薬を解除!!徹底的に洗え!!WPUは自衛隊駐屯地に爆薬を仕掛けている!!」

『・・・傭兵・・・日本・・・意識の向上・・・自主訓練・・・?』

「!!」

「早くしろ!!はや——」

俺がその台詞を言い切る前に、東京の空にまた轟音が響いた。

「・・・っ!!だめだ、連絡が取れない!!」

携帯電話網、現在パンク。警察無線、自衛隊無線は使用不能。外部との連絡手段が一切ない状況。

「最後に確認された情報によると・・・」

「なんだ？」

「——朝霞駐屯地で爆発です・・・。爆煙から、使用された爆薬は先ほどのものと同じと推定され・・・。死傷者はいないようです

が・・・」

啞然。

「情報科から！！用賀、目黒、練馬、十条でも爆発を確認！！いずれも死傷者はなし、しかし車輛部隊の出動はきわめて困難！！」

「続報！！爆発発生地点は山手線の新宿・渋谷・池袋・秋葉原・品川の五駅！！駅舎および周辺建築物の倒壊で死傷者は10数万と政府は推定！！」

史上、最悪のテロ。一国の首都が、蹂躪されていく。

「自衛隊通信システムは現在使用不能！！」

「在日米軍は出動を延期！！」

舞い込んで来る情報。それらを捌いて捌いて捌く。

「・・・願！！法務省から防衛省に出した出動要請は却下されたわ！！！！」

「何故だ！！」

『治安出動では対抗できず・・・』

「・・・この通信！！狐と山猫にまわせ！！」

『・・・はい！！』

願が武偵高で大童になっている頃。市ヶ谷駐屯地では。

「なぜ正規部隊を出さない！！」

『F^狐ユニット』副司令官の横田二等陸佐と『山猫部隊』司令官の桂一等海佐は陸上幕僚長に詰め寄っていた。

「10万もの人命がテロで消えたんだ！！これで出さない理由がない！！閣議で決定されたんだろう！！」

「防衛大臣からの命令がない。我々が独断で出動させれば指揮系統に取り返しのつかない被害が・・・」

「そのために我々がいる！！」

気炎を上げる横田。

「幕僚長。これ以上人命を散らさないためにも出動命令を出してく

ださい」

「海上自衛隊の総意か？」

「・・・我々海上自衛官は、いつも陸から離れています。たとえ地上勤務だろうと特殊部隊だろうとその心意気は変わりません」

冷静な桂一等海佐。

「海上自衛隊は敵の上陸を許さない。祖国を踏み荒らす敵は・・・徹底排除です。海上自衛官は全員この心意気で職務に専念しています。私は、そう信じる」

「しかし、これは陸で起きたことだ。これは陸自の懸案事項だよ」

「お言葉ですが、これははっきり言って『狐』の手に余ります」

「・・・悔しいが、そのとおりだ。我々はあくまでコマンドではない。だから『旅団』の『山猫部隊』にわざわざ・・・」

「これは陸で起きたことだ！！陸自が処理する！！」

そう叫んだ幕僚長は一瞬後に「しまった」という顔になった。

「・・・出勤を」

「・・・」

横田がニヤリと笑いながら促し、幕僚長が震える手で電話に手を伸ばした瞬間、その電話機が鳴った。

「・・・陸上幕僚長、武宮です・・・し、しかし！！第1空挺団は現在出勤し得る部隊では最強の・・・！！・・・総理の護衛？飾り物が何だっけ言うんですか！！今は非常時です！！」

人が変わったかのように怒鳴った幕僚長に2人は目を丸くした。どうやら相手は官房長官らしい。

「罷免でも何でもなさるがよろしい！！陸自は陸自で動く！！」

「よう、武宮あ。キレたな？」

「か、神楽海上幕僚長！！」

桂一等海佐が敬礼する。

「神楽君・・・」

「海自も海自で動くと・・・言っというて、さ、桂。出勤だ」

「イエツサアア！！」

「ええいクソ！！横田君！！すぐに狐も追いかける！！」
「了解！」

何かグダグダで決まった出勤であった。

「法務大臣の身柄は！！」

「現在チーム全員で護衛中だわ！！」

法務省にたどり着いた俺は、翠の先導で大臣執務室に直行した。
大臣はタカや希、レインたちに囲まれている。その顔には脂汗が浮かんでいる。

「レイン！！状況は！！」

「不審な物体はないよ」

そうレインが返した直後。何者かが防弾ガラスを突き破って大臣執務室に突入してきた。タカや朱雀先輩、夢が即座に銃で攻撃したが、その何者かは最小限の動きで銃弾をかわす。

「願！！」

「言われずとも！！」

遼に言われる前にXD-9で撃ち殺そうとした。しかし一撃必殺の名目でマガジンひとつを使い切ったにもかかわらず、その何者かは無傷。

「——我——名——無双——」

その何者か・・・無双はそう名乗ると背中から刀を引き抜いた。
黄金、銀。さまざまな色が入り乱れてまるで虹のようなオーラになったそれを纏うその刀を俺たちに向けて、無双はこう宣言した。

「——我——倒——強——」

執務室を静寂が支配する。ガラスの破れ目から吹き込んでくる風が、俺たちと無双の間を吹きぬけた。

守りたい人がいる——崩壊の序章。（後書き）

次回。レイン、大暴れ!!
そして翠と柚梨佳がキレます。

守りたい人がいる——引き継がれるは技と心意気。

「——我——倒——強——」

そう宣言した何者か——無双——がいきなり斬りかかってきた。咄嗟に虎徹で防ぐが、その甲斐なく俺の体は弾き飛ばされた。

「力だけはあるようだな……」

「願。ここは引き受ける」

レインが一步前に出る。翠と柚梨佳も。

「——頼んだ——」

すぐに法務大臣を掴んで破れた窓から滑り降りる。彩先輩、蓼と希、遼と京助がそれに追隨した。

「私は桂柚梨佳……無双。あなたを倒させてもらう」

「——重畳——」

柚梨佳ちゃんが影からSAAで連射した——その総数、96発。

「——脆弱——」

銃弾を次々と切り裂いていく無双。ほぼ同時に放たれた96の銃弾は1発も当たることなく床に転がった。

「柚梨佳ちゃん、大丈夫?!」

「うん、平気だよ!!」

G3ライフルを連射しながら柚梨佳ちゃんを救出。柚梨佳ちゃんはSAAで鉛弾を撃ち込んでいく。1が2に、2が4に。ねずみ講のように柚梨佳ちゃんが放つ銃弾の数は増えていき、最終的には銃^{マズル}火すら見えなくなっていた。

ダダダダダガチャダダダダダガチャダダダダダガキン!!

ついに柚梨佳ちゃんのSAAが弾切れを起こした。リロードでき

る通常弾は無い。しかし柚梨佳ちゃんはやはり人外なスピードでハーフムーン・クリップを取り出して装填、相変わrazの凄まじいスピードで武偵弾を使い切った。炸裂弾、徹甲弾、突撃弾。まずは初速が半端なく速い突撃弾。これで無双を威嚇し、徹甲弾で無双の頭を撃ち抜く。最後の締めは頭に開けた風穴に向けて放たれた炸裂弾。紅蓮の炎を上げて炸裂したそれは無双を倒すには十分過ぎるものであったはずだった。しかし。頭を吹き飛ばされた無双が、立ち上がったのだ。頭が、無いまま。

「なん・・・で!」

「まだだよ!」

柚梨佳ちゃんが叫んだ瞬間、無双の千切れた首から血煙が立ち上がった。断面に銃弾が当たっているようだ。よく見ると、部屋の中のあるちこちで不自然な火花が散っている。机の上のブックエンド、時計の針、無双の持つ刀、蛍光灯、防弾ドア。そして、銃弾同士。それも柚梨佳ちゃんが放っていた銃弾だけではない。7・62ミリNATO弾、5・56ミリNATO弾、9ミリパラベラム弾。幾つもの銃弾が三次元的にそれぞれをを弾き、それぞれに弾かれているのだ。

「弾華・・・願くんから教わった技だよ」

「あ、ありえん・・・」

今まで呆然としていたみんなは何も言わずに願を追った。その後で、無双はぐらりと揺れて倒れ伏した。

桜田門、警視庁。

「大臣、急いでください。東京には安全な場所はありません」

「自衛隊基地は?」

「先ほど朝霞駐屯地などで爆発がありました。自衛隊基地でも安全とは言いい切れません」

警視庁ヘリポートに駐機していた自衛隊ヘリコプターに大臣を押し込んだそのとき。そのヘリポートにつながる扉がいきなり爆発し

た。大臣をへりに蹴りこみ、離陸を命令する。

「俺の名前は恭藤蓮だ。きょうがふしれん お前らを殺せっていう命令があつてなあ」
目の前に立つ男はそう名乗ると、手に持っていた巨大な銃を――
――希に向けて撃った。

銃弾が希に達するまでの一瞬で、俺は男と希の間に体を置いてしまっていた。Q・HSSを発動して。

そして気がつく、俺の腹には大きな穴が開いていた。血が失われていく。

「願……先輩……？」

希が駆け寄ってきた。希の肩越しに見えるのは――さっきの男の余裕から来る笑みと、男が構える銃の銃口。男の指が、引き金にかかる。

「伏せろ!!」

声を発すると同時に俺は低い姿勢で飛び出し、男の持っている銃の銃口を体でふさいだ。畢竟、銃弾は俺の体を破壊する。しかし、銃弾の破片で銃は使用不能になった。激しい痛みが体を焼く。俺は耐え切れずに意識を手放した。奈落の底に落ちていく、それが最後の感覚だった。

「願……先輩……!!」

私はまた人を殺めさせてしまったのかもしれない。一回は北朝鮮の兵士に親を。そしてもう一回は、あの男に願先輩を。どす黒い感情が巻き起こる。

「……許さない……」

願先輩の腰からXD-9、懷からサムライエッジを調達する。先輩の見よう見まね。つまり……『破神』。

「こんなか弱い女の子しか残ってないのかぁ。殺す気もなくならあ……うおつと!!」

頭をガクンと横に傾けて男は私が放った銃弾をよけた。

「・・・へえ。結構見所あるなあ」

そして、男がニヤリと笑った瞬間。私の目の前から、男が消えた。

「裸に剥いても、そんなに強気でいられるのかな？」

背後から聞こえてくる声。ズドンと一発背後に撃ち込んでから振り向くが、そこにはすでにいない。

「あれ？やっぱ弱いのかな？」

男は遊んでいるかのように笑いながら銃弾をかわし続けている。

「弱い女の子は要らないんだよね」。見てて吐き気がするからさあ・

・

目の前に、虎徹を構えた男が――

「死んで？」

「さ・・・せるか!!」

死んで？と男が言った瞬間、男は横様に吹っ飛んだ。そして男の横にはいつの間にか願先輩が、デザートイーグルを構えていた。

「へええ・・・面白いなあ・・・もつと遊ぼうぜええ!!」

男は虎徹を突き刺そうとする。先輩はかわしながら頭や心臓、肝臓、「男として大事な部分」を50AE弾で撃ち抜いていく。

「ひつでえ・・・殺す気なのか？」

「当然・・・!!」

そう啖呵を切った先輩の体が再び血しぶきを上げた。お腹に開いた銃創に、男が拳をぶち込んでいる。何回も繰り返してぶち込む。先輩はそれでも顔色を変えずに人体の急所を破壊していく。しかし、それを上回る速さで傷は癒えていく。

「萩原も廃れたもんだなあ・・・」

そう呟きながら、男は先輩の体をゴミくずのように警視庁ビルから投げ捨ててしまう。

「・・・世話になってるようだね、今代が」

そして男は振り返ると、柔らかな笑みを浮かべてこう言っただけだった。

「恭藤蓮っていうのは伏せ名だね。本当の名前は・・・」

男の背後に共産圏のヘリコプターが舞い降りた。

「——萩原勇作。萩原家初代当主だ」

「萩原初代・・・?!」

成瀬レインハート。紫電の雷神と呼ばれる彼は、警視庁のヘリポートにつながる扉・・・その残骸の陰でその言葉を聞いていた。

「・・・許せない・・・」

そして、飛び出しながら雷砲を発射する。しかしその男は、雷砲を銃弾で弾いた。破壊されたはずの銃を使って。

「——治癒系の能力者・・・?!」

体から物体まで、治癒系の能力者には様々な効果を持つものがある。その中でも彼はおそらく・・・全ての治癒に長けている。

「紫電の雷神・・・か。成長に期待するよ」

そしてその男はヘリに乗って消えてしまった。

「俺がもし動けなくなっても今までどおりに任務を継続しろ。願はそうだったわ。だから任務は続ける。まずは法務大臣を安全な場所に避難させて——」

一拍置く。皆の目に涙は無い。泣いている場合じゃないと知っているかのように。

「——あのふざけたマフィアと萩原初代モドキを倒す!! いくわよ!!」

『了解!!』

私が腰に下げた家宝『椎』。柚梨佳ちゃんの『桂』。遼の『陰陽』。そして、願から調達した『虎徹』はタカ君が持つ。レイン君の『水月』と合わせて五振り。

「この5本の刀で・・・絶対に倒す!!」

守りたい人がいる——引き継がれるは技と心意気。(後書き)

はい、ついに願くん倒れる!!

この結果に持つて行こうとどれだけ苦労したか・・・!!
願強すぎ・・・!!

守りたい人がいる――無敵の介入者。そして・・・（前書き）

今回はグダグダです。

守りたい人がいる——無敵の介入者。そして・・・

「・・・なんだ、あれは」

陸上自衛隊東部方面隊、第三十一普通科連隊。東部方面隊有数のエース部隊が相手しているのは、およそこの世のものとは思えない兵器だった。

『こちら第二中隊！！目標は現在第三防衛ラインに向けて進行中！！』

「対艦ミサイル連隊は！！」

「現在第二ポイントに配置中！！」

「第二中隊！！あと何分耐えられる！！」

『最高でも三分です！！』

「三分・・・」

対テロ作戦という名目で出動してきた第三十一連隊。重火力兵装を帯びていない隊員は今戦死を覚悟してその兵器——コードネーム『ML』に立ち向かっている。

『こちら富士教導団戦車教導隊。所定ポイントに配置完了。これより火力支援を開始する』

「了解」

その『ML』に対抗するかのように防衛省が命令したのは、最新鋭戦車である10式戦車の首都への出動であった。いまだ試作段階のそれを全て出動させるといふ大盤振る舞い。平和主義国家とは思えないようなその思い切りの裏にはやはり『ML』の脅威があるのだろう。

『ML』。通称、月光。

PMC保有の最新自立稼働兵器である。広範囲の視界を確保した兵器群や下半身を覆う生体部品、そして高い機動性を持つ究極の兵

器。そんな兵器に対抗するためには、やはり――。

「砲撃が開始されました！！現在砲撃を行っているのは10式戦車が3台、90式戦車が5台です！！」

「今のうちにフォーメーションを組みなおせ！！」

『了解！！』

ここからは『ML』は見えない。しかしその微かな安心も打ち碎かれることとなる。

灰色のビルを幾つも飛び越えて――『ML』が。

「――こちら本部。目標のうち1機が本部正面にあり」

呆気にとられた通信士の言葉も耳に入らない。司令官は反射で拳銃に手をやり――固まった。

『ML』が火花を散らしながら、ゆっくりと倒れたのだ。

「・・・よし。こんなもんかな」

「さすがタカだな。私の夫だけはある」

「容赦ないです・・・」

そして聞こえてくる三人の若者の声。

「・・・君たちは・・・?!」

司令官は振り向くとまたもや固まった。その若者のうちの一人が持っていたのは――

コルトM4にショットガンだのドラムマガジンだのサプレッサーだのダットサイトだのをジャラジャラ付けたもはやM4の面影が無いライフルだった（泣）

「あ、俺たち武偵です」

「ついでにこの男は特殊作戦群隊員だ。私はSAT所属で、この子

はただの武偵だ」

「（ガーン）」

三人の出自を紹介した銀髪の女性・・・その武偵の装備もまた大変なものだった。

「本部からの応答は?!」

「はい、確認されました!!武偵三名が破壊したとのことですよ!!」
ここは戦場である。いかにここが東京のど真ん中でも、戦場には
変わない。

「『ML』接近!!」

「ちっ・・・」

ここまで。そう皆が覚悟した瞬間。

「全く・・・自衛隊も形無しだな」

「し、仕方ないんじゃない?なんせ『月光』だし」

「わ、きれいに斬れてる」

視界に入ってきたのは、上半身が切り裂かれてぶっ倒れる『ML』
と、その前で会話をしている三人の女性の姿だった。

「こちら戦車部隊陣地!!応答を——」

「隊長!!きました!!」

「応戦しろ!!」

10式戦車や90式戦車が次々と退避していくなかで、特殊作戦
群第一中隊第三小隊のメンバーは『ML』を迎撃していた。

「キリがありません!!」

「何とかしやがれ!!」

「んな無茶な!!」

そんな中。三人の部外者がふらりと入ってきた。

「・・・殲滅」

「だな」

「よし、やってやる」

一人は目の前に氷の巨大な塊を浮かべ、一人は両手に拳銃を持ち。そして最後の一人は紫のプラズマを身にまとっていた。

「GO!!」

そう三人が叫んだ瞬間、戦車の目標追尾システムから目標が消滅したという。

「・・・あなたは、何がしたいんですか」

「なにつて？」

「こんなに滅茶苦茶にして・・・この国をどうしたいんですか」

街中。黒髪を風になびかせながら男に詰問する女性。

「この国は変わらないよ。どんなことをしても」

「・・・自衛隊が出動して、もしこの国が軍閥化でもしたら？」

「そうならないように布石は打ってある」

「・・・？」

一瞬、意識が男から飛ぶ。その瞬間を狙って、男は女性に掴みかかった。

「?!」

何が起こったのかわからないまま、女性は組み伏せられる。

「へえ。女の体ってこんなに柔らかいんだ」

「・・・離れろ!!」

しかし、筋肉に力が入らない。

「あんな・・・初代に負けるようなガキにくれてやるのはもったい

ないな」

「願を・・・そんな風に言うな！！初代萩原！！」

女性——翠は叫びながら何とか抜け出す。その目には憎悪。

「・・・伊椎家次期当主、伊椎翠。全力で行かせてもらう」

「いい度胸だ。萩原家初代当主、萩原勇作。まかりとおる」

殺気が辺りに撒き散らされる。そして殺気が一気に増した瞬間、古今例が無い激しい戦いが幕を開けた。

守りたい人がいる——無敵の介入者。そして・・・（後書き）

・・・次回。『守りたい人がいる——仇を討つは仲間ゆえか、愛ゆえか。』

守りたい人がいる——呆気ない決着と大団円。(前書き)

最終章!!

翠の本心が明かされる?!

守りたい人がいる——呆気ない決着と大団円。

殺気が暴風と化して街を洗う。その中心で、私と男は剣戟の鋭い音を刻んでいた。私が脇腹に向けて振るえば男はそれを弾くように刀身を振る。男が首を掻き切るように刀を向けてくれば私はそれを弾く。時代劇のような大げさなものではない、殺気だった剣戟の音。銀と蒼の閃きが交わるその瞬間だけ、私と男は少しだけ身じろぎする。

「刀は苦手じゃなかったのかな、伊椎の」

「いつまでも苦手でいるわけには行かない」

ギギギギギギギギギギギン！！

何回も連続して響く、金属のこすれあう音。普通の金属同士ならとつくに砕け散っているはずだが、妖刀であるこの刀は砕け散らない。それは相手の刀も同じようだ。

「でも、剣術・銃術・体術トライ・タクティカルの一族マスターズには勝てないよ」

「自信過剰は失敗を招くぞ——」

「自信過剰？違うね」

男の動きが一段と速くなる。最早、刀の軌道が見えない——！！
「ただ自分自身を客観的に見ているだけだよ」

「——?!」

腕に、肩に、腹に、腿に。複数の部位に痛みを感じた。私の限界なのか、斬られたのか。

「無謀だったようだね、伊椎の」

「私を・・・甘く見るな・・・!!」

杖代わりにしていた妖刀『椎』を下から上に振るい、その復元力で男の刀を弾き飛ばす。油断していたのか、男は意表を衝かれたような顔をした。その刀は遠くへ転がっていく。

「——!!」

しかし、私の心は冷静にならなかった。男の手で『椎』の動きが

止まってしまったのだ。

「エッジ・キャッチング・・・格闘術の応用だ」
真剣白刃取り
バリ・トゥード

「・・・っ!!」

すぐに刀を引こうとするが、そのときになって私は気がついた。

腕の腱が——斬られていた——。

「あっっ!!」

反射的に刀を取り落としてしまった。そのまま刀身を指でまわして柄を掴み、斬りかかってくる男。ここまでかな・・・そう思ったとき。

「女性にそこまでしないと勝てないのか？落ちたものだな初代萩原」
その声と共に轟音が響いた。見ると、男の手から『椎』が弾き飛ばされている。

「——しぶとい奴だ」

「お褒めの言葉、どうも」

笑っていた。その声は、どう考えても笑っていた。

「それ、アンタの刀だろ？」

そして飛んでくる刀。咄嗟にかわした私の頭上をかすめたそれは男の手に収まる。

「——潔いな、今代!!」

「一対一、正々堂々勝負だ!!」

そう。私を窮地から救ってくれたのは——萩原願だった!!

先ほどまで響いていた剣戟の音とは異なる、質感を持った重い剣戟の音。初代はすばやく動き、意識の狭間から巧妙に攻撃してくる。
「だが遅い!!」

ちまちまと攻撃しているようでは間に合わない。とうにそれを学んでいた俺は初代が刀を振りかぶる一瞬の隙を狙って斬る。背中と腿をバツサリと斬られた初代はすでに息を荒くしている。

「腕を上げたようだな今代!!」

「・・・?」

違和感を覚えた。何かが決定的に違う。

「まだ・・・これからだ!!」

そしてその違和感を突き止める前に、初代が投げつけてきたものは――

スタンクレネード
「音響閃光弾・・・?!」

100万カンデラの閃光と180デシベルの轟音が脳を直接揺さぶる。この類の訓練なら飽きるほど受けてきたが、やはり即応は難しい。一瞬の視覚・聴覚の喪失。その間隙を衝いて初代は逃げ出したようだ。

「・・・追っても無駄だな」

「そう・・・ね」

体から力を抜き、俺に体を預けながらやわらかい微笑を浮かべる翠の目から涙がこぼれた。

「・・・よかった・・・生きてて・・・」

翠には珍しい、素直な言葉。それだけ彼女が疲弊していたことがわかる。

「やつぱり・・・アンタがいないとだめだね・・・私」

「やめろや、照れる」

「うつん、やめない。お仕置きと思つて聞いてなさい」

柔和な笑みを浮かべながら、涙腺だけは壊れたように開きっぱなしの翠。

「ずっとさ・・・無理してた。冷静に仇をとつて、それから泣こうつて・・・」

それは、あまりにも過酷な試練。

「だって、私が一番アンタの近くにいてずっと一緒にいたんだもの。私が泣いてたらみんな動揺しちゃうでしょ?」

それでもコイツは、皆のことを考えて――。

「でも、さ。やっぱり無理だったよ。アンタみたいにフラットに物を考えて指示を出すなんて、無理だった」

アンタすごいよ、誇っていいよ。そう明け透けに褒める翠。その体にはもう幾許も力は残っていない。

「アンタは――やっぱり、私と一緒にいないほうがいいね」

自分の事を無視して、あくまで人のために。

コイツは、俺が不甲斐ないせいでこんな状態になっても俺のことを考えてくれている。

「私、弱いから。個人的なものと任務を分けて考えられないから。私とアンタじゃ格が違いすぎる」

いつも自分を卑下して。

「アンタは強いでしょ？だから、さ」

実はそんなことを考えてもいないくせに、他人のためだけに平気で嘘をつく。

「友達甲斐も無いだろうし、捨ててよ」

群れることしか知らない男どもよりよっぽど強い意思で、自分を弱いと言い切る。意味が無い存在だと。

「私はアンタがいないとただめだけど・・・アンタは、私がいなくてもみんながいるでしょ？」

皆と、決別するつもりか。その言葉さえ、言葉にならない。口に出不せない。

「ね。ほら。みんな待ってるから」

最早力が少しも入っていない体で、ゆっくりと俺を押す。

「行ってきたよ。元気になったって、みんなに挨拶してきて」

胸板に頭をコツリとぶつけて、俺の体を押しやる。

「私のことは――忘れていいから」

「バカなこと言うな」

「忘れて。耐え切れないから」

俺の目をいきなり見つめてくる。その澄んだ瞳には悲壮な決意。

「弱いやつが強いアンタにまわりついてたら・・・邪魔でしょ？」

「何言ってる、そこらの自衛隊員より強いくせして」

「「あのか弱そうな女の子に負けた」」

おいそこの自衛隊員。いつの間に沸いたか。

「「迎えにきたであります、一等陸佐殿！」」

「そうか・・・横田に礼を言っておかなきゃな。いくぞ、翠」

「・・・ほつといてよ」

「いやだねえ、自分を卑下する人つて。かわいくて気立てよくて、強くて謙虚だけど、守り甲斐がある奴。こんな良物件、手放すわけ無いだろ？そしてそもそも」

そこまで言うのと、俺は翠を横抱きにした。

「親友じゃないのか？俺たち四人は」

「——弱いやつでも？」

「弱ければ鍛えればいい」

「・・・そつか・・・うん、そうね！！」

涙目だが吹っ切れたように笑う翠。俺の言葉で吹っ切れるって、どれだけ単純なんだ？

「願。貴様病院から逃げたと聞いたが？しかも何ゆえ翠をお姫様抱っこ？リア充死ね」

「願くん。心配したんだよ？希ちゃんなんか泣き崩れてたんだよ？」

「スローモーで見たが、横田二佐なんて落ち着いた振りしてコーヒ

ーの中に小麦粉を——」

「ほほうガキ。いい度胸だな」

「よ、横田二佐、ちょ」

「（ミシミシミシ）司令、速攻で病院に戻ってください」

「願先輩！！だめです、そんな、速く戻って・・・」

「萩原・・・まあ、無事でよかったな。それと横田さん、タ力を放

してください」

「願・・・相変わらずだな・・・」

「全くだ。無理をするなと何回言えばいいのだ？」

「まあまあレイン君、静奈ちゃん。萩原君も翠ちゃんも無事なんだし、いいんじゃないかしら？」

「願！！貴様このリア充め！！氷漬けに・・・！！」

「おう願、無事で何より」

「萩原ア！！悪運強いなコノヤロ！！」

武偵高に戻ると、皆が出迎えてくれた。そしてその向こうには。

「萩原！！貴様さつさここで楽に死ね！！」

「とつと俺の手にかかって死ね！！」

強襲科の仲間。

「願！！アンタ大丈夫？！」

「願・・・なんで平然としてられるんだ・・・」

「・・・お帰りなさい、願さん」

アリアとキンジ、レキ。

「萩原ア！！心配かけやがって！！」

「蘭豹、なにアンタ泣いてんのおゲホゲホ！！」

蘭豹と綴。

「おうおうみんな勢ぞろいだ」

「人気者は辛いわね？」

「そうだな。だが、悪い気はしないよ」

「ふふ、アンタらしいわ」

さて、そろそろ病院に行きますかね・・・。

その後、遼たちによってヴィンチェンゾ・ファミリーやWPUが

逮捕されていたことを聞き驚いたのは余談である。

「願
♪」

「棕香・・・」

病室にもつと疲れる存在がいたことも、また余談である・・・。

守りたい人がいる——呆気ない決着と大団円。（後書き）

次からはブラド編ですよ。またまたチート復活ですよ。

第23話 帰ってくるは日常とクラスメイト（前書き）

ブラド編突入！！

第23話 帰ってくるは日常とクラスメイト

病院で精密検査を受け、寮に帰ってきた日の夜。廊下でアニメ声が聞こえたので覗いてみたら、そこには案の定アリアがいた。

「よ、アリア。何があった？」

「願・・・はあ、アンタホントに大丈夫なの？」

「平気平気。それで、何があった？キンジはヒスもごもご」

キンジに超音速で口をふさがれました。

「??」

「あ、アリア、気にしなくてもいい、こっちの話だ」

「・・・そう、だな。こっちの話だ」

「まったく・・・」

呆れたように首を振るアリア。どうでもいいが、むかつく。

「で？」

「・・・さっき、理子に会ってきたのよ」

「理子？峰理子か」

峰理子。確かアメリカに依頼で飛んでいた、探偵科の奴だ。同じクラスだったかな、通常授業には全く出ていないからわからん。

「そうよ、その理子。そいつが一緒にどろb」

「アリアー!!それは部外秘だ」

「ああ。つまりはアルセーヌ・リュパンの四代目であるところの峰理子が結成する泥棒チームに誘われたといったところか」

「———」

どうした、そんな呆然として。

「な、ななななんでわかるのよ!!と、盗聴してたんじゃないでしょうねこのヘンタイ!!」

なんでヘンタイ扱いされにやなんのだ。

「か、かか風穴!!」

「風穴？」

「げ、願よけろ!!」

アリアがガバメントを引き抜いてこちらに向けて・・・四発、かな。撃ってきた。

「だが当たらない」

虎徹で切り裂く。そしてそのままガバメントのスライドをはずし、マガジンを引き抜いたら・・・アリアさん怒った。

「風穴アアアアア!!」

日本刀でどうやって風穴開けるんだ？そう思いながら二本の小太刀を一閃して切断。その特徴的なおでこにXD-9を突きつけた。虎徹は首に押し付けながらキンジの目の前に突きつけて。

「「がつ?!」」

「勝った」

そういいながら武器を下ろし、部屋に戻る。すると中にはいつの間にか・・・。

「りっこりんできっす」

「帰ってくれ・・・」

峰理子がいた。

「理子ね、相談事があるの。だから首を掴んで玄関から投げ出そうとしないでお願いだから」

「お前体軽いな・・・ちゃんとももの食べてるのか？」

片手で持ち上げられるくらい。

「うん、もの食べてるよだからアリアに合図しないで」

「何を言ってる、ただ俺は通りかかった友人に挨拶しただけだ。友人が銃を持ってこっちに向けてるのは偶然だ」

「どこが?!」

「全て」

そういいながら玄関とは反対側に投げ捨てる。アリアに向けて「ニッコリ」笑いながらドアを閉めた。

その後、理子がガクガク震えながら寮に帰ったことは言うまでも無い事故である。

「萩原君、ここいいかな」

「おう不知火。勝手に座れや」

次の日の食堂にて。俺は久しぶりに食堂で飯を食っていた。俺と遼、柚梨佳と翠。あとは近くのテーブルにキンジとアリア。

「不知火、峰さんが帰ってきたってホントか？」

「うん。帰ってきてたよ。授業に出てなかったつけね萩原君たち」

そう。俺たちは授業に出なくてもいいことになっている。そりやそうだ、専門以外の成績では白雪と並んで俺が一位、遼、翠、柚梨佳が一点差で三位だからな。そしてランクはVランク二名、Rランク二名だ。特別扱いされるのは言うまでも無い。

「でも明日のテストは受けるぞ？」

「・・・なんで？」

「そりや卒業できなかったらアレだし、学力は落としたくないからな」

「だったら授業に出ようよ」

その苦笑交じりの言葉にうるさいの一言で返し、俺は席を立った。

その日の放課後。俺の部屋で四人で談笑中。

「それにしても・・・理子ちゃん元気そうだったね」

「そうだな。それが唯一の救いか」

理子の過去についてはすでに洗っている。そのトラウマがあるのかどうなのかわからない。

「アリアちゃんは・・・どうなのかな」

「荒れてるんじゃないか？」

「容易に察しがつくのが怖いぞこら」

ちなみに俺たちの前には焼きプリンがある。これ、結構うまい。
「さて、明日のテストに対する自信は？」

「アンタには勝てない。絶対」

「それは不変の事実だ」

「それはそうと」

「」「逃げるな」「」

トップは辛いね（キリッ

さてさてやってきました体力テスト！！現在リタイア式持久走で
トップを爆走中なのは俺とタカ、レインの三名であります。遼はその
後ろで適当に流している。適当といっても豪い速いが。

「くたばれよタカ、レイン！！」

「自衛隊員として負けられねえ戦いなんだよ！！レイン落ちろ！！」
「落ちないよ？！なんで俺が落ちなきゃならないの？！」

周回差を何回つけているかわからないが、キンジが目を剥いて俺
たちを見ている。

「ば、化け物だ・・・」

「獣・・・いや、あれは・・・」

先生、もう止めてよ。

「よしおまえらもうやめろ！！」

最近殺気で蘭豹を動かしている気がするの俺だけ？

「はぁ・・・終わったな」

「ああ・・・同点か」

「オール10でよく言うよ・・・」

「「上官と部下の熾烈な争いだ」」

「もう二人がわからない！！」

レイン。男には負けられない戦いがある、そう俺に教えたのはお
前のはずだ！！

「教えてないよ？！」

「あ、アンタたち・・・？ちょっと数値見せて」

「」「はい」「」

「?!」

アリアが驚いている。まあ、高校二年生平均の十倍とか平気で出しているしな。

「化け物・・・!!」

「褒め言葉として受け取っておく」

「「褒めてねえ（ないわよ）!!」」「」

ちなみに遼と争ったら微妙に俺が勝っていたぞ。わーいわーい。

このとき、俺は知らなかった。まさか、この後の小テストで――
|。

第24話 泥棒、か

情報科の視聴覚室に入ると、教壇には小夜鳴先生が立っていた。女子生徒に囲まれている彼を尻目に適当に席に着く。

「相変わらず美形だよなあ・・・」

確かに垢抜けてるし、ダーティーな感じはしないよなあ。そう徒然と考えつつ先生を眺めていると、彼は俺の顔を見て「あは」と笑った。俺が眺めているのに気づいたのだろうか。俺は会釈すると当てもなく視線をさまよわせ、長机においてある彼が作った『遺伝』に関するテストを眺めていた。VTR見なくても出来るような問題だ・・・。しかしVTRを見ておかなければ不審に思われるに違いない。

『遺伝。親の形質が子に伝わる遺伝——』

「ギー君」

「どこから湧いたか!!」

声のした方を見ると、いつの間にか隣に峰理子が座っていた。つか、ギー君って誰だ!!

「“はぎわらげん”の『ぎ』だよ？」

「知るかボケ!!というより貴様さっきまでキンジにゾッコンだったろうが!!」

今は強襲科のテスト時間だぞ、なんで探偵科がいるんだ!!

「えゝ、キーくんは絡んでくれないからつまんないのゝ」

上目遣いで言われても俺は絡まないぞ。絶対痛い目を見るからな。そんなことは聞いてないだろうが・・・」

「ねね、ギー君って泥棒に興味ない？」

「ない」

犯罪行為にはうんざりするほど手を染めてきてゲフンゲフン。いえ、俺は潔白ですよ？

「むむうゝ。ツレないねえギー君」

「ツレるツレないじゃない。そもそも犯罪行為に勧誘すること自体が間違つて——」

「みーちゃんのスリーサイズ」

「よろしい。この件はこれで手打ちだ」

理子に囁かれた瞬間に俺は彼女の手を握った。翠の弱点があればあつたほうがいいからな。あと遼にも売りさばける。

「ふふふ。みーちゃんのスリーサイズは・・・これだあ!!」

ババーン、と理子が広げたのはレポート用紙。そこには翠の体の精細な写真が——つて!!

「どこがスリーサイズだバカ!!これじゃまるで」

「正当な報酬だよ?」

「どんなことやらせる気だよ!!」

翠が見たら泣き叫んで飛び降りるか首を吊るだろう。そんな写真が幾枚も貼られたレポート用紙と引き換えの泥棒作戦だ、並大抵のものじゃない。

「それはおいおい話すよ。それより・・・今夜、空いてる?」

「非常に幸運なことに用事がある。貴様の誘いには乗れないな」

「レポート用紙、貼りだしちゃうよ?」

そう脅しをかけてくる理子。しかし、すでに手は打つてある!!

「貼りだしたら泥棒作戦は白紙だ。全力で阻止させてもらうからな」

「意地悪」

「意地悪結構」

翠の貞操に比べたらこんなこと。そう決意した瞬間を狙ったのか、照明が再び灯った。おお、少し眩しいな。

「はい、テスト開始です。終わったら持ってきてくださいね」

先生がそういった時には、もう俺はテストを提出して部屋の外にいました。

雨が降っていた。どんよりとした雲が空を席卷している。その下

で俺は走っていた。理由は至極簡単。傘がないからである。さて、今そんなかわいそうな俺の横をタカが高笑いしながらバイクで通り過ぎていったんだが……。殺していいかな。

「タカ。後悔させてやるよ……」

そう言つて、俺が構えたのは漆黒のデザートイーグルである。しかしスライドに付けられたレールにはM68エィムポイント社レッシュドットサイトが装着されている。よし、タカの背中が見えた。

「俺の拳銃^{DE}での絶対半径^{キリング・レンジ}は――」

セフティを親指で押し上げる。

「――80メートルだ!!」

50AE弾の実質射程距離が80メートル。だからこの銃を使う人間の中では最高である。落ち着いて引き金を引く。反動と共に放たれた50AE弾は狙い違わずタカの背中に直撃した。タカの体がガクリと揺れる。

「――て、願!!おまえいきなり何てことしやる!!」

「文句があるなら俺をバイクに乗せてくれ」

「意味が皆目つかめない上にこのバイクは2ケツ出来ない!!」

「使えない奴だな」

「使えないと言つな――!!」

タカの悲哀きわまる叫び声が東京湾に響いたのだった。

「ん?何だこの紙」

第3男子寮、俺の部屋にて。俺は制服のポケットにいつの間にか入っていたメモを広げていた。

『ギー君 明日の正午にここに来てね』

「……早速呼び出しか」

おそらく、理子が行うという『泥棒』の作戦会議だろう。自分のテリトリーである秋葉原でそれを行う辺り、この会議は理子が主導権を握ることになる。——主にアリアは圧倒されるだろう。

さて翌日。秋葉原にていきなり合流した俺にキンジとアリアは驚きを隠せていない様子。

「な、なんでアンタがいるのよ!！」

「理子に呼ばれた」

「・・・」

こらそこ。なぜ黙る。

「行くわよ・・・」

「ああ・・・」

たかがこんな店、マフィアの本部じゃあるまいしそんなに警戒することもないだろうが。

「願、アンタも銃を抜きなさい」

「刀で行く」

「・・・」

そして、キンジがドアを押し開けた瞬間。そこには桃色の空間が広がっていた。まあつまり？

「……………」お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様!」「……………」

……………ううわけだ。非常に理子らしい。

第25話 俺の戦妹、それは化け物

さて。メイド喫茶での話しはするまでもあるまい。理子の計略に乗せられたキンジとアリアは紅鳴館で執事とメイドをやるそうだ。俺はといえばブラドが出てきた場合に迎撃および排除が任務だそうで、常時理子の部屋にある監視ブースに詰めていなければならないそう。戦場のスナイパーじゃあるまいし、そんなことを二週間もやってられるか。まあ、そんなことは今となってはどうでもいい。今の懸案事項はだな・・・。

俺に勝手に付けられたという戦妹を探し出すことだ。

確か、そいつはレキ並みの狙撃手だと聞いたが・・・どこにいますんだ？そう思いつつ俺は取り敢えず狙撃科の建屋に入ってみた。そして驚嘆することとなる。

「こりゃあすげえ・・・」

まずきちんと整頓されていること。強襲科とはエラい違いだ（薬莢が転がっているのが当然、場合によっては榴弾が転がっていることもある）。撃ち合いがないためか壁や床に新品同然である。

「さすがスナイパーの根城——」

「何をやっている萩原。ここは狙撃科だ」

咎めるような洪い声が聞こえたので振り向くと、そこには狙撃科の鬼の南郷がいた。特殊作戦群でも通用するような狙撃の腕前を持ち、銃はSR15をスナイパー用に徹底的に改造した南郷スペシャル。さらに生徒が背後に立っただけで手刀でその生徒の骨を折ったという伝説を持つ、まさにスナイパーの鑑——つか、もうゴルゴ13って認めるよ。

「戦妹を迎えに——」

「ああ、萩原の戦妹なら——おお、走ってきたぞ」

南郷がナイフ（なぜナイフ）で示した方を見ると、ああ確かに女子が一人走ってくるのが見えた。その女子の背負っているちよつと大きめの黒いバックパックには見覚えがある。米軍特殊部隊との合同演習のときにカリフォルニアの銃工場で見た、分解すればスナイパーライフルが入るタクティカル・バックパックだ。中にはおそらくネメシス・アームズのミニ・ウィンドランナーが収納されているのだろう。

「萩原先輩、すみません遅れちゃって」

「ああ、それは別にいいんだが……」

小さい。それが最初の感想だった。大体柚梨佳と同じくらいだろうか。違つとすれば全体的に凹凸が少ないシンブルアリアのようなお体をゲフンゲフン。

「萩原先輩だ」

「美優ちゃんいいなあ」

そんな一年女子の羨みの言葉。

「美優ちゃん……かわいそうに」

「あんなオーラを経験するなんて……」

二年女子の哀れみの言葉。そして——

「あの野郎、ついに狙撃科にまで手を出してきやがったか!!」

「次はどこに手を出すつもりだ?!!」

「C研かもしれないぞ!!」

こらこらその二年男子諸君。そんなに殺されたいのかね?

「先輩、取り敢えず訓練をお願いします」

「ああ。じゃあ——レキ!!」

そう呼ばわると、野次馬の壁がモーゼのなんたらみたいに真つ二つになった。その真ん中をレキが歩いてくる。いつもこんな感じが、ああそうか。この学校にマトモな所は一つとしてないのか。

「なんでしょうか」

「お前専用のレーンを貸してくれ」

俺がそう頼むと、レキは隣の戦妹を値踏みするような目で見た後に――

「・・・わかりました」

と不服そうに答えた。

「さて。名前から聞こうか」

「はい。前瑞美優です。クラスは1―Cで――」

「待て、となると希と同じクラスか？」

俺の問いに美優は頷いた。

「はい、希ちゃん――風蓮さんとは仲良くしてます」

「そうか――んで、何で俺に？」

「えと、神埼アリア先輩に――」

「そうかぁ・・・。アリアかぁ・・・。」

「アリアな。薦められたのか？」

「いえ、勝手に決められました」

「かわいそうなことをさらいと言う美優。」

「・・・後で復讐だ。一緒に来いよ、美優」

「はい。萩原先輩の戦妹はうれしいですけど絶対に許しません」

そんなこんなで、勝手にアリアの命は失われることと相成った。
ざまあ。

「じゃあ・・・取り敢えず、あの的を撃ってみてくれ」

あの的「ニキ口先の米粒。」

「はい。じゃあ――」

そう言っただけ美優はバクバクを開けた。中に入っていたのはやはりミニウィンドランナー。バイポッドの自由度が限りなく高いそ

の銃は、まだまだ第一線ではないものの使いこなせば尋常でない長距離射程を誇れる。しかし何故か、そのミニウィンドランナー、バックパックから出した瞬間にバネ使って一気に組みあがったんだが、何で？

「平賀さんお手製の・・・」

ああ、違法改造。俺も結構魔改造してもらってるからなあ・・・。そう軽く黄昏ているうちに、美優はゼロインを終わらせたようだ。

「撃ちますね」

「——撃て！！」

・・・驚いた。はつきり言おう。コイツは化け物か。

「米粒に当たった・・・?!」

「はい、当たったと思いますが・・・」

うむ、アリアの観察眼はなかなかだな。許しはしないが。

「・・・Rランク級だな」

「狙撃とアルカカタ、ナイフ戦だけですけどね・・・」

それでも大したものだ。コイツ、なかなか役に立つかもしれない。魔改造のし甲斐があるというものだ。——さあ、行くでしょうか。

その後。神崎・H・アリアという武偵が男子寮の一室で倒れているのをキンジが発見したという。ちなみにそのときの服装は・・・メイド服であった。

第25話 俺の戦妹、それは化け物（後書き）

次回。美優の変態ぶりが発揮されます。

あえて言おう。度し難い変態です。

第26話 変態と事情聴取と鷹の目・・・と。

「アリア先輩?! 大丈夫ですか?!」

神崎先輩に教育調教したすぐ後。一人の女の子が遠山先輩の部屋に入ってきた。間宮あかりちゃん。私と同じ1-Cの『強襲科?』落ちこぼれ。

「ご、ごめんなさいい・・・」

「何があつたんですか、何で謝るんですか?!」

どうやら萩原先輩のお仕置きが思いがけず効いたようで、神埼先輩の口からは謝罪の言葉と荒い吐息しか出されていない。

「と、とりあえず遠山先輩!! 救護科を・・・!!」

先走りすぎたね、あかりちゃん。私は心の中でそう嘲ると、再び引き金を引く。一回、射線を切り替えてもう一回。放たれた銃弾は見事にあかりちゃんと遠山先輩の首筋を掠め、壁に突き刺さった。レキ先輩から盗んだ狙撃手独特の暴徒制圧手段で遠山先輩とあかりちゃんはその場に倒れ伏す。そして私の視界の中から動くものはいなくなってしまった。

「よくやるな。まさかレキの技を盗むとは」

「一回だけでしたが、カモメを落としていたのを見つけたんです」
「なるほどな」

萩原先輩はスコープを手にとって遠山先輩の部屋を覗いている。暗視スコープではないようだけど、それで大丈夫なのだろうか?

「大丈夫だ、問題ない」

ネタに走らないでください!!

「—————それにしても、何であんな正確に?」

インターン
「武偵高付属中学で頑張ったんです」

独学ということか・・・? 伸びが速いようだな・・・。

「それはそれとして、萩原先輩!!」

「なんだ?」

女優がキラキラした目をして俺の目を見る。・・・翠や柚梨佳だつたら襲っていたかもしれないな。

「私のことも『調教教育』してください!!」

「なんだって?!」

いきなり何を言い出すかと思えば、それはそれは変態チックなお言葉だった。

「み、女優?それはだな、この関係でやることじゃない——」

「バレなければいいんですよ」

いや、バレる。相手が綾瀬だつたら絶対にバレる。賭けてもいい。バレたらバレたで、逆に合法的に出来るじゃないですか!!」

「変態なくせに理屈っぽいぞコイツ!!並みの変態じゃないな!!」
場慣れしている変態だ。性質タチが悪い!!

そんな騒ぎがあつた翌日。俺は理子から『大泥棒大作戦』のありがた〜い詳細を受け取り、今寮に帰ろうとしている。

「はあ・・・雨か」

梅雨の時期はいちいち憂鬱になるよなあ・・・そう思いつつ俺は音楽室の前に差し掛かった。すると中から話し声。無粋なことだ、と思うも暇なので盗み聞きしてみた。この声はキンジだな。あともう一人は・・・。

「ジャンヌ・ダルクか・・・」

司法取引を済ませたのか?そう疑問を抱きつつ俺は音楽室にお邪魔した。

「ちいっす」

「「んな?!」」

そんなに驚くなよお二人さん。特にジャンヌ。なぜ涙目。
「なななぜお前がここにいる?!」

「武偵高の生徒だから」

「自衛隊員じゃないのか?!」

「それは、まあ、そうだけど」

キンジの背中に隠れている。キンジはあたふたしているな、面白い。ちよつといじるか。

「さあゝて。星伽さんに聞かなきゃならないことがあるから電話しなきゃな」

「!」

肩を面白いように跳ねさせるキンジ。冷や汗が一瞬でダラダラである。

「ま、まて願!!白雪は今電話に出られない!!」

「???..そうか、なら仕方がないな」

安心したように目を閉じるキンジ。

「電話に出られないほどに《ピ————!!》なことをしたのか...。最低だな」

「遠山...見損なつたぞ!!」

「いやいや、何で考えがそっちに走る?!俺は何もしていないし!

!しかもあれに関しては俺が被害者——」

「ほほう。何の被害者なのかな?」

ニヤリと悪役のように笑いつつキンジの顔を覗き込む。冷や汗が尋常じゃないくらいに出ている。

「遠山、吐いたほうが楽だぞ?」

ピアノの上にデスクランプを置いて、その光を顔に当てるジャンヌ。その顔もニヤニヤしている。つか、取調室じゃないだろここは。

「あ、あゝ、そ、その、だな。あれは、単なる——」

「「単なる?」」

「——あ、遊びだ!!」

その発言に俺とジャンヌは驚愕する。こ、この野郎...!!

「き、貴様...女性の『初めて』を、あ、遊びで奪ったのか?!」

「侮蔑しきれない!!この男、まさしく絶倫!!」

「は、初めて？意味がわからん！！」

「しらばつくれるな！！」

再び怒鳴る取調官二人。

「あ、ありえん・・・」

キンジの精一杯の嘆きが、それであった。

「で、何を話していたんだジャンヌ」

「ああ、ブラドのことを、な」

「ブラド・・・無限罪か？」

ワラキアの鬼、だったか？俺はかすかな記憶をたどる。

「そうだ。そいつには弱点がある」

「おいおい、俺に話していいのか？」

微笑みながらそういうと、ジャンヌも笑いながら答える。

「お前なら安心だからな。神崎のように暴走する心配はないし、遠山のように弱くもない」

最後の言葉は絶望に打ちひしがれているキンジに向けられている。キンジはいまや血の涙を流して床を殴っていた。・・・キンジえ・・・。

「まあ、確かに」

あえて追い討ちをかけてやる。バーカバーカ。ひれ伏して泣き叫ぶがよい。

「萩原。お前、私の技も使えるのか？」

いきなりなんだ。あせってお前のスカートをめくりそうになったじゃないか。そして首元にまるで銃を向けられているような鋭い殺気を感じるじゃないか。携帯を出して、あるところにかける。

「・・・美優、か？」

『・・・？！よ、よくわかりますね』

「何で俺を見張っている？」

電話口にそう問うと、彼女は困ったようにこう呟いた。

『・・・あかりちゃんが、先輩を倒したいと・・・』

「だから先に無力化しておいてくれ、と？」

『いえ、頼まれたのはあくまで“鷹の目”です』

そうか、ならば・・・。

「間宮。おまえこんな寒いところで何をしている」

「・・・!!」

いきなり撃ち込まれたのは9ミリパラベラム弾。あのMicro UZIか。

「戦うつもりかな？」

「当然です!!アリア先輩の仇!!」

「ひゃっはああ!!楽しそうだぜ!!」

「あかりちゃんのためなら誰とでも戦います!!」

一年生三人か。蹂躪になるが、いいよね？

第26話 変態と事情聴取と鷹の目・・・と。(後書き)

すみません・・・私の限界がこれです・・・ガクリ。

願

「変態か？」

翠

「いや、変態だからね?!」

美優

「えへん」

願

「誇れないよ？わかってるか美優」

美優

「・・・変態はステータスです」

願

「知らんがな」

願の回答が出来ました。活動報告をご覧ください。

ちなみに次の回答者は翠と柚梨佳です。

第27話 戦いは早く終わるもの。

「間宮。お前の技は確か相手に触れなければならないんだっ たな」

「な、何で知ってるんですか?！」

驚いて髪を逆立てる間宮。ギャグ漫画かお前は。

「何故って・・・」

「この技って、私の家にしか伝わっていないもののはず——」

「それ、俺の使ってる技の原型の派生系なんだよ」

そう。間宮家に伝わる暗殺術『鳶穿』は、萩原家の格闘術の派生系なのだ。
バリス・オリジナル
マイナーチェンジ

「な、なんですって?!」

驚くのも無理はない。『バリス・オリジナル』の原型となっている技はCIAやMI6、FOX HOUNDなどで採用されている近接拳銃格闘術『ガンIIカタ』である。ちなみにその技をさらに実戦的に、スマートにしたのが『アルIIカタ』、そしてその上級が『銃道』。そして最終的にたどり着くのが『弾舞』・・・俺しか極めていない技である。まあそれはさておき。

「だから俺も今では『鳶穿』を使える」

「・・・!!」

イクニッシュベスト

『瞬間機動』。俺の猿真似だろうか。この技の特徴である亜音速状態からの攻撃は出来ないようだが、さすがにこの速度での『鳶穿』には対応できない。

「チツ」

だから——。

「・・・え?!」

逆に突っ込んで、その運動エネルギーをそのまま間宮の肝臓や肩口に叩きつけた。軌道を変えて吹っ飛んでいく間宮の手には何も握られていない。『鳶穿殺し』は成功したようだ。

「あかり・・・!!」

大柄の女子生徒がF A Lを構えて突っ込んで来る。放たれた銃弾は計四発。

「見切りが甘いようだな、後輩」

一発の9ミリパラベラム弾で銃弾をはじく。軌道を変えられた一発が他の銃弾の軌道も変え、すべて俺の体から逸れていった。しかし一難去ってまた一難。俺の横にはものすごく長い刀を持った黒髪の女の子がいる。

「……クロスショット十字銃撃」

「敵対者が幾何学的な配置であるならば、その行動は統計から予測できる」……とは誰が言ったのだったか。取り敢えず、俺は袖から仕込みデリンジャーを出して、前にいるF A L女子と横にいる日本刀女子に向けて放つ。その一瞬後には使い物にならなくなったデリンジャーをそれぞれに投げつけ、一瞬視界を奪う。その隙にX D - 9を二挺ともセレクターをフルオートにし、引き金を引きつつ周囲を警戒する。いいように翻弄される一年生のほかには誰もいない。

『アルIIカタ』や『銃道』がクロースサジット バリツ近接拳銃格闘術なら、今俺が強襲科の全員に披露している『弾舞』はオールレンジサジット キリング全距離拳銃殺人術だ。まず『殺人術』とか言ってる時点で武偵が使う技じゃない。

「すげえ……」

「銃が見えないどころじゃねえぞ……」

「え?! いまどうやってあの一番遠いところの奴倒した?!」

マンシルエットが撃ち倒される。複雑怪奇に入り乱れた銃弾の軌道を銃弾で制御し、さらにその銃弾さえも銃弾で弾いて目標にぶち当てるこの技に必要なのは、膨大な計算を速やかに—— およそ人が一瞬と呼ぶその刹那の時間に—— こなすほどの高い計算能力と経験。その他にも運動センスや銃撃の精度は当然求められる。アリアとかキンジなら『銃道』くらいまでならマスターできるかも知れ

んな。

「まさに・・・舞、か」

鳳凰院朱雀

「だね。武偵高最強を倒したほどの奴だもん」

「もう戦妹はいるんだよね・・・はあ・・・」

最後に二つの銃口の向きをそろえて一発ずつ撃ち、残心をとる。

『タイム、01:12。目標への命中率百パーセント。民間人やデブリへの誤射無し。萩原願、Vランク』

テストが終了したようだ。どうやらまたVランクらしいな。書類上ではSランクだが。

「か、神崎さんや伊椎さんでも誤射なしで百パーセント、しかも約一分でなんて出来ないぞ・・・!!」

「あやつは化け物か?！」

「化け物じゃない、アイツは最早毘沙門天じゃないか?！」

こらあ、いつの間に俺は武神にされてんだあ?

「願先輩、凄かったです!！」

「化け物め・・・まさかあんな芸当をデザートイーグルでやらかすなんて」

「・・・なんだと?!」「・・・」

希の言葉にかぶせるようにかけられたタカの言葉、それに強襲科が揺れた。・・・面倒だな。

「んで、何でここに来るんですか?」

「キレイで居心地いいし」

今俺は狙撃科にお邪魔している。・・・ふと思ったんだけどさ、狙撃銃で『アルIIカタ』つてできるのかね?

「無理無理・・・と言いたい所ですけど・・・」

「出来るのかよ・・・」

バレットライフ

俺も『弾舞』をM82A3でやれと言われたら泣ける自信しかな

い。それをやりやがるかコイツ。俺の戦妹、半端ない。

「願！！アタシと勝負しなさい！！」

「出たな諸悪の根源！！」
神崎アリア

狙撃科を汚したくないので一瞬で片付けた。具体的に言うと、距離を『瞬間機動』で詰めながらXD-9を引き抜いて撃つと同時にガバメントをバラして吹き飛ばしつつ銃弾が直撃したアリアの肩口を正拳で突いた。

「ぶぎゅ！！」

変な声を出してすっ飛んでいくアリア。しかし転がっていく間に小太刀を引き抜いていた。いつも思うが、よく折られてるその刀はどこで買っているんだ？まあいいや。取り敢えず・・・一閃、と。

「わ、切れ味いいですね」

「まあ、はつきり言つて『妖刀』だし」

スツ、と軽く振るだけで抵抗なしに劣化ウランが切断できるくらいである。刃こぼれ？ナニソレオイシイノ？

さて、本日は6月13日です。今日は理子先輩の考案した作戦の実施日で——希ちゃんとの合流の日でもあります！！ふふふ・・・どんなにたずらを・・・アハハハハハハ——はっ。

「美優。そっちのスイッチを入れてくれ」

「はい。入れました」

「おう・・・それにしてもこんな機材どこから仕入れやがった・・・？」

確かに気になるなあ・・・。コンソールは完全にタッチパネル式のキーボードだし、ありとあらゆる監視機器のデータがここに集約されているし。よくわからないけど、この『横浜09』って・・・。「自衛隊の監視ネットワークにハッキングか・・・やりやがるな」「え?!」

驚きました・・・まさかそんなことまで・・・。

「手口からすると、綾瀬か？ちよつと尋問拷問してくる」

「私に何をする気？！」

あ、霧矢さんだ。隣には桂さんと伊椎さん。あとは・・・同志遼さん！！

「ちよつとO H A N A S H Iしようかと」

「怖いよ？！」

「願先輩？どうしたんですか？」

あ、希ちゃんだあ・・・ふふふ。

「みゃあああ？！」

「ふふふ」。なかなかな代物をお持ちのようですね・・・」

「さ、前瑞さきみず変態！！」

鷹山先輩は失礼なことを言ってくるし。戦妹が責任を取るべきだよね。

「にゃあああああ！！」

もお、希ちゃんも逃げなくていいじゃん。

「美優。言いたいのはこれだけだ——」

あ、まずった。うす寒いところじゃない、シベリアでも汗をかけそつなほどに部屋が寒く、冷たくなる。あ、コンソールの機器の計算が異常に速くなった。

「さつさと監視任務に入ろうか」

「「「「「「「は、はい！！」「」「」「」「」

萩原先輩の圧倒的な威圧感で、この監視任務は始まりましたとさ。

第27話 戦いは早く終わるもの。(後書き)

美優・・・変態。

願

「そつだな。美優は変態だな」

美優

「にゃにiiiiiiii?！」

第28話 多勢に無勢・・・?? (前書き)

後書きにアンケートがあります!!ご協力ください!!

第28話 多勢に無勢・・・??

「模擬戦しましょう」

「そんな『デートしましょう』的なノリで言うなよ」

監視任務に入ってから早二日。監視をレキと理子に任せて翠と外を歩いているときのことである。

「よく考えたら私と願は戦ってないと思う」

「おいおい・・・メタなことを・・・」

とはいえ、俺が翠と戦っていないのは本当だ。一回サシで戦ってみるか・・・。

今思えば、この選択は間違いだった。

「おいコラ、なんでライフル、しかもG3を使おうとしてる」

「え？」

翠は冷や汗ひとつかかずに首を傾げる。その頭がコツンと肩にかけているG3に当たり、痛そうに頭を抱えて座り込んでしまった。

「痛いよぉ」

「・・・天然なのか何なのか・・・」

とりあえず・・・うん、瘤は出来てないな。だったら特に——
うおっと!!

「ひっかかったあゝ」

その言葉と同時にG3から7.62ミリ弾が発射された。狙いは俺の肝臓だったか・・・。おそらく一瞬で決めようとしたのだろうが、見切りが甘かったな。

「甘いぞ翠」

「そっちもだ!!」

いきなり耳に飛び込んで来た男の声に驚きつつ、そちらに意識を一部振り向ける。あの声はタカ。おそらく構えているのはデルタエ

リート——10mmオート弾を使用するデルタフォース専用の銃
——だろう。トリガーが擦れる刹那の音を聞き取った瞬間、俺の
体は弾かれたように前に——翠のほうに動いていた。意表を衝か
れた翠がG3を向けてくる。それに右腕を巻きつけて射線の切り替
えを阻害しながら左手で肝臓があるだろう部分にXD-9を押し付
ける。翠は流麗な動きでそれをいなし、スフィックス・モデル30
00を向けてきた。G3を払い落とし、蹴り飛ばしながら左手に持
つXD-9で翠の射線をずらしつつ自分の射線を得ようとする。そ
れは翠も同じで、結果として二人は銃の弾きあいを行っていた。し
かしこうなつては他から狙い撃たれる。そう考えるまでも無く右手
にはコルトパイソンを握られていた。それでデルタエリートに向け
てきているタ力を威嚇。跳弾を利用して希のデトニクスを弾き飛ば
した。

「一対多数とは・・・やつてくれるな、翠！」

「それほどでもないわ・・・よ！」

翠が喋ったことで彼女の重心が少し動いた。それを逃さずに格闘^{バリ}
術で一気に転がす。その寸前に翠の腕ごと拳銃を脇に挟み込んでい
たから、必然として銃は俺の後ろに落ちることになり——翠は丸
腰となる。立ち上がりながら驚いたのも一瞬、すっと目を細めた翠
に俺は容赦なく9ミリパラベラム弾を撃ち込んだ。

「うああああ・・・」

口から泡を若干吹いて倒れる翠。しかし後ろに立っていた柚梨佳
はその手にあるSAAから無数の銃弾を発射した。それらは翠の遺
志（いや死んでないぞ？）を継ぐように俺の心臓を狙っている。ラ
イフリングで削られた表面が引き起こす微妙な気流の乱れを計算に
入れつつ、俺は真ん中を飛ぶ一発に向けて9ミリパラベラム弾を放
った。その軌道を若干逸らした9ミリ弾はその上を飛ぶ銃弾を下か
ら弾き、その軌道を変えらるとともに自らも軌道を変えた。そのまま
吸い込まれるようにSAAに向かう9ミリ弾は何にも邪魔されずに
SAAを弾き飛ばした。そして俺に狙いをつけていた銃弾は互いを

弾きあいながら狙いを俺から逸らして、俺の後ろで特殊警棒を振りかぶっていた希に直撃した。銃弾が防弾制服を打つ音から鑑みるに、放たれていた総数はざっと40を超えていただろう。

「いつ・・・!!」

希の臓腑から空気が押し出され、たまらず体をくの字に折った希。その首にパイソンのグリップを振り下ろし、希を昏倒させる。XD-9で柚梨佳を執拗に狙い撃ち、その傍らタカや光稀の奇襲に備えていると、空気を引き裂くような音が一瞬鳴った。耳元で鳴ったそれはおそらく、308 Winchester弾が狂飛する音。射手——美優は二発めをはずさない女だ。

「ったく・・・数が多すぎるんだよ!!」

そう叫び、銃を収める。そして迫り来る銃弾。やはり胴体を狙うそれを指で挟む。コンマ一秒にも満たない刹那の時間、それを挟んだまま軌道を逸らすように手を振るう。指甲・掌甲を施したCFGが銃弾とこすれあい火花を散らす。そして指の間からすり抜けた銃弾は——今にもデルタエリートを引き金を引きそうだったタカを直撃した。そのまま流れるような動きで腰の虎徹を抜き放ち、凄まじい速さで迫ってくる光稀に向けて居合いを放つ。

通称、燕返し。

「っ!!」

咄嗟にナイフを引き抜いた光稀はナイフの腹でそれを防ごうとするが、虎徹の切れ味と音速を超える刀の速度でナイフは呆気なく碎け散った。その衝撃を殺しきれずに後ろに吹き飛ばされる光稀をデザートイーグルで狙撃。そして猫のように逃げ回っていた柚梨佳に対しては圧倒的な速度で接近しながら『破神』で何十発も銃弾を撃ちこんで止めを刺した。

「・・・疲れた・・・」

Sランク相当とRランク相当の武偵。それらをまとめて何人も相手するのはさすがに応えた。遠がいなくてよかった、と改めて思う。「レインたちがいたら最悪だったな・・・。ひよつとしたらやられていたかもしれない」

通常モードでアイツら全員と相手するのは無理だ。HSSじゃないとな。まあとにかく、俺は理子の部屋に戻ることにした。ちなみに敗北者は救護科に放り込んでおく。美優は俺が銃弾を指でいなした瞬間にプライドを粉々にされて蹲っていたが。

「願さん。早速ですが問題がおきました」

「レキか。何があった」

監視ブースに戻ると、レキが珍しく冷や汗をかいていた。

「セキュリティが強化されました。ハッキングは難しくなりそうです」

「ふむう・・・仕方ないな、俺もあっちに行くかな？」

最後の言葉は理子に向けた質問である。理子は少し考えた上で、こう言ったのだった。

第28話 多勢に無勢・・・?? (後書き)

願は紅鳴館に行ったほうがいいでしょうか・・・？

期限は日曜日の更新までとさせていただきます。

ご意見お待ちしてます!!

第29話 潜入と願(?)の本気(前書き)

願くん絶賛暴走中です。

第29話 潜入と願(?)の本気

紅鳴館への潜入、および個人資産の奪還。これが今回の任務である。

「さ、先輩、到着しましたよ」

「ああ・・・」

横浜の郊外にある紅鳴館の周囲には、かねてから自衛隊の監視施設が点在している。それに加えて今回は横須賀の自衛艦隊司令部に協力を仰いだ。その内容は『緊急事態発生時に輸送ヘリコプターを借用する』というもの。その他にも上空では航空自衛隊の早期空中警戒管制機やFユニット情報中隊所属の偵察衛星が電子の網を張っている。

「・・・よし、行きますか」

「そうだな。行こう」

美優が俺の先に立って歩く。俺は美優の斜め後ろで周囲に警戒の視線を送るが、何も見えてこない。

（——こちら現場本部。不審電波およびそれに該当するいずれも観測されていません）

情報中隊

（ICより入電。偵察衛星にも不審な物体は観測されていないとのことです）

首に這わせた骨伝導マイクと、耳に這わせたスケルトンのイヤホン。まるで特殊部隊の出入りだな。

「・・・こんにちは、人材派遣会社のほうから参りました者ですが・・・」

美優が冷静に対応する傍ら、俺は銃を片手でチェックしていく。どれにもおかしいところはない。

「どうぞ入ってくださいといわれました。入りますよ?」

ドアノブに手をかけて一気にドアを押すと、ドアは簡単に開いた。玄関のホールはそれなりに大きく、壁には家紋がかけられている。

あの刀剣と盾の紋章は——ドラキュラ家のか？趣味が悪いな……。

「紅鳴館へようこそおいでくださいました、淑女お二方」

「管理人様直々のお出迎え、感謝いたします。小夜鳴先生」

そう。俺は今——女装をして、『萩原のぞむ』としてここにいるのだ！！

「それにしても、メイド服なんてはじめて着るわね……」

今、私はメイド服に着替えている。女装するときにもいつも発現するのだけど、何故か女装しているときは胸まで大きくなってしまふ。下のほうは……き、聞かないでください／＼

「わあ、先輩お似合いですよ」

「うふ、ありがとう」

……もし願としての精神が残っていたら、精神が死ぬでしょうね……。発言の記憶は捏造しておくわ、願。

「それにしてもお……えいつ!!」

「んに?!」

美優が胸をもみ始めた!!わわ、慣れない感触だなあ……。

「なんでこんなに大きいんですか?!」

「ホルモンバランスまで女の子になりきってるからかもね」

完璧な女装。究極の女装が行き着く先は、やはり本物の女性なのだろうか。

「アンタたちが新入り？」

「はい。よろしく願います、神埼先輩」

扉を開けてこちらを覗いている女の子はアリアちゃんだった。

「……アンタ……そこまで……」

「ふふっ」

アリアちゃんが愕然としていたけど気にしない。キンジ君が目を剥いていたけど気にしない。

その夜。女装のまま男に戻ってしまった俺（容姿はのぞむのままだが・・・）は、付近に展開している海兵旅団と連絡を取っていた。海兵旅団の現場作戦本部に出向している横田が応対してくれている。「それで？そっちの状況は？」

（すこぶる悪いですね。今総力を挙げて侵入しようとしてるんですが・・・壁や窓はドリルを通さない材質ですし、壁のいたるところに吸音材や熱を遮断する建材が仕込まれていますから内部への監視も不可能です。窓ガラスは反射率が高い物を使っていますし、衛星が観測したデータでは屋上に通信妨害装置も――）

「物理的な侵入はまず不可能、というわけか」

（はい。警備システム専門のクラッキング班が動いてくれますが、やはり作戦期間中でのクラックは難しいと・・・）

「・・・アポトシス？は？」

（・・・それなら、約三時間で制圧可能です。しかし、それで制圧したとしても突入手段が――）

アポトシス・シリーズ。その由来は米軍が冷戦期に開発した生物兵器である。その人体破壊作用が異常に速いことから、プログラムの破壊および制圧が異常に速いウイルスであるこれにその名前が付けられた。

「・・・突入は俺がやる。いいな」

（了解）

「――と、言うわけなんだよ」

（・・・カッ・・・）

（す、すげえ・・・）

（さすがはのちやんだね！！）

（ふえー、仕事が速いです・・・）

携帯でそのことを報告する。皆一様に驚いていた。

（じゃあ、キーくんとあのちゃんて突入してね!!）

「OK」

（あ、ああ・・・）

そして、作戦決行日がやってきた・・・!!

第29話 潜入と願(?)の本気(後書き)

のぞむ

「ふふふ・・・どう？私の本気は」

翠

「私がメイクしておいてあれだけど・・・負けたわ・・・」

柚梨佳

「というより、何で胸が大きくなってるの?！」

のぞむ

「ホルモンバランスが女の子っぽくなっちゃうんだってさ」

翠

「軽く言うけどね・・・。それって、つまりは変装よ？何でメイクを落としても女の子？」

のぞむ

「今は女の子だから」

第30話 奪回と包囲と戦闘開始！！

「キンジ君、チャンスは一回だけよ？」

「あ、ああ・・・わかってる」

赤外線可視化ゴーグルを着用し、潜入任務に使うスニーキングスーツを着込んだキンジ君にそう伝えたと、私は地下金庫の正面に立った。キンジ君は遊戯室に向かう階段を登っていく。

「・・・アポトーシス・プログラム、起動」

網膜認証などのパネルが埋め込まれている壁。そういう壁には警備会社が使ったメンテナンスハッチが必ずある。それは壁紙やパテで巧妙に隠蔽されてはいるけれど、今の私には兎戯に等しい。ハッチに取り付いて解除プログラムに偽装したウイルスを流し込めば警備システムの無力化は出来る。

「・・・第一層の無力化に成功。セキュリティプログラム消去、自動迎撃コマンドの所属の書き換え、監視カメラデータの一部消去を終了。侵入可能」

（・・・OK。侵入する）

「こちらからも侵入します。感圧床と赤外線は別立てのシステムになっていましたから、再びクラックを行います」

災害時、警備システムは完全に無力化される。如何に扉が硬かろうと、単なる自動ドアであれば脅威は皆無。感圧床に反応しないように『あるもの』を構える。

「・・・照射」

赤外線。赤外線同士は互いを邪魔することがないためこの方法が取られた。かなり小型のこの機械にはデータ受信機と赤外線励起装置が搭載され、データを『赤外線の波長を操作することで』やり取りすることが出来る。携帯電話に搭載されている赤外線通信の強化版と思ってくればいい。

（——システム良好。接続しました）

「OK」

（・・・感圧床のシステムは三つのダミーがあります。ダミーをク
ラックした場合、システムがシャットダウンされるとともにその部
屋は・・・サリンで覆われます）

「・・・悪質な・・・」

（それだけじゃないようです。侵入先のリストを確認しました。警
察庁サイバー部、防衛省技術研究本部サイバー兵器開発部門の二つ
です）

「アポトーシスの耐性データ・・・？」

（はい。これらを手に入れられた場合、現代の技術では侵入が不可
能になります）

「・・・」

（さらに、アポトーシスを『培養』するシステムもあります・・・）
「もういいわ。あなたの見立てではどのシステムがダミーだと思う
？」

（・・・恐らく、1と3かと）

小夜鳴は遺伝子学者だ。彼は優性遺伝子吸血鬼にこだわる傾向がある――

――そういう内偵結果が救護科に潜入した翠ちゃんからなされてい
る。そんな彼なら、優性遺伝子をあらわす1を選ぶ・・・しかし、
彼は狡猾だ。キンジ君が遭遇したコーカサスハクギンオオカミは小
夜鳴先生が日本に秘密裏に――ワシントン条約に違反して――

連れてきた、とされている。レキさんの手からとれたオオカミハイマキの血
のデオキシリボ核酸と日本飛来時のDNAが一致したことから推測
されていることではあるけれど・・・。そして彼は自分の飼い犬に
手を噛まれた。いや、『噛ませた』。そんな演技が躊躇なく出来る
彼のこと。人間中庸を示す2をあえて選んでも不思議ではない。

「私も同じ考えよ。じゃあ、2をクラックして」

（了解です）

私が構えている機械が少し駆動音を上げる。

（・・・完了。各政府機関システムに異常なし）

（こちらキンジ。バットはモールになる）

「了解」

天井の一角が開き、キンジ君が顔を出す。私は彼に手を振って、

「Good luck」

と言うと踵を返したのだった。

横浜ランドマークタワー、屋上ヘリポート。俺たち四人組は理子と対面していた。

「理子。作戦は完了した」

「ふっふっ！！やっぱりのちゃんは凄いね！！」

「・・・ああ、まあな」

のぞむモード。女性特有の勘が俺が持つ頭脳とうまく作用して絶大な演算能力を産み出す。しかし弊害としては――。

「お、アリア」

「・・・へ、ヘンタイ！！風穴あ！！」

周りから変態扱いされること。

「キンジ、何とかしろ」

「無理だ」

「薄情者」

そんな漫才をやっていると、非常階段のほうから物音がした。

「願先輩！！お疲れ様です！！」

「よ、願」

「やはり完璧にこなしたか、願よ」

上から希、タカ、光稀。彼ら三人衆が階段を上がってきた。

「・・・役者はあと、レインたちだが・・・まあ後で来るだろう」
「そうだね。じゃあ、十字架を」

キンジを顎で示す。キンジの手の上には青い十字架。色金が微量に含まれている色金合金。それだけで世界最大の企業ですらも買い取れてしまう、そんな代物。それをキンジは理子の首にかける。

「キーくんっ」

「なんだ、理子」

そして、理子はキンジの頬に・・・。

「り、りりり理子！！か、かかか、風穴あ！！」

「アリア、落ち着け。理子はどうせ逃げられない」

しかし理子は状況を見誤った。何せここには神話クラスの強豪が四人いる。キンジがHSSになり理子の味方に回ろうとも、この四人でなら赤子の首をねじ切るように殺すことも可能だ。

「ふふふ、この十字架はリュパン家の秘宝なんだよ。理子のお母様が言ってた。リュパン家の全ての財産を売り払ってもおつりが来るほどのものだって」

「・・・そうか。しかし理子よ。その十字架を取り返したとしてもだ・・・」

俺の言葉とともに、翠と遼、柚梨佳がそれぞれ理子を包囲する。

「・・・俺たちからは逃げられないぞ。1cmでも動けばお前の頭に風穴が開く」

俺の言を証明するように、これ見よがしにレーザーポインターの光が閃く。どこから狙っているのかはわからないが、おそらく理子を狙っているスナイパーはワンショットキルのためにM24A3で狙いを付けている。

「脅しは効かないよギー君」

「なら試してみるんだな。その腕が吹き飛ばばわかるか？」
ツインテール

その言葉と同時に後ろに回っていた手を、さっと軽く上げた。その刹那、俺の耳のすぐ横を7・62×51弾が通過した。その銃弾

は理子のツインテールを結っているリボンに黒い焦げ目を残すだけだったが――その焦げ目は『90度に』曲がっていた。

「――！」

「・・・願。理子を殺すつもりか？」

「逃がすつもりはないということを教えたまでだ。それに、どうあがいても逃げられない状況に追い込まれたようだな」

キンジの冷やかな質問に答えつつ、神速でXD-9を引き抜いて影に向けて撃つ。着弾の火花に一瞬だけ照らされた影から伸びてきたのは、スタンガンからつながるコードだった。

「TNKワイヤー・・・！！」

銃弾で断ち切れないワイヤー。虎徹でも怪しいかもしれないそのワイヤーを、基から切断したのはやはり遠距離から冷静に状況を見つめる美優だった。

（大丈夫ですか、先輩）

「ああ。心配ない・・・。さ、こそこそしないで出てきてください、小夜鳴先生」

その俺の言葉に、屋上は一瞬騒然となった。

「やはりばれてしまいましたか・・・先に殺しておくべきでしたね」
「いや、その判断をしなくて正解でしたよ。そんな判断をしていたら逆にあなたが死んでいた」

小夜鳴の失笑交じりの繰り言に脅しを乗せて返す。すると彼は哄笑し始めた。

「萩原君は私をご存知でしょうか？その私を殺すと？」

「・・・今のあなたなら、ですがね」

たとえば小夜鳴が心臓疾患で急死しようとも、誰も気にすることも

ない片付け方をする。それを出来てしまうのが国家だ。そして国家の尖兵の俺は、国家を動かすノウハウを知っている。

「たとえ特殊作戦群がかかってきても、私が一言彼を呼び出せばすぐに壊滅しますよ」

「それは認めよう。だがそうなったら必ずやそのことは公表される。正体不明の生物が出現した、とね。自衛隊の特殊部隊が壊滅したが、それは不意打ちだったからだ。自衛隊の総力を持ってかかれば――」。世論の後押しを受けて、日本はあなたを排除する。その尖兵は俺かもしれないし、交渉に応じたイ・ウーのリーダーかもしれない」
「・・・自信過剰は危険ですよ」

ふいに殺気を感じた。この感覚は知っている。HSSへ切り替わっていく、そんな純然たる殺気だ。

「私にも仲間がいますね。ご紹介しますよ」

そして、介入してきたのは新たな殺気。ひとつだが、それはあまりにも強い。

「ブラッドさんです」

「ブラドと掛けたつもりか？下手なしゃれだ」

「ちよつと待て、さつきから出番が――」

タカがKYなセリフを突っ込んできたが放っておく。

「さあ、かれが、きたぞ」

「・・・ようこそ、死の楽園へ」
「タカ君、光稀ちゃん、希ちゃん、美優ちゃん。ブラッドをお願い」
（「」「了解」「」）

第30話 奪回と包囲と戦闘開始!! (後書き)

敵のブラッドは888さんからお借りしました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8650v/>

緋弾のアリア ～黒と紫の邂逅～

2011年10月29日14時07分発行